

日本武道学会第59回大会 研究発表抄録

期 日 令和 8 年 9 月 9 日 (水) ・ 9 月 10 日 (木)

会 場 東北学院大学五橋キャンパス



(公財)仙台観光国際協会

日 本 武 道 学 会

Japanese Academy of Budo



会長就任と 59 回大会開催にあたりまして

明治大学 国際日本学部 長尾 進

このたび、令和 8 年（2026）4 月をもちまして会長（令和 8 ～ 10 年度）に就任させていただきました長尾でございます。就任にあたり一言ご挨拶申し上げます。

日本武道学会は、昭和 43 年（1968）2 月 3 日に設立されました。昭和 39 年（1964）オリンピック東京大会における柔道の採用を契機とした内外からの武道への関心の高まりや大学における武道学科設置等の社会情勢のなか、正力松太郎・日本武道館初代会長は「青少年の武道の振興をはかるためには、新しい時代に対応する優秀な指導者の養成が欠かせない。その一環として武道の学術的研究が必須である」と学会の発足を強く要請しました。これに呼応する形で高校・大学の武道関係教員や各種武道団体の研究部門が中心となって本会が設立されたと聞いております。爾来 58 年が経ちましたが、その間いくつかの困難な時期も乗り越え、令和 9 年度（2027 年度）中には 60 周年を迎えます。この間の学会運営に当たられた方々や学会を支えていただいた皆様に、心からの御礼を申し上げる次第です。

任期中に迎えます 60 周年事業を成功に導くことと、学会運営の実務をお願いする酒井新理事長をはじめとする新執行部の方々のお仕事をサポートし、会員の皆様の研究活動発表の場としての体制をさらに整備していくことが課せられた責務と思っております。具体的には、①国際展開して久しい「武道」の再定義、②他学会・他領域との交流促進、③若手研究者の研究支援体制の確立、④社会からの学術的要請への対応等が、これからの武道学会に求められることと考えております。とくに④に関しましては、（公財）日本武道館が中心となって武道の国内文化財への申請（将来的にはユネスコ無形文化遺産への申請）が計画されていますが、学術的見地からの助言をすることを通じてこれに協力して参ります。また③の一環として今年度大会より「優秀発表賞」と「若手研究相談コーナー」が設けられました。

なお、今年度の学会大会は 59 回目を迎えますが、東北学院大学で開催をお引き受けいただきました。阿部実行委員長、濱西副実行委員長をはじめとする実行委員会の先生方やご関係の皆様にご大変お世話になります。何卒よろしく願いいたします。会員の皆様におかれましてもふるってのご参加を期待しております。

最後に。浅学非才ではございますが、会員の皆様のご協力を得て、より魅力的で開かれた学会にしていきたいと考えております。ご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

令和 8 年（2026）7 月



日本武道学会第 59 回大会の開催に寄せて

東北学院大学 学長 大西 晴樹

日本武道学会第 59 回大会が東北学院大学で開催されますこと、開催校を代表しまして心より歓迎申し上げます。また本学での日本武道学会の開催は、2000 年第 33 回大会以来のこと、仙台によろこそいらっしゃいました。

私どもの東北学院大学であります、その前身はちょうど 140 年前に仙台神学校として誕生しました。横浜バンド出身の日本人牧師押川方義とアメリカ人宣教師ウィリアム・ホーイによって設立されました。その 5 年後に仙台神学校は North Japan College「東北学院」と改称し、その後キリスト教普通教育の中等教育、高等教育の学校として成長します。この地に撒かれたアメリカ文化は、キリスト教に基づく人格教育を建学の精神とする個人の尊重の気風として花開き、2023 年芥川賞を受賞した佐藤厚志、女優の鈴木京香、声優の山寺宏一、ロック歌手の大友康平等個性豊かな人材を輩出してきました。

東北学院大学は、2023 年に都心へのキャンパス統合を断行すると同時に、地域の課題、時代の要請に沿う形で 4 学部を新設し、現在は、9 学部 15 学科に 1 万 1 千名の学生を擁する総合大学へと成長しております。学生の 9 割以上が東北 6 県からの入学者であり、卒業後も 6、7 割が東北地方に残るとというのが、地域に根差した大学としての本学の特徴であります。

他方、武道に関する正課・正課外の教育研究も活発に行われており、柔道部、剣道部は百有余年の歴史、それに 60 有余年の歴史をもつ弓道部が加わり、武道の盛んな東北地方を背景に、すぐれた成績を全国大会においても残しております。余談になりますが、木村拓哉主演のドラマ『教場』の武道場は、本学泉キャンパスの体育館がロケに使われております。今大会の会場は、五橋キャンパスであります、地下鉄直結のキャンパスであります。自慢は 1000 人収容可能な押川記念ホールのフランスのアルフレッド・ケルン社製パイプオルガン、図書館に AL の設備を合体したコラトリエ・ライブラリーであります。これにより、アクティブ・ラーニングの設備の利用者がキャンパス統合前の 3 倍近くに増大し、喜んでいるところであります。

末尾になりますが、本大会の成功と、日本武道学会のますますの発展を祈念しまして、会場校挨拶とさせていただきます。



ご挨拶

仙台大学 学長 高橋 仁

日本武道学会第59回大会が、関係各位のご尽力により宮城県仙台市において開催されることを心よりお慶び申し上げます。本大会は、2000年の第33回大会以来2度目の東北開催となり、今回は仙台大学が主管校、会場校を東北学院大学が担当して開催いたします。

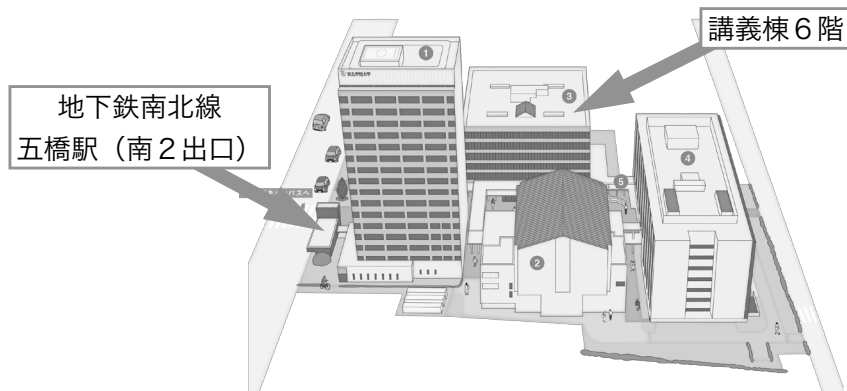
仙台大学は、体育系単科大学として昭和42年に開学し、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の比重を置きつつ、建学の精神である「実学と創意工夫」（創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る）に根ざした広い教育研究領域を探索することを本願としています。そして、現在では、体育学科、健康福祉学科、スポーツ栄養学科、スポーツ情報マネジメント学科、子ども運動教育学科、そして現代武道学科の6学科で構成されています。その基本理念は、「スポーツ・フォア・オール」であり、スポーツは健康の人のためだけではなく、乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで、そして性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみることが好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究する大学として東北地区はもとより全国に人材を送り出しています。

こうした中、現代武道学科は、武道を応用展開し、「社会の安全」に資する人材の養成を目指して設置されました。具体的には、「教育現場において武道を介して安全教育をも併せて担当できる専門指導者の養成」（保健体育科教員、武道指導者など）、「武道の応用展開としての社会の安全・安心を担う基幹的な人材養成」（警察官、消防士、皇宮護衛官、刑務官、自衛官、警備会社警備員など）を、目指す人間像として掲げています。本学科が開設されたのは2011年4月、まさに東日本大震災の年でありました。あの災害によって、誰もが社会の安全・安心に対してどのように立ち向かえるかを問われる中で立ち上げられた学科でした。被災当時の記憶から自らも社会の安全・安心のために役立ちたいという思いをもち、現代武道学科に入学した学生も多数おります。あの大震災から15年が経過した節目の年に、宮城県において本大会が開催されますことは、本学としても大きな意義を感じているところであります。

結びに、本大会の成功と日本武道学会のますますの発展を祈念しご挨拶いたします。

<会場案内>

東北学院大学五橋キャンパス講義棟



	9月8日（火）	9月9日（水）	9月10日（木）
L601 講義棟		一般控室	一般控室 弓道専門分科会
L602 講義棟		大会実行委員会控室	大会実行委員会控室
L603 講義棟		大会委員会準備室	大会委員会準備室
L604 講義棟		人文社会科学系A会場	人文社会科学系A会場 空手道専門分科会
L605 講義棟	理事会・評議員会	人文社会科学系B会場	人文社会科学系B会場 人文社会科学系若手研究相談 なぎなた専門分科会
L606 講義棟	役員控室	役員控室	役員控室
L609 講義棟		自然科学系会場	自然科学系会場 自然科学系若手研究相談 少林寺拳法専門分科会
L610 講義棟		武道指導法系会場	武道指導法系会場 武道指導系若手研究相談 障害者武道専門分科会
L614 講義棟		クローク	クローク
6階ラウンジ		ポスター発表会場	ポスター発表会場
L401 講義棟		基調講演 シンポジウム	日本武道学会総会

＜大会への参加にあたって＞

【理事会・評議員会、懇親会について】

会場：東北学院大学五橋キャンパス講義棟 L605

理事会：9月8日（火）15：00～16：00

評議員会：9月8日（火）16：30～17：30

理事会・評議員会後の懇親会に参加される方は、
会場の都合上、事前予約制となっておりますので、
学会HP上から前払い（6,000円）※の手続きをお願いします。
※学会ホームページの「会員マイページ」のメニューの「イベント」から
クレジットカード決済ができます。

懇親会会場：MEINA（メーナ）

※会場の隣 五橋キャンパスから徒歩1分ほどです

<https://meina-sendai.com/>



MEINA Webサイト

【昼食について】

押川記念館（講義棟向かいの建物）1階の「学生食堂」をご利用頂けます。

（営業時間11:30～13:30）

講義棟1Fにはコンビニエンス・ストアがございます。

（営業時間10:00～15:00）

その他、五橋駅周辺にはランチ・軽食ができる多くの飲食店がございます。

【Wi-Fiについて】

会場内ではeduroamの利用が可能です。

eduroamアカウントをお持ちの方はeduroam接続をご利用ください。

※eduroamは大学等のeduroam参加機関に所属し、

所属機関発行のID・パスワードをお持ちの方のみご利用いただけます。

eduroamアカウントをお持ちでない方を対象に、

会期中のみ会場内の無線接続を利用いただける

「ゲストアカウント」（要申込）を発行いたします。

「ゲストアカウント」発行ご希望の方は、講義棟6Fの受付へお越しください。

【その他】

会場である講義棟6Fでは電源の提供ができません（発表時を除く）。

PCやタブレット端末を長時間ご利用予定の方は、

モバイルバッテリーをご持参ください。

会場内とキャンパス周辺は全面禁煙です。

警備員が巡回しますので、キャンパスとその周辺的环境維持にご協力をお願いします。

会場内の駐車場および駐輪場は使用できません。

参加者の皆様へ

1. 参加者の受付は、以下の時間帯で行います。
 9月8日（火）理事会・評議員会 13:00～17:00
 8月9日（水）、10日（木）学会大会 8:30～15:00
- ※ 参加費未納の会員（参加申込み未登録会員も含む）、会員以外で大会に参加される方は、学会サイトの会員マイページより、大会参加費をクレジットカード決済にてお支払いください。
- ※ 大会参加章は、受付で配布されます。大会期間中必ず着用してください。着用がない場合、入場をお断りすることがあります。

会員種別	会員区分	事前割引 4月1日-9月7日	当日現地受付 9月8日-9月10日
会員	一般	5,000 円	6,000 円
会員	大学院生	4,000 円	5,000 円
会員	学部生	1,000 円	2,000 円
非会員	一般	6,000 円	7,000 円
非会員	大学院生	5,000 円	6,000 円
非会員	学部生	2,000 円	3,000 円

2. 令和8年度の会員年会費（一般会員：8,000 円、大学院生会員：7,000 円、学部学生会員：1,000 円）は、受付業務の煩雑さを避けるため大会参加者の受付では納入できません。会員サイトより、クレジットカード決済にてお支払いください。
3. 大会期間中の昼食は、押川記念館（講義棟向かいの建物）1階の「学生食堂」をご利用頂けます。また、講義棟 1F にはコンビニエンス・ストアがございます。その他、五橋駅周辺にはランチ・軽食ができる多くの飲食店がございます。
4. 宿泊が必要な場合は、各自でご手配ください。
5. 会場では、参加登録をされた方には大会プログラム（抄録集）の配布をいたします。また、学会サイト、大会サイトには大会プログラム、発表者による資料データの提供がございますので、参考にされる場合は発表会場にはPCやタブレットなどをお持ち込みください。
6. eduroam アカウントをお持ちの方は eduroam を用いたインターネット接続が利用できます。また、「ゲストアカウント」（要申込）の発行もいたします。発行ご希望の方は、講義棟 6F の受付へお越しください。

座長の皆様へ

口頭およびポスター発表の座長の皆様は、担当される演題の発表時間 15 分前までには、発表会場受付にお越しください。

＜口頭発表の座長＞

1. 発表および質疑応答時間は以下のとおりです。

人文・社会学系 発表時間 15 分 質疑応答 5 分（1 演題 20 分）

武道指導法系 発表時間 12 分 質疑応答 3 分（1 演題 15 分）

自然科学系 発表時間 10 分 質疑応答 5 分（1 演題 15 分）

2. 座長は質疑応答に際し、「質問者は、所属・氏名を述べた後、簡潔に質問するよう」にご指示ください。
3. 座長は、発表時間厳守での進行をお願いします。

＜ポスター発表の座長＞

1. ポスター発表の発表時間は、1 演題 5 分です。ご担当演題の進行役と発表時間の管理をお願いします。発表時間の管理はご自身の時計等をお願いします。
2. 質疑応答は、ご担当の演題が全て終了した後、随時、発表演者自身に行っていただきますので、取りまとめ等の業務は特段ございません。セッション終了の際、「この後の質疑応答は随時となりますので、演者の方はポスターの前で待機してください」とアナウンスし、座長終了となります。

＜優秀発表の選考について＞

1. 優秀発表賞の選考をご依頼している座長の先生方には、当該会場における優秀発表賞エントリー演題の発表について、全演題をご覧いただきますようお願いいたします。
2. 当該会場の発表終了後、選考委員会が行われますので、ご参加ください。

発表演者の皆様へ

1. 発表形式は、口頭発表またはポスター発表です。発表および質疑応答時間は以下のとおりです。
 - 口頭発表
 - 人文・社会学系 発表時間 15 分 質疑応答 5 分
 - 武道指導法系 発表時間 12 分 質疑応答 3 分
 - 自然科学系 発表時間 10 分 質疑応答 5 分
 - ポスター発表
 - 発表 5 分 質疑応答は随時（発表前、後も含む）
2. 発表の進行等は、担当座長の指示に従ってください。
3. 発表演者の変更は認められません。但し、急病等のやむを得ない事情がある場合は、大会本部へ速やかに連絡し、指示に従ってください。
4. **口頭発表者**は、発表開始 20 分前までに各会場受付で受付を済ませ、発表時間の 15 分前には次演者席で待機してください。
5. **口頭発表者**は、発表時間厳守で研究内容を発表してください。
6. **口頭発表者**でプレゼンテーションソフト（PowerPoint 等）を使用する場合は、発表資料の入ったご自身のパーソナルコンピュータを必ずお持ちください。また、プロジェクタとの接続用の変換コネクタ、電源アダプタも必ずご持参ください。
7. 紙媒体の資料等（発表で使用するものも含む）の配布が必要な場合は、会場に持参し、会場入り口のテーブル上にご提出ください。なお、残部は会場で廃棄せず、お持ち帰りくださるようお願いいたします。
8. **ポスター発表者**は、発表日の 9 時までに会場受付を済ませ、所定の場所にポスターを掲示してください。ポスターは A0 サイズ（幅 841mm × 縦 1189mm）程度までです。また、発表時間の 10 分前までには、掲示したポスターの前で待機をお願いします。
9. **ポスター発表者**は、5 分以内（時間厳守）で研究内容を簡潔にまとめて発表してください。
10. **ポスター発表者**は、質問を随時受け付けていただきますので、ご自身の発表が終わってもポスター前近辺で待機し、質問者への対応をお願いします。
11. ポスターは、2 日目のご発表の場合も 1 日目より掲示できます。掲示したポスターは、2 日のポスター発表時間終了後、ご自身で撤収してください。

「若手研究相談」の皆様へ

1. 大会1週間前までに、大会サイトから申し込みをお願いします。申し込みは、個人でもグループでも可能です。
2. 申し込みは、「人文・社会学系」、「武道指導法系」、「自然科学系」の3分野です。申し込み時に研究分野、研究概要、相談内容を提出してください。
3. 相談は大会2日目の口頭発表終了後の時間に行います。各会場にお集まりください。
4. 相談時間は、1相談あたり20分程度です。相談者は研究概要、相談内容等の資料を用意し、説明をお願いします。資料の形式は問いません。

「優秀発表賞」について

本大会では、学会大会における口頭発表およびポスター発表の中から、特に優れた発表に対し「優秀発表賞」を授与いたします。本賞は、大会発表申込み時にエントリーされた発表者を対象として選考を行います。

1. 優秀発表賞は、大会発表申込み時に本賞へエントリーされた発表者を対象として選考いたします。
2. 口頭発表の優秀発表賞にエントリーされた発表者は、大会第1日目に「人文・社会科学」、「自然科学」、「武道指導法」の3分野に分かれて発表を行います。また、ポスター発表の優秀発表賞にエントリーされた発表者は、大会第1日目にポスター発表を行います。各分野において審査員による審査を実施いたします。
3. 優秀発表賞の受賞者発表は、大会第2日の総会前に行います。エントリーされた方は、必ず会場にご参集ください。受賞者には賞状および副賞を授与いたします。

日本武道学会第 59 回大会日程表

9月8日(火)			9月9日(水)		
8:00					
9:00					
10:00			L604(講義棟) 人文・社会科学A 9演題 優秀発表賞エントリー	L605(講義棟) 人文・社会科学B 9演題 優秀発表賞エントリー	L609(講義棟) 自然科学 14演題 優秀発表賞エントリー
11:00			L610(講義棟) 武道指導法 5演題 優秀発表賞エントリー		
12:00			ポスター発表 一部優秀発表賞エントリー (6階ラウンジ) 昼食・休憩		
13:00			会場校挨拶 東北学院大学 L401(講義棟)		
14:00			本部企画 シンポジウム L401(講義棟)		
15:00	15:00～ 理事会 東北学院大学五橋キャンパス L605(講義棟)	受付 講義棟 ロビー	基調講演 講師:藤原広臨氏(京都大学医学研究科) 「武道の精神的健康増進作用に関する脳画像研究 :災害復興と脳科学からみる武道の精神力」		
16:00	16:30～ 評議員会 東北学院大学五橋キャンパス L605(講義棟)		シンポジウム 「武道による「復興支援」と心身のケア」 司会:大塚真由美氏(東海大学)、田井健太郎氏(群馬大学) シンポジスト:小崎 亮輔氏(鹿屋体育大学) 谷木 龍男氏(東海大学) 大友 崇氏(東北高等学校)		
17:00					
18:00～ 懇親会 MEINA(メーナ)			L601 一般控室 L602 大会実行委員会控室 L603 大会委員会準備室	L606 役員控え室 L614 クローク	

9月10日（木）						
8:00						受付 講義棟 ロビー
9:00	L604(講義棟) 人文・社会科学A 6演題	L605(講義棟) 人文・社会科学B 6演題	L609(講義棟) 自然科学 7演題	L610(講義棟) 武道指導法 5演題		
10:00		人文社会科学系 若手研究相談	自然科学系 若手研究相談	武道指導法系 若手研究相談		
11:00						
12:00	ポスター発表（6階ラウンジ） 昼食・休憩					
13:00	令和8年度 日本武道学会総会（L401）					
14:00						
15:00	L601(講義棟) 弓道 専門分科会	L604(講義棟) 空手道 専門分科会	L605(講義棟) なぎなた 専門分科会	L609(講義棟) 少林寺拳法 専門分科会	L610(講義棟) 障害者武道 専門分科会	
16:00						
17:00		L601 一般控室 ※午前のみ L602 大会実行委員会控え室 L603 大会委員会準備室		L606 役員控室 L614 クローク		

※各専門分科会で開始時刻が異なることがあります。

一般研究発表

第1日目 9月9日(水)

人文・社会科学系

A会場 (L604)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:00	IA-1	「武道とは何か」という問いの構造の再定位：和辻倫理学を手がかりとした本質論へのアプローチ	佐藤 雄哉	国士舘大学体育学部武道学科	中嶋 哲也 (茨城大学)
9:20	IA-2	佐藤卯吉の剣道論 —吉田静致からの影響とその変遷に着目して—	堀川 峻	環太平洋大学体育学部体育学科	
9:40	IA-3	剣術伝書におけるわざに関する言語表現についての一考察—神道用語に着目して—	軽米 克尊	天理大学体育学部	
10:00	IA-4	弓道における「真」「善」「美」に関する研究 —大正末期から昭和前半期を中心に—	萩原 秀匡	筑波大学大学院	黒須 憲 (東北学院大学)
10:20	IA-5	薩摩日置流の源流再考—本郷義則の出自とその歴史的位置—	五賀 友継	山梨学院大学スポーツ科学部	
10:40	IA-6	大日本武徳会編『第一回武徳祭報告』の分析：第一回武徳祭及び大武術会（1895年）の全容解明に向けて	矢野 裕介	愛知淑徳大学健康医療科学部	
11:00	IA-7	近代武道における修養論の展開に関する一考察	筒井 雄大	大阪体育大学	小田 佳子 (法政大学)
11:20	IA-8	夕雲流剣術から肥後雲弘流への影響に関する研究—精神性に着目して—	柴田 直生	筑波大学	
11:40	IA-9	Reconstructing Japanese Budō: Technique, Education, and Value-Based Governance	YOON SANGJIN	International Centre of Martial Arts for Youth Development and Engagement under the auspices of UNESCO	

12:00～ ポスター発表（6階ラウンジ）・昼食・休憩

基調講演、本部企画

会場 (L401)

13:00	会場校挨拶
13:15	基調講演：藤原広臨（京都大学医学研究科） 「武道の精神的健康増進作用に関する脳画像研究：災害復興と脳科学からみる武道の精神力」
14:30	本部企画シンポジウム 「武道による「復興支援」と心身のケア」 司会：大塚真由美（東海大学）、田井健太郎（群馬大学） シンポジスト：小崎 亮輔（鹿屋体育大学） 谷木 龍男（東海大学） 大友 崇（東北高等学校）

一般研究発表

第1日目 9月9日(水)

人文・社会科学系

B会場 (L605)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:00	IB-1	柔道の旗判定の意義に関する研究：対象者の拡大による再検討	成田 泰崇	国士舘大学 体育学部	奥村 基生 (東京学芸大学)
9:20	IB-2	海外における柔道教育に関する研究—フランス人柔道実践者を対象としたインタビュー調査を通じて—	田中 航太	筑波大学大学院 体育学学位プログラム	
9:40	IB-3	学校体育における武道の競争性に関する試論：他者性概念による教材特異性の検討	田井健太郎	群馬大学 共同教育学部	
10:00	IB-4	オーストラリアにおける生涯柔道の現状と課題：武士道柔道クラブの取り組みを事例に	Maja Sori Doval	津田塾大学	前川 直也 (国際武道大学)
10:20	IB-5	リバ剣における「中断と再開」—ライフスタイル構築の視点から—	井上 涼	東海大学 体育 学研究科体育学 専攻 博士課程 後期	
10:40	IB-6	大学剣道部員のアスリート・ポートフォリオ・チャート記述にみる人間形成の様相	秋山 大輔	九州産業大学	
11:00	IB-7	中国大学体育における武道の受容と変容—厦門市にみる空手の「不在」とその実態—	劉 暢	国際武道大学 体育学部	阿部 弘生 (仙台大学)
11:20	IB-8	社会経済学的観点からみた柔道場の社会的価値	中村 和裕	福山大学 経済学部	
11:40	IB-9	保健体育科が担う教育課題と剣道の理念との関係	高橋 怜央	環太平洋大学 男子剣道部	

12:00～ ポスター発表(6階ラウンジ)・昼食・休憩

基調講演、本部企画

会場 (L401)

13:00	会場校挨拶
13:15	基調講演：藤原広臨(京都大学医学研究科) 「武道の精神的健康増進作用に関する脳画像研究：災害復興と脳科学からみる武道の精神力」
14:30	本部企画シンポジウム 「武道による「復興支援」と心身のケア」 司会：大塚真由美(東海大学)、田井健太郎(群馬大学) シンポジスト：小崎 亮輔(鹿屋体育大学) 谷木 龍男(東海大学) 大友 崇(東北高等学校)

一般研究発表

第1日目 9月9日(水)

武道指導法系

C会場 (L610)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:30	IC-1	攻防を学習の中核に据えた中学校柔道授業の提案と教材開発	川戸 湧也	三重大学 教育学部	久保田浩史 (東京学芸大学)
9:45	IC-2	知的障害のある生徒の柔道経験は保護者にどのように評価されたか～特別支援学校における授業実践を通して～	岩井 祐一	仙台大学 体育学部	
10:00	IC-3	男性柔道指導者における指導の考え方を獲得するプロセスー指導経験による人間形成を目的とした指導に着目してー	柴田 大地	日本体育大学	池田 孝博 (福岡県立大学)
10:15	IC-4	空手競技のコーチング実践現場における ICT 活用の有効性	大徳 紘也	平成国際大学	
10:30	IC-5	韓国におけるスポーツ政策としての体育特技者のキャリア形成上の問題ー剣道特技者に対する意識調査を中心としてー	李 建喜	大阪体育大学	

12:00～ ポスター発表(6階ラウンジ)・昼食・休憩

基調講演、本部企画

会場 (L401)

13:00	会場校挨拶
13:15	基調講演：藤原広臨(京都大学医学研究科) 「武道の精神的健康増進作用に関する脳画像研究：災害復興と脳科学からみる武道の精神力」
14:30	本部企画シンポジウム 「武道による「復興支援」と心身のケア」 司会：大塚真由美(東海大学)、田井健太郎(群馬大学) シンポジスト：小崎 亮輔(鹿屋体育大学) 谷木 龍男(東海大学) 大友 崇(東北高等学校)

一般研究発表

第1日目 9月9日(水)

自然科学系

D会場 (L609)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9:00	ID-1	剣道指導者のための次世代型面防具の開発	糸井秀太郎	東北学院大学大学院工学研究科	高橋健太郎 (関東学院大学)
9:15	ID-2	柔道経験による前回り受身の回転的差異に着目したキネマティクス的研究	長谷川公輝	早稲田大学スポーツ科学研究科	
9:30	ID-3	柔道受身時の頭部回転運動における熟練度の影響：回転軸と衝撃方向からの検討	越田専太郎	SBC 東京医療大学	
9:45	ID-4	内股試技における運動学的特徴—試技時の条件による比較から—	濱岡あかり	東京学芸大学教育学部	石井 孝法 (NPO 法人スポーツコーチングアカデミア)
10:00	ID-5	状態遷移に基づく柔道の試合構造モデルの構築と検証	三宅 恵介	中京大学スポーツ科学部	
10:15	ID-6	開・閉眼片脚立位における柔道経験者の姿勢制御戦略—重心動揺の周波数解析から—	曾我部晋哉	甲南大学	
10:30	ID-7	異なる負荷の事前運動が柔道選手の握力に与える影響	佐々木健志	順天堂大学	與儀 幸朝 (京都産業大学)
10:45	ID-8	投の形動作評価システムを活用したフィードバック効果の検証	横山 喬之	摂南大学	
11:00	ID-9	投込人形を用いたタバタスタイルトレーニングの生理学的負荷	長谷 晃希	中京大学大学院スポーツ科学研究科	
11:15	ID-10	剣道面打ち動作における全身角運動量の生成戦略：八段と学生の比較および足部離地タイミングに着目して	村瀬 直樹	中京大学スポーツ科学部	
11:30	ID-11	空手道競技における頭部外傷に関する考察	元野 紘平	神戸大学大学院整形外科	藤田 英二 (鹿屋体育大学)
11:45	ID-12	空手道競技における上肢外傷の特徴、肩関節脱臼に注目して	島 稔樹	神戸大学整形外科	
12:00	ID-13	高齢空手道選手の日常生活活動能力に関する研究(第1報)—社会調査データの2次分析を通じて—	鈴木 浩司	日本大学松戸歯学部	
12:15	ID-14	柔道選手における日常の水分代謝と腎バイオマーカーの関連性	田窪 成将	筑波大学スポーツ医学学位プログラム	

12:00～ ポスター発表(6階ラウンジ)・昼食・休憩

基調講演、本部企画

会場 (L401)

13:00	会場校挨拶
13:15	基調講演
14:30	本部企画シンポジウム

一般研究発表

第1日目 9月9日（水） ポスター発表
P会場（6階ラウンジ）

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
12：00	IP-1	関西における武道の起源・伝播・普及に関する事例研究—相対的視点からの考察—	清野 宏樹	桃山学院大学 人間教育学部	アレキサンダー・ベネット (関西大学)
12：05	IP-2	中学校における「日本剣道形」専門剣道部設置の意義と可能性—設置に至る経緯と設置の課題について—	篠原佳代子	奈良市立二名中学校（奈良教育大学教職大学院）	
12：10	IP-3	大学柔道選手と指導者の非言語的行動の印象と頻度の認知の差異	熊代 佑輔	国際武道大学 体育学部	
12：15	IP-4	攻撃・防御的な準備動作による打突・防御反応の遅速	奥村 基生	東京学芸大学 教育学部	
12：00	IP-5	国際柔道連盟試合審判規程の更新に伴う試合傾向の変化～2025年度と2026年度選抜体重別選手権大会の比較～	伊藤海央音	東海大学 体育学研究科 体育学専攻	桐生 習作 (公益財団法人 講道館)
12：05	IP-6	テキストマイニングによる武術・武道研究の動向分析	佐藤 皓也	新潟医療福祉大学	
12：10	IP-7	武道歌1319首のトピック分析からみる剣術の思想・技術の変遷	小林 勝法	文教大学 国際学部	

12:00～ ポスター発表（6階ラウンジ）・昼食・休憩

基調講演、本部企画

会場（L401）

13：00	会場校挨拶
13：15	基調講演：藤原広臨（京都大学医学研究科） 「武道の精神的健康増進作用に関する脳画像研究：災害復興と脳科学からみる武道の精神力」
14：30	本部企画シンポジウム 「武道による「復興支援」と心身のケア」 司会：大塚真由美（東海大学）、田井健太郎（群馬大学） シンポジスト：小崎 亮輔（鹿屋体育大学） 谷木 龍男（東海大学） 大友 崇（東北高等学校）

一般研究発表

第2日目 9月10日(木)

人文・社会科学系

A会場 (L604)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9：00	IIA-1	大石神影流と心形刀流との接点	森本 邦生	貫汪館	軽米 克尊 (天理大学)
9：20	IIA-2	関口新心流に見る古伝の座法	海老塚 明	大阪市立大学 名誉教授 関口新心流東京 支部長	
9：40	IIA-3	『拳法摘要（十法）』の武術理論に関する一考察	川島 直央	北京体育大学 中国武術学院	
10：00	IIA-4	「清水寺縁起絵巻」に見られる弓矢	黒須 憲	東北学院大学	筒井 雄大 (大阪体育大学)
10：20	IIA-5	根岸流手裏剣術開眼『安中藩剣術指南役根岸松 齡伝』	早坂 義文	古武道研究会	
10：40	IIA-6	古弓史料をデータとして記録する方法に関する 研究 ―吉田大蔵に関連する古弓の記録にあたっ て―	松尾 牧則	筑波大学体育系	
11：00	若手研究相談（L605,L609,L610）				

12:00～ ポスター発表(6階ラウンジ)・昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 ～ 14:00	総会 (L401)				
14:00 ～	弓道 専門分科会 L601	空手 専門分科会 L604	少林寺拳法 専門分科会 L609	障害者武道 専門分科会 L610	なぎなた 専門分科会 L605

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

一般研究発表

第2日目 9月10日(木)

人文・社会科学系

B会場 (L605)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9：00	II B-1	女性の生涯柔道環境の構築と維持に関する考察	稲川 郁子	日本体育大学 保健医療学部	田井健太郎 (群馬大学)
9：20	II B-2	男子柔道選手に対する女性指導者のアドバンテージと特性の質的分析 ―トップアスリートの語りから―	廣木あすか	早稲田大学院スポーツ科学研究科	
9：40	II B-3	振り返りミーティング及びリフレクションノートが子どもの学びに与える影響 ―JKF ステップアップキャンプ参加者保護者アンケートの分析―	岡崎 紀創	公益財団法人全日本空手道連盟	
10：00	II B-4	THE DEVELOPMENT AND SPREAD OF TOAYAMA RYU IAIDO：RESEARCH IN PROGRESS	カーンス ハリー	慶應義塾大学法学部	五賀 友継 (山梨学院大学)
10：20	II B-5	剣道七段者における剣道の実践と Well-being の関係	笹木 春光	東海大学 体育学部武道学科	
10：40	II B-6	空手道大会における看護師向け救護実践セミナー開催の評価と展望	峯山 佳恵	日本スポーツ救護看護学会、兵庫県空手道連盟、神戸大学医学部附属病院	
11：00	若手研究相談（L605,L609,L610）				

12:00～ ポスター発表(6階ラウンジ)・昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 ～ 14:00	総会 (L401)				
14:00 ～	弓道 専門分科会 L601	空手 専門分科会 L604	少林寺拳法 専門分科会 L609	障害者武道 専門分科会 L610	なぎなた 専門分科会 L605

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

一般研究発表

第2日目 9月10日(木)

武道指導法系

C会場 (L610)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9：30	II C-1	欧州におけるスペインの剣道競技力とナショナルチームメンバーの特性について	柳田 昌彦	同志社大学 スポーツ健康科学部	小澤 聡 (常磐大学)
9：45	II C-2	日本剣道形における刀操作と足さばきの協調を再考する	有田 祐二	筑波大学体育系	
10：00	II C-3	学校体育における弓道の指導者養成に関する研究	小川 貴子	筑波大学大学院 教育学学位プログラム	
10：15	II C-4	弓道家の右肩痛への鍼灸症例から考える指導方法	三保 翔平	仙台赤門医療 専門学校	射手矢岬 (早稲田大学)
10：30	II C-5	柔道競技における背部をグリップする投技の効果と体重階級の特徴 —2025 IJF Grand Slam 男子競技を対象として—	伊藤 潔	九州共立大学	
10：45	II C-6	女子柔道選手における釣り手および引き手の握り方に関する研究	中川原知波	横浜国立大学 教育学部	
11：00	若手研究相談（L605,L609,L610）				

12:00～ ポスター発表(6階ラウンジ)・昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 ～ 14:00	総会 (L401)				
14:00 ～	弓道 専門分科会 L601	空手 専門分科会 L604	少林寺拳法 専門分科会 L609	障害者武道 専門分科会 L610	なぎなた 専門分科会 L605

※各専門分科会企画で開始時刻が異なります。

一般研究発表

第2日目 9月10日(木)

自然科学系

D会場 (L609)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
9：00	IID-1	柔道の攻防場面における運動制御：アフォーダンス競合仮説の適応可能性	高野 綺海	東京学芸大学 大学院	三宅 恵介 (中京大学)
9：15	IID-2	柔道団体戦における試合展開と待機選手間の心拍同期：「流れ」を捉える社会生理学的研究	松井 崇	筑波大学 体育系	
9：30	IID-3	石川県柔道における育成段階の評価方法の検討	近藤 俊	北陸大学	
9：45	IID-4	投の形のバイオメカニクス解析 ー背負投を例とした嘉納治五郎『形は文法』論の科学的検証ー	石井 孝法	NPO スポーツ コーチングアカ デミア	廣野 準一 (信州大学)
10：00	IID-5	裸足で稽古を行う武道競技者におけるヘモグロビン濃度の非侵襲的評価：空手道および剣道競技者を対象として	前川 剛輝	福井工業大学 スポーツ健康科 学部	
10：15	IID-6	画像処理を用いた剣道の打突動作における打撃力の非接触測定	渡邊 隆	仙台高等専門学 校 総合工学科	
10：30	IID-7	Project Kabuto - Tools/Devices for Safer Kendo	George OGAWA	Head Instructor, Stanford University Kendo Club	
11：00	若手研究相談 (L605,L609,L610)				

12:00～ ポスター発表(6階ラウンジ)・昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 ～ 14:00	総会 (L401)				
14:00 ～	弓道 専門分科会 L601	空手 専門分科会 L604	少林寺拳法 専門分科会 L609	障害者武道 専門分科会 L610	なぎなた 専門分科会 L605

※各専門分科会企画で開始時刻が異なります。

一般研究発表

第2日目 9月10日(木)

ポスター発表

P会場 (6階ラウンジ)

時間	演題番号	演 題	発表者	所 属	座 長
12:00	IIP-1	全日本学生剣道連盟の黎明 ―旧制四高「剣友」(昭和4年) から―	小田 佳子	法政大学 スポーツ健康学部	柴田 直生 (筑波大学)
12:05	IIP-2	国民スポーツ大会「空手道競技」の大会成績から見える課題:「栃木いちご一会国体・燃ゆる感動鹿兒島国体・SAGA2024」における国体の目的と開催地優勝の慣例システム(開催地優勝至上主義)の矛盾に注目して	末次 美樹	駒澤大学	
12:10	IIP-3	高段者の剣道試合に関する映像分析の信頼性と客観性の検討	池田 孝博	福岡県立大学	
12:00	IIP-4	障害者との武道稽古で得た指導者の気づき	三 苫 保久	滋賀県立大津清 陵高等学校	松井完太郎 (国際武道大学)
12:05	IIP-5	柔道授業が柔道整復師養成課程学生の学習認識に及ぼす影響(第4報) ―基礎的学習効果から臨床応用的認識への展開―	福井悠紀子	環太平洋大学 日本体育大学大 学院	
12:10	IIP-6	商業施設における未経験親子向け柔道体験イベントの受容性評価 ―地域柔道普及の入口としての可能性に着目して―	窪田 友樹	朝日大学 保健医療学部 健康スポーツ科 学科	
12:00	IIP-7	いきいき空手プログラムの作成(第1報) ―健康の維持・増進に対する空手道の可能性―	水田 洋平	伊藤整形外科	田中ひかる (近畿大学)
12:05	IIP-8	原馬室獅子舞棒術に伝承される武術的要素(第2報)	渡邊 峰雄	Hanzendon 学芸 研究所、日本薬 科大学	
12:10	IIP-9	柔術4流派486首の武道歌の計量テキスト分析から見る流派の特徴	桐生 習作	公益財団法人講 道館 道場指導 部	

昼食・休憩

総会、専門分科会企画

13:00 ～ 14:00	総会 (L401)				
14:00 ～	弓道 専門分科会	空手 専門分科会	少林寺拳法 専門分科会	障害者武道 専門分科会	なぎなた 専門分科会
	L601	L604	L609	L610	L605

※各専門分科会企画で開始時刻が異なることがあります。

日本武道学会第 59 回大会 本部企画

場 所：東北学院大学 五橋キャンパス

開 催 日 時：令和 8 年 9 月 9 日(水) 基 調 講 演 13:15～

シンポジウム 14:30～

基 調 講 演：武道の精神的健康増進作用に関する脳画像研究：

災害復興と脳科学からみる武道の精神力

講 師：藤原 広臨（京都大学）

シンポジウム：武道による「復興支援」と心身のケア

司 会：大塚 真由美（東海大学）、田井 健太郎（群馬大学）

発 表 者：小崎 亮輔（鹿屋体育大学）：柔道の稽古が育む SOC（ストレス対処能力）

—長期実践者にみる健康保持能力と“心の復興”への示唆—

谷木 龍男（東海大学）：東日本大震災における空手道を通じた草の根支援活動

—空手道とリラクセーション（自律訓練法）—

大友 崇（東北高等学校）：被災の立場からの復興と武道が果たした役割

企画の趣旨

日本武道学会第 59 回大会が、東北学院大学を会場として開催されるにあたり、本部企画のテーマとして「武道による『復興支援』と心身のケア」を掲げることにしました。奇しくも東日本大震災から 15 年の節目を迎えております。未曾有の災害により深刻な被害を被った地域社会に思いを寄せ、同時に生活の基盤の再建だけでなく、喪失や不安を抱えながらも日常を取り戻すべく力強く歩みを進めてこられた人々の「心身の復興」の軌跡を改めて見つめ直し、そこに武道が果たしてきた社会的役割を再考しようとする試みです。武道における心身の修養をとおして、私たちは、自己を律し、他者と向き合い、逆境を乗り越えようとする力を得てきました。そのような実践文化としての武道は、人知を超えた自然災害と関連の人災によって深く傷つけられた地域と人々の復興の歩みにどのように役立ってきたのか、また、今後、復興支援の観点において、どのように寄与しうるのか、多角的に検討できれば、と考えます。

基調講演では、脳科学の立場から武道の有するパワーについてご講演いただきます。続くシンポジウムでは、柔道の稽古が育むストレス対処能力に関する研究の立場から、武道が人々の心身の健康やその回復にどのように寄与してきたのかをご発表いただきます。そして、空手道とリラクセーション技法等を組み合わせた復興支援の実践についてもお話しいただき、さらには、被災地における被災者の立場からの復興の現実と武道が果たした役割についてうかがいます。総合討論で災害とそこからの復興を通して見えてくる武道の社会的役割の可能性を共有するとともに、今後、武道が社会に向けて何を発信し還元できるのかを議論したいと思います。

企画委員会：大石純子（委員長）、増地克之（副委員長）、大塚真由美、田井健太郎、松井崇、池田孝博、軽米克尊（幹事）

本部企画 基調講演

武道の精神的健康増進作用に関する脳画像研究： 災害復興と脳科学からみる武道の精神力

○藤原 広臨（京都大学）

【プロフィール】京都大学大学院医学研究科脳病態生理学（精神医学）准教授。大阪大学社会技術共創研究センター総合研究部門招聘准教授。防衛医科大学校医学科卒。京都大学大学院医学研究科博士課程修了・医学博士。日本精神神経学会専門医・指導医。剣道教士八段。現在は京都大学医学部附属病院にて精神科臨床、医学生・若手医師等の指導に従事する傍ら、生活習慣と脳科学・精神医学の関連について脳画像等を用いた研究を行っている。とりわけ武道については、生活習慣の一部である運動に包含されるものとして、その精神的健康に及ぼす効能について研究を進めている。

自然災害が頻発するわが国において、心理的レジリエンス（困難から立ち直り、適応していく力）をいかに育むかは、地域社会の復興を支える重要な課題である。演者らはこれまで、剣道をはじめとする武道の実践が心身に及ぼす影響を、脳画像研究と国際的な質問紙調査等から検討してきた。本講演では、剣道実践者にみられる心理的・脳科学的特徴および、レジリエンスの脳内基盤に関する知見を統合し、災害復興支援における武道の可能性について論じる。

剣道有段者を対象とした機能的MRI研究では、安静時には脳内のモチベーションに関わるネットワークの働きを抑え、注意課題の遂行時には効率よく賦活させるという、状況に応じたメリハリのある切り替えの特徴が見出された。さらに大規模脳ネットワーク（デフォルトモード・顕著性・中心実行の三者）を用いた解析でも、剣道実践者は課題遂行時に高い切り替え効率を示し、「不動心」を裏付けるような、外界に開かれた集中状態（マインドフルネスに通じる状態）にあることが示唆された。

欧州・日本の剣道実践者・非実践者、計579名を対象としたオンライン調査では、剣道実践者は非実践者と比較してCD-RISC（レジリエンス）、Sense of Coherence（人生への対処感）が有意に高い傾向にあった。文化差により結果の一部は日欧で異なったが、剣道の実践が国境を越えて心理的な強さの醸成に寄与しうる可能性が示された。

健常成人110名を対象に、手綱核（ストレス反応に関わる脳部位）の体積とConnor-Davidson Resilience Scale（CD-RISC）との関連を調べた研究では、手綱核体積が大きいほどレジリエンスが高いという関連が認められた。さらに、レジリエンスはこの脳部位とうつ傾向との関係を媒介していた。レジリエンスが単なる心の持ちようではなく、脳の構造的基盤を伴う特性であることを示す知見である。

以上、剣道・武道の修練は、レジリエンスやストレス対処能力を高めうると考えられる。武道は、身体技法を通してこれらを育成する日本独自の文化資源であり、その価値を科学的に検証することは、個人のメンタルヘルスのみならず、災害に強い地域社会づくりにも新たな知見を提供するものと期待される。本講演では、その伝統的価値を脳科学等の研究の視点から再考したい。

柔道の稽古が育む SOC（ストレス対処能力）
—長期実践者にみる健康保持能力と“心の復興”への示唆—

○小崎亮輔（鹿屋体育大学）

【プロフィール】鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系准教授。順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科博士後期課程修了。博士（スポーツ健康科学）。講道館柔道五段。現在は柔道を基盤とした発達支援活動である柔道療育の体系化を主たる研究テーマとしている。なお、以下に綴る一連の研究は、順天堂大学共同研究費及び笹川スポーツ研究助成（2018年度奨励研究）を受けて実施されている。

本シンポジウムのテーマである「武道による『復興支援』と心身のケア」は、東日本大震災から15年という節目に、武道が人々の復興の歩みに果たしてきた役割を問い直すものである。ここで扱われる「復興」とは、生活基盤の物理的・社会的な再建のみを指すのではなく、喪失や不安を抱えながらも日常を取り戻していく「心身の回復・再構築」の過程として捉えることができる。本発表は、災害復興支援の直接的な実践報告ではなく、柔道の長期実践が育む心理的資源、とりわけ SOC（Sense of Coherence：首尾一貫感覚、ストレス対処能力あるいは健康保持能力とも訳される）に着目し、武道が人々の心身の健康保持や“心の復興”にどのような示唆を与えうるかを論じるものである。

困難に向き合う「心の強さ」を表す概念として、レジリエンスと SOC が挙げられる。レジリエンスは、困難で脅威的な状況にさらされて一時的に心理的不健康に陥っても、それを乗り越えてよく適応する力、すなわち困難に陥った「後」に働く回復力として整理される。これに対して SOC は、Antonovsky が、極限の逆境を経験してもなお健康を保った人々への着目から「なぜ人は健康でいられるのか」を問う健康生成論の中核概念として提唱したものである。SOC は、直面する状況を秩序立てて理解できるという把握可能感、対処する資源が自分に備わっているという処理可能感、その出来事に取り組む意味があるという有意味感の三つの感覚からなり、困難な状況を把握し、対処可能であり、意味あるものとして受け止める生活世界への構えといえる。そして SOC は生得的な能力ではなく、良質な人生経験を通して後天的に形成されるとされている。復興が長期にわたる営みであることを踏まえるならば、事後的な回復力としてのレジリエンスに加えて、日常の稽古を通して形成され、困難の影響をそもそも受けにくくする健康保持能力としての SOC に焦点を当てることに、本シンポジウムにおける意義があると考えられる。

柔道をはじめとする武道の稽古は、礼に始まり礼に終わる作法、技を磨く反復稽古、投げる・投げられるという他者との身体的・心理的な相互作用、昇段制度に支えられた長期の継続性などを特徴とする。そこには自己を律し、他者と向き合い、困難を受け止める経験が織り込まれることが推測される。こうした「稽古＝修行」ともいえる実践の積み重ねは、SOC の形成要素とされる良質な人生経験や汎抵抗資源の蓄積に通じる可能性がある。

発表者は、柔道長期実践者 196 名（平均年齢 52.3 歳、平均経験年数 36.3 年）を対象に質問紙調査を行い、健康関連 QOL（HRQOL）、SOC、レジリエンスの関連を検討した（小崎・菅波、2017）。その結果、年齢が高いほど、また経験年数が長いほど、SOC および HRQOL の一部の低位因子得点が有意に高い傾向が示された。さらに共分散構造分析では、年齢が SOC に影響し、SOC が HRQOL に影響するモデルが採択された一方、レジリエンスから HRQOL への有意な影響は認められなかった。

以上を踏まえると、柔道の長期実践は、競技力の向上や身体の鍛錬にとどまらず、困難な状況の中でも健康を保持し、日常を再構築するための心理的資源を育む可能性が示唆される。日常の稽古文化をとおして人々の健康保持能力を涵養する実践文化として武道を再評価することが、“心の復興”を長期にわたって支える一つの道筋になると考えられる。本発表が、武道を長期的に実践する価値を再発見する一助となれば幸いである。

東日本大震災における空手道を通じた草の根支援活動 －空手道とリラクセーション（自律訓練法）－

○谷木 龍男（東海大学）

【プロフィール】千葉県茂原市出身。千葉県立長生高等学校および筑波大学卒業。筑波大学大学院および放送大学大学院修了。博士（体育科学）、公認心理師、自律訓練法認定士、スポーツメンタルトレーニング指導士、空手道三段。清和大学を経て、2021年度より現職。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部を中心に未曾有の被害をもたらした。本発表では、空手道を通じた草の根支援活動「Say Oss! Save Japan through Karate-Do」（以下 Say Oss!）と、その一環として実施した自律訓練法（Autogenic Training; AT）講習会を紹介し、武道が復興支援と心身のケアに果たしうる役割について考察する。

Say Oss! は、震災発生直後から全国の空手家が SNS 等を通じて自主的・自発的に連絡を取り合い、2011年3月14日に設立された。2020年3月までに約800万円を被災地に寄付した。筆者は副代表を務めた。また、AT は 1932 年にドイツの精神科医 J.H. シュルツによって創始された心理・生理的治療法およびリラクセーション技法である。筆者は日本自律訓練学会認定の AT 指導資格者である。

Say Oss! の活動は以下の 4 つに大別される。

- ①**非被災地における空手道イベント**：全日本代表選手やコーチ等を講師とするセミナーや練習会を全国各地で約 50 回実施した。流派や会派を越えて道場や選手が集う貴重な機会となった。このイベントの参加費等を寄付金の原資とした。
- ②**被災地における空手道イベント**：宮城県および岩手県においても同様のイベントを開催した。非被災地からも参加者を募り、被災地と非被災地の選手およびアントラージュ（指導者、保護者、関係者など）が交流する機会を提供した。岩手県では被災地視察を実施し、宮城県では「Say Oss! カップ」を開催した。
- ③**アメリカ遠征**：オレゴン州ポートランド市で開催される「Yoshida Cup」に日本選手団として参加し、「Say Oss! カップ」の優勝者 2 名を無料招待した。
- ④**アントラージュ講習会（AT 講習会）**：①と②の活動では、選手を対象とする空手道プログラムに加え、アントラージュを対象とする各種講習会を行った。筆者は 2011 年 10 月に岩手県、同年 11 月に宮城県で開催したイベントにおいて AT 講習会を実施した。講習会では AT について丁寧に説明し、不安が高まるなどの副作用を予防する様々な工夫を講じたうえで、AT の標準練習を実際に体験する機会を設けた。参加者は副作用を生じることなくリラクセーションを体験することができた。参加者からは「体が軽くなった」「気分がすっきりした」「ぐっすり寝た後みたいだ」「避難所に帰っても続けていきたい」といった報告があった。

Say Oss! は、全国の空手家のつながりから生まれた草の根支援活動であった。活動は選手を対象とした空手道プログラムに限定されず、アントラージュにも開かれ、AT 講習会等を通じて参加者が自らの心身をケアする機会を提供した。これらの実践は、武道が自己の心身の修練にとどまらず、人と人をつなぎ、災害復興支援や被災地の方々の心身のケアといった社会的役割を果たしうることを示唆している。

被災の立場からの復興と武道が果たした役割

○大友 崇（東北高等学校）

【プロフィール】東北高等学校泉キャンパス教頭・剣道部顧問
仙台市教職員剣道連盟副会長 剣道教士七段

2011年3月11日14時46分、東日本大震災が発生し、死者15,901人、行方不明者2,519人、震災関連死を含めると22,000人を超える犠牲者が確認された。その中で、宮城県内の高校生剣士2名が命を落とした。また、本県の高校生剣士の中には、震災により親族を亡くした者も多数いる。ここに改めて、犠牲となられた方々に対し、心より哀悼の意を表します。

家族や住まいを失い、さらには稽古の場さえも失われ、道場が避難所として使用される状況の中で、高校生剣士や指導者を含む多くの関係者は「復興」に向けて歩みを進めてきた。本シンポジウムでは、その過程において「武道」が果たした役割と、その意義について報告する。

1、震災発生当時の被害状況および被災した高校剣士の置かれた境遇は多様であった。特に沿岸部では、家族や住居を失い、避難所生活を余儀なくされた剣士も少なくなかった。当時、多くの被災者が日々を生きることで精一杯であった状況は、今なお記憶に鮮明に残る。

2、震災の現実を前に、「指導者」および「剣道人」として何ができるかを問い続けた結果、「行動」の重要性を認識するに至った。本校剣道部員に対しても、この国難を自分事として捉え、未来を担う高校剣士として主体的に考えるよう伝えた。その結果、部員からボランティア活動を行いたいとの提案があり、石巻市湊地区での活動へと発展した。

3、2011年6月4日～6日にかけて、宮城県立名取北高等学校体育館において宮城県高等学校総合体育大会剣道競技が開催された。例年、石巻市総合体育館で実施されていたが、震災の影響で使用できなくなり、大会開催自体が危ぶまれた。しかし、宮城県高体連剣道専門部委員長をはじめとする常任委員の尽力により、無観客ながら開催が実現した。

4、本大会は県内高校剣士にとって日頃の成果を発揮する最高の舞台であると同時に、人間的成長を促す教育の場でもある。しかし、震災直後においては大会に臨む思いは様々であった。「剣道ができる喜び」や「思いを果たすことの大切さ」を再認識する機会となった。

震災から15年が経過した現在、全国の剣道関係者および多くの支援に支えられ、本県は着実に「復興」の歩みを進めた。予測困難な災害が起こり得る現代社会において、「他者を思いやる心」や「困難に立ち向かう精神力」は極めて重要であり、これらは「武道」の修練を通して培われるものである。武道の根幹にある「堅忍不拔」の精神こそが、「復興」を支える大きな原動力となったと考える。

空手道専門分科会企画

空手道を通じた復興支援

2026 年は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災発生から 15 年の節目を迎え、日本武道学会第 59 回大会の基調講演・シンポジウムでは、「武道による『復興支援』と心身のケア」がテーマとして掲げられている。震災発生直後から、さまざまな武道関係者がそれぞれの立場から被災地の復興支援に取り組んできた。その活動の一つに、空手道家による草の根の復興支援プロジェクト「Say Oss ! Save Japan through Karate Do」（以下、Say Oss!）がある。

今回の空手道専門分科会企画では、「空手道を通じた復興支援」をテーマとし、Say Oss!代表の土佐樹誉彦先生を講師に迎え、プロジェクト立ち上げの経緯や背景、具体的な活動内容および支援方法について紹介していただく。また、Say Oss!副代表であり、本会理事でもある谷木龍男が、心的外傷後ストレス障害（Post Traumatic Stress Disorder; PTSD）および心的外傷後成長（Post Traumatic Growth; PTG）の概念を手がかりに、空手道による心身のケアの可能性について解説する。さらに、被災地において Say Oss!のイベントに参加した方、またはその保護者にも登壇いただき、被災地の方々にとって空手道を通じた支援がどのような意味や機能を持ち、現在の生活とどのようにつながっているのかを語っていただく。

これらの講演を通じて、空手道がもつ社会的可能性について、実践・理論・当事者の視点から複眼的に考える契機としたい。

テーマ：空手道を通じた復興支援

司会：麓 正樹（空手道専門分科会副会長及び企画委員・東京国際大学）

挨拶：鈴木 浩司（空手道専門分科会会長・日本大学）

講師および講演

1. 土佐 樹誉彦（Say Oss!代表・国際玄制流空手道連盟武徳会会長）
「東日本大震災における空手道を通じた草の根支援活動 Say Oss!について」（仮）
2. 谷木 龍男（Say Oss!副代表・空手道専門分科会理事・東海大学）
「空手道を通じた心身のケアの可能性——PTSD から PTG へ」（仮）
3. Say Oss!被災地イベント参加者またはその保護者
「被災地にとっての Say Oss!と現在の生活」（仮）

剣道文化における稽古相手のかたち
—複合現実とヒューマノイドロボットを用いた実践と展望—

日時：9月5日（土）14：00～15：30 開催形式：Zoomによるオンライン
※本企画は、大会前週に Budo World と共催でオンラインにて開催します。

講師：古田 花恋（所属 筑波大学大学院 博士前期課程2年生）

【プロフィール】平成14年三重県生まれ。剣道三段。デジタルネイチャー研究室（落合陽一研究室）にて、武道とテクノロジーを融合させた研究を行っている。

剣道をはじめとする「道」の文化において、稽古相手は単なる練習の対象ではなく、技と心を互いに磨き合う存在である。一方で剣道では「自分に負けるな、自分に打ち勝て」とも説かれ、真に向き合うべき相手は自分自身であるとも教えられる。発表者は幼少より剣道に親しみ稽古を行なっていたが、疲労骨折により競技者として一線を退いた。この経験から、体への負担が少ない稽古のあり方を探るなかで、向き合う相手を自分自身とする「自分自身と稽古する」という発想が生まれた。

本講演では、複合現実（MR）を用いて開発した剣道稽古システムを紹介する。自らの身体の動きをデータ化して取り込んだもう一人の自分、すなわちデジタルヒューマンと対峙し、稽古を行うシステムである。接触の瞬間には装着した手袋が振動し、視覚や聴覚だけでなく触覚を通じた反応も得られる。剣を交わすことのできない唯一の相手である自分自身と向き合うこの体験は、自らの技を客観的に見つめ直す新たな稽古の場を開く。

このシステムの根底にあるのは、剣道における「気」の探究である。対峙することで伝わる気迫、間合いに満ちる氣勢など、技の優劣だけでは捉えきれないこの概念を、オートエスノグラフィー（自己の経験の記述と省察）を通して掘り下げてきた研究の過程を共有する。

MR 剣道稽古システムの現場への応用可能性として、技術的な課題や想定されるユースケースにも触れる。あわせて、現在進行中のヒューマノイドロボットプロジェクトについても、その構想と展望を述べたい。目指すのは技術による置き換えではなく、人と人との稽古を、そして「道」のあり方そのものを、より豊かにすることである。複合現実とヒューマノイドが拓く稽古相手の未来像を、皆様とともに考えたい。

弓道専門分科会企画

私と弓

(日本武道学会第 59 回大会 弓道専門分科会企画)

本企画は、講演者のこれまでの武道研究および実践に基づき、弓道の本質を改めて問い直すことを目的とするものである。講演者は、弓道・弓術に関する文化的・歴史的研究を進めるとともに、40 年以上にわたり国内外において弓道の指導および普及活動を継続してきた。こうした長期的な実践と研究の往還を通して、講演者は武道を単なる技術体系や競技としてではなく、歴史・思想・礼法を内包した総合的な文化的実践として捉える立場を示している。

今日において弓道は、主として学校部活動を中心に広く実施されており、競技としての側面が強調される傾向にある。その一方で、弓道において用いられる語彙や指導法の背景、さらにはそれらを支える思想的・歴史的基盤については、必ずしも十分に理解・共有されているとはいえない現状がある。こうした状況のもとで、弓道が本来有してきた文化的意義や教育的価値が、部分的に見落とされている可能性も指摘できる。

講演者のこれまでの研究は、このような弓道指導の背後にある文化的・歴史的背景を明らかにし、現代における弓道の在り方を再考する視座を提供するものである。また、国内にとどまらず海外における指導経験を踏まえることで、弓道が異なる文化的文脈の中でどのように理解され、どのような課題が生じるのかについても具体的な知見を蓄積している点に特徴がある。これらの知見は、弓道を単なる技術の伝達としてではなく、意味や価値を伴う文化的実践としていかに継承していくかを考える上で重要な示唆を与える。

以上を踏まえ、本企画では講演者の武道研究および指導実践を基盤として、弓道を文化的・教育的実践として位置づけ、その現代的意義について検討する。とりわけ、競技化が進む現代において、弓道の本質的価値をいかに再認識し、次世代へと継承していくかという課題に対し、本企画を通して一定の方向性を提示することを目指す。

日時 : 令和 8 年 9 月 10 日 (木) 14:30～15:30

開催場所 : 東北学院大学 五橋キャンパス

予定 : ①企画・趣旨説明 五賀友継 (山梨学院大学)
②講演「私と弓」 黒須憲 (東北学院大学名誉教授)
③質疑応答

司会 : 原田隆次 (国際武道大学)

なぎなたの『手の内』を科学する
—スポーツバイオメカニクスからひも解く握りの技術—

なぎなたにおける「手の内」は、指導者が感覚的に伝えることが多く、初心者にとって習得が難しい技術の一つです。本研究会では、卒業研究において圧力センサーや筋電図を用いてこの「手の内」をスポーツバイオメカニクスの視点から科学的に分析した経験を持つ、中学校保健体育教員の佐藤愛奈氏をお迎えします。

具体的には以下の内容を取り上げます。

- ✓ 側面打ちにおける手の交差前後の握り圧の変化
- ✓ 熟練者と初級者の握り方の違い（7箇所指部位ごとの圧力分布）
- ✓ 動作時間と切先の移動速度の比較分析
- ✓ 研究知見から導かれる指導現場への応用と示唆

「感覚」として語られがちな「手の内」を客観的データで可視化することで、指導者・学習者双方にとってより効果的な技術習得のヒントを探ります。日々の武道指導に携わる実践者の視点も交えながら、科学と現場をつなぐ充実した研究会を目指します。

日 時：2026 年 9 月 10 日（木）14：00～15：30（予定）

開催方法：対面+Zoom を用いたハイブリッド開催（予定） 開催場所：東北学院大学

進行予定：

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 開会挨拶 | 田中ひかる（近畿大学） |
| 2. なぎなたの『手の内』を科学する | 佐藤 愛奈（山形市立第四中学校） |
| 3. 質疑応答 | |
| 4. 閉会挨拶 | 福田 啓子（日本武道学会副会長） |
| 司会 | 宮田 尚美（名古屋市立本城中学校） |

申し込み：参加をご希望される方は、9月9日（水）までに、申し込みフォームにて
申し込みください。

【申し込みフォーム】

*質問等は、なぎなた専門分科会事務局までご連絡ください。

なぎなた専門分科会事務局 担当：田中ひかる（近畿大学）

E-mail：nagilabo2020@gmail.com

申し込みフォーム：<https://forms.gle/Y2Uphajk8gF2JXFn8>



『複合現実(MR)が拓く武道稽古の新たな可能性』

ー 身体的制限を超え、自己・他者と向き合うデジタルネイチャー時代の稽古 ー

話 題 提 供 者 古田 花恋さん (筑波大学大学院)

コーディネーター 松井 完太郎 (国際武道大学)

日時 令和8年 9月10日(金) 14:00～

場所 東北学院大学 五橋キャンパス L610

本企画では、武道の身体知を最新テクノロジーの視点から捉え直し、稽古の新たな地平を展望します。

話題提供者の古田花恋さん(筑波大学デジタルネイチャー研究室)は、自身が怪我により通常の稽古が困難になった経験を契機として、MR(複合現実)技術を用いた稽古システムを開発されています。武道の稽古において、一人で行う素振りや形は古来より重んじられてきましたが、古田さんが構築するモデルは、仮想空間上に自己や他者を投影することで、これまでにない形での修練を可能にするものです。これは、「鏡」「写真」「動画」に次ぐ、新たな自己認識手段としての意義を持つものと理解できます。

この技術は、障害の有無にかかわらず、自己の動きを客観視し、内省を深めるための強力な一助となり得ます。急速に進むAI・デジタルネイチャー時代において、こうした試みは決して遠い未来の物語ではなく、現在と地続きの課題です。身体的な制約がある中で、いかにして武道稽古を続けられるのか。MR技術が拓く稽古の新たな選択肢について、みなさまと共に考察して参ります。

参考動画：<https://www.youtube.com/watch?v=DNLurQkVA8s>

参加無料(一般の方も参加できます)

開会時 10 分ほど頂いて障害者武道専門分科会総会を実施いたします。

ご不明な点、Zoom 中継ご希望の方は、下記松井までお問い合わせください。

Kantaro@budo-u.ac.jp 090-2240-5394



少林寺拳法の三徳を問い直す

～身体・心・社会をつなぐ武道教育の可能性～

日 時：2026 年 9 月 10 日（木）分科会総会 14:15～30 シンポジウム 14:30～16:00

場 所：東北学院大学 [対面・オンライン併用]

プログラム

【第 1 部】話題提供（14:30～15:00）

話題提供者①：原田 重徳（脳神経外科医・医学博士、三好道院副道院長）

テーマ：鎮魂行と仙腸関節～静と動の調和と「ゆっくり動く鍛錬」の身体的意義～

概 要：少林寺拳法の修練には、動的な技術鍛錬とともに、鎮魂行などの静的修練が存在する。医学的視点から仙腸関節の機能と身体操作に注目し、武道動作における身体連動のメカニズムを検討する。特に「ゆっくり動く鍛錬」によって生じる身体感覚の変化や、静と動の調和がもたらす身体統合の可能性について考察する。

話題提供者②：深澤 祐二（山梨県立大学少林寺拳法部監督）

テーマ：理解と体得のあいだ～武道教育への一提案～

概 要：現代社会では情報の過多と選択の氾濫のなかで、身体感覚と言葉が乖離しやすい状況が生まれている。少林寺拳法の修練を題材に、技術の理解と体得の「あいだ」に生まれる身体感覚・仮説形成・選択のプロセスに注目する。さらに、認知行動療法、四念所観、フォーカシング、ネガティブ・ケイパビリティといった心理学・哲学的視点を手がかりに、武道修練を自己選択と自己理解を育てる営みとして捉え直し、武道教育の新たな可能性を提示する。

【第 2 部】パネルディスカッション（15:00～16:00）

パネリスト：原田 重徳、深澤 祐二 コーディネーター：中島正樹（富士見丘中学高校教諭）
目的・趣旨

本パネルディスカッションでは、少林寺拳法の三徳（護身錬胆・精神修養・健康増進）を身体・心理・社会の三側面から統合的に捉え直し、その現代的意義について検討する。

まず、医学的視点からは、身体内部の協調運動や感覚の変化に着目し、静的修練と動的修練の統合がどのような身体変容をもたらすのかを問い直す。特にゆっくりとした動きや鎮魂行といった実践が、身体の統合や無意識的な運動制御に与える影響について検討する。

次に、心理学・教育学的視点からは、技術の理解と体得の「あいだ」に生じる身体感覚や仮説形成、自己選択のプロセスに注目し、武道修練を自己理解と意味生成の営みとして捉える。その際、認知行動療法やフォーカシング、ネガティブ・ケイパビリティといった概念を手がかりに、曖昧さの中で選択し続ける主体のあり方を検討する。

これらを踏まえ、本ディスカッションでは、三徳を固定的な到達目標としてではなく、身体・心・他者との関係性の中で生成され続けるプロセスとして再定義する可能性を探る。

あわせて、三徳は科学的に説明されるべき対象なのか、それとも身体知や体験知として保持されるべき価値なのかという根本的な問いについても議論する。

最終的には、少林寺拳法の修練を単なる技術習得の枠組みを超えた「身体を通じた自己変容のプロセス」として位置づけ、その教育的意義を明確化するとともに、現代の指導現場において何を重視し、どのように実践していくべきかについて具体的な示唆を得ることを目的とする。

「武道とは何か」という問いの構造の再定位： 和辻倫理学を手がかりとした本質論へのアプローチ

○ 佐藤雄哉（国士舘大学）

【研究の背景】

2025年の武道学会シンポジウム「自他共栄を具現化する『e 武道』の創生を目指して」において展開された議論は非常に興味深く、武道の新たな可能性を示す試みとして示唆に富んだ内容であった。しかしながら、そこでの議論を振り返ってみると、その前提となる「武道とは何か」という問いの回答が、種々の武道を横断する形で示されていただろうか。先の議論に倣えば、「electronic」という武道の発展可能性を構想する際、その足場となるべき武道の本質論が十分に議論されていなければ、発展の方向性や規範となるべき基準は個々の解釈に委ねられてしまう。すなわち、「何が武道の実践として許容され、何が許容されないのか」という判断基準が極めて曖昧になってしまうのである。

改めて、武道は我が国固有の文化として、広く社会的価値を認められている。しかしながら、その価値の根底に位置づく「武道とは何か」という問いを、他者尊重や文化的伝統といった抽象的な表現に頼らず簡潔に示すことは容易ではない。もちろん、武道の本質は身体的実践や、厳しい鍛錬を通してのみ継承されるものであり、言語化そのものを不要とする立場も理解できる。しかしその立場は、武道教育の形骸化や解釈の拡散を招く危険性も含んでいる。ともすれば、我々武道の実践者は、その専門性を深め、先鋭化させるほどに「武道とは何か」という問いに向き合う必要があるのではないだろうか。

【研究の方法と目的】

本研究は、「誰が・誰に・何を問う」という問いの構造を重視する和辻哲郎の倫理学に着目し、「武道とは何か」という問いの再定位を試みる。例えば、柔道家同士の「武道とは何か」という問いと、剣道家同士のそれとでは、想定される応答は必ずしも一致しない。仮に柔道家同士であったとしても、その問いが競技的文脈を含む場合と教育的文脈を含む場合で、ズレが生じることも想像に難くない。また、武道の未経験者、あるいは異文化圏の人々が発する同様の問いは、さらに異なる意味を含むことだろう。

このように、問いの主体の背景や客体との関係性、あるいは文脈によって意味が変容する「武道とは何か」という問いを捉え直し、その問いがいかなる構造のもとで成立するのかを明らかにすることが本研究の目的である。

【結論】

本研究は「武道とは何か」という問いへの直接的な解答を提示することを目的としたものではない。むしろ、「誰が、誰に対して、“武道とは何か”と問いかけているのか」という問いそのものに立ち戻り、その構造を捉え直すことを試みたものである。そのような問題意識のもと進めた本研究では、「武道実践という共同態の内部において、多様な具体経験を相互に照合しながら、なお成立し得る共通了解はいかにして見出されるのか」という方法論的課題に直面する。今後は上述の問題意識をもとに研究を進めていくこととするが、言い換えればその試みは、武道の本質論を倫理的に再定位するものとも言える。

【主な参考文献】

- ・ 和辻哲郎, 人間の学としての倫理学, 岩波書店, 2007.

佐藤卯吉の剣道論 - 吉田静致からの影響とその変遷に着目して -

○堀川 峻（環太平洋大学）

【目的】現代武道は「人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う」「人間形成の道」（日本武道協議会, 2008）との理念が掲げられているが、中林信二が武道（武芸）の精神性を「倫理・道徳的精神性」と「芸道的・求道的精神性」に区別し、両者の直接的な関連を否定したように（中林, 1988）、「武道（武芸）の修練は倫理・道徳の獲得と結びつくのか」という問いについては、近年でも学術的には否定される傾向にある。しかし近代以降の武道においては、「術から道へ」という理念的な展開が目指される中、特に大正期以降の哲学・倫理学の展開を背景に、武道修練と倫理との関係を理論的に基礎づけようとする試みがしばしばみられる。その中でも大正末期から昭和戦時期にかけて学校体育における剣道を牽引した佐藤卯吉は、広く哲学や倫理学の教養を身につけると共に、キリスト教にも深く帰依し、独自の剣道論を確立したことで知られている。佐藤の剣道論については、これまでキリスト教の教義との関連を中心に多く論じられてきたが、大正期以降確立する日本の近代哲学や倫理学などの議論を土台に、個人の内面的な問題として、いかに剣道の修練と倫理の獲得を結びつけたのか、という点についてはいまだ議論が進んでいない。よって本論では、佐藤がいかに剣道の鍛錬と倫理を結びつけたのかについて、近代哲学・倫理学との関連から明らかにすることを目的とする。

【方法】本論では、まず佐藤が強く影響を受けたと考えられる西田幾多郎や吉田静致の学説を中心に、大正期以降に確立する哲学・倫理学の動向や学説を把握する。その上で、佐藤が自身の剣道観について述べた大正 14 年「剣道哲理私見」や昭和 2 年「剣道研究の二方面」などのテキストを主に取り扱いながら、佐藤がいかに剣道修練と倫理の獲得を結びつけたのかについて考察する。また先学で注目されるように、佐藤はキリスト教との関連からも多くの剣道論を説いており、本論の考察の中心となる哲学・倫理学的な剣道観と、それらキリスト教的な剣道観との関連についても、佐藤の思想的な変遷に着目して明らかにする。

【結果】大正 14 年「剣道哲理私見」において、佐藤は吉田静致の『道徳の原理』に依拠しながら、特に「特殊即普遍」主義の理論に強い影響を受け、独自の剣道論を構築していた。『道徳の原理』等の著作において示されている「特殊即普遍」主義とは、個人の主観はそれぞれ異なる「特殊」な面を有するが、その主観には必ず「普遍」的な原理が含まれており、自己の内面を徹底的に掘り下げ、自身を深く理解することが、他人や社会、ひいては世界の普遍的な原理を把握することに直結すると考える倫理学説である。佐藤は当理論を援用しながら「剣道初心者は普遍を忘れたる特殊にのみ捕われて」と述べており、敵と自身の区別は自身の主観の中に立てられたもので、主観を深く認識して敵も我も普遍的な同一の存在であることを理解することで、「宇宙の根本原理」や「剣道の極意、奥義」に達することができるとしていた。また、佐藤は昭和 2 年「剣道研究の二方面」において、剣道は「宇宙の大真理に到達する一つ的手段」であり、剣道から得られる「真理」は剣道に限られるものではなく、実社会に応用可能なものであることを強調していた。つまり「特殊即普遍」主義を前提として到達する剣道の「真理」は、実社会のいかなる場面にも汎用可能なものであるとして、剣道の修練と社会的な倫理が結びつけられていた。その上で佐藤は、昭和 8 年に寄稿された「最究竟の剣道」以降の諸論稿において、上記の「哲学的剣道観の範囲」を超えた「宗教的」立場から剣道を見たとき、さらに深遠な境地に達できると述べており、「神に奉仕する態度の一つ」として行うことを、剣道の最終的な到達点として語るに至っていた。

剣術伝書におけるわざに関する言語表現についての一考察 —神道用語に着目して—

○軽米克尊（天理大学）

【序論】本研究は剣術のわざに着目し、宗教との関わりについて、武術伝書の言語表現を通して考察するものである。先学では、剣術のわざと宗教の関係性について①自身の剣術がまず前提としてあり、そのわざを理論化し、表現するために宗教の用語を借りる場合、②わざそのものが宗教思想に基づいて成立している場合、という2つのパターンがあることが明らかにされており、重要なわざに宗教の用語が関わっている点が共通していると言える。しかし、これら宗教の用語がいかに用いられているのか、その用法には違いがあるのではないだろうか。既に存在するわざの理論化・説明のための言語表現としては、わざを宗教の用語で言い換えるということから比喻表現が用いられることが多いと考えられる。実際に、先行研究においては『兵法家伝書』『不動智神妙録』にみられるわざがいかなる比喻で表現されているかが考察されており、考察の結果、基本的に重要なわざに対して比喻表現を用いる傾向にあること、著者の立場や社会的地位が反映されることが論じられている。一方で、新当流・天流を考察対象にした先行研究では、言葉を置き換える比喻表現では表し得ないわざが存在することが示されている。これはわざが成立する時点から宗教思想と深く結びついているからであり、わざそのものが宗教的要素を強く持っていると考えられる。

この仮説を論証していくにあたり、本研究では、剣術のわざと神道思想の関係性について考察を進める。なぜなら、剣術流派と宗教の関係性を見た時、神道には先述した①自流の剣術がまず前提としてあり、そのわざを表現するために宗教の用語を借りる場合、②わざそのものが宗教思想に基づいて成立している場合、という2つのパターンが看取されるからである。この点を踏まえ、本稿では（1）中世期に神道思想の影響を強く受け成立した新当流、（2）近世中期に成立するにあたって神道思想を後付けした直心影流を考察する。両流はともに鹿島神宮に祀られる武神・タケミカヅチとの関係を主張する流派であるが、その神道思想をいつから有していたかにより、わざについて語る際の表現に差異があると考えられる。以上に鑑み、本研究においては、新当流と直心影流に着目し、各伝書からわざに関する神道用語を抽出し、何のわざをどのように説明しているのかを考察した上で両流を比較し、それぞれの流派の特徴について明らかにすることを目的とする。

【研究方法】新当流と直心影流の伝書を考察のテキストとして用い、そこに記されるわざに関する言語表現について考察を行う文献研究の手法を採る。具体的な考察の手順としては、まず、各史料から神道用語によってわざについて説明している箇所を抽出し、新当流・直心影流と流派ごとに詳細な考察をする。基本的には、何のわざがどのような神道用語をもって表現されているのかを考察していく。考察の結果、見られたわざに関する神道用語を整理しつつ、新当流と直心影流両流の比較を行い、共通点や相違点について考察を行う。

【考察】新当流においては神道用語で表現されるわざが多数確認された。これらは、比喻表現で表現されるわざ、神道思想と深く結びついて成立した比喻では表現し得ないと思われるわざの両者が確認できた。一方で直心影流において神道用語をもって表現されているわざは「気当り」のみであり、国譲り神話におけるタケミカヅチが剣の切先に胡坐をかいて国譲りを迫る姿に喩えられていた。

なお、本研究は科学研究費 22K11692 の助成を受けて行ったものである。

IA-4

弓道における「真」「善」「美」に関する研究 - 大正末期から昭和前半期を中心に -

○萩原秀匡（筑波大学大学院）, 松尾牧則（筑波大学）, 小川貴子（筑波大学大学院）

【目 的】

日本弓道連盟編『弓道教本』第一巻では、弓道の最高目標として「真」「善」「美」の三箇条を掲げているが、なぜこの標語が採用されたのかといった経緯は記されていない。そこで本発表では、『弓道教本』刊行に至るまでの間に、弓道に於いて「真」「善」「美」という概念を用いて評論を行っていた事例を収集・調査し、さらに日本弓道連盟に関係する時代状況などを示す史料を踏まえ、『弓道教本』刊行に至るまでの経緯を考察することで、『弓道教本』においてなぜ「真」「善」「美」という標語を採用したのかを解明することを目的とする。

【方 法】

- ①『弓道教本』刊行に至るまでの間に、弓道に関係して「真」「善」「美」という概念を用いて、雑誌等の逐次刊行物や書籍といった出版物において評論等を行っていた事例を収集・調査し、整理・分析する。
 - ②『弓道教本』の刊行が昭和28年（1953）であることを踏まえ、『弓道教本』刊行に至るまでの経緯（文部省による学校武道の禁止及び日本弓道連盟の結成）等を確認し、『弓道教本』の刊行に際して誰のどのような意向が反映されているのかを整理・分析する。
- ①及び②の方法に基づき判明した事実を踏まえ、弓道の最高目標としてなぜ「真」「善」「美」という標語が採用されたのかといった、背景や経緯を検討する。

【結果および考察】

- ①弓道において「真」「善」「美」という標語は、大正末期には既に確認され、昭和初期には様々な機会で用いられるようになっていく。大正末期以前にも言及する例が存在する可能性も多分にあるが、今回は発見することができなかった。また、「真善美」と「真、善、美」といった表記揺れも少なからず見られ、こうしたことから、特定の人物を中心に使われるようになったというよりは、同時多発的に用いられるようになった可能性も示唆される。
- ②「弓の標準的な読本」作成の計画は昭和26年（1951）年頭から見え、執筆に「一年余」という回想から逆算すると、翌年頭には正式に着手されたと考えられる。従来、「真」「善」「美」という標語が西洋哲学由来であることから、GHQ/SCAPとの関係などを示唆する意見もあった。しかし占領期と執筆期間は殆ど被っておらず、また占領期にGHQ/SCAPが弓道を禁止すべく活動したという事実も確認できなかった。『弓道教本』における「真」「善」「美」という標語は、戦前・戦中期までの出版物や弓道界の状況を反映していると考察される。

【結 論】

戦前・戦中期までの出版物において言及していた関係者の中に、後に『弓道教本』を作成する際に中心となった千葉胤次および竹内尉がいる。竹内による一文は、「真」「善」「美」という観点が欠けているという、統一射法に対する意見を示す極めて重要な小文であり、『弓道教本』（初版）において「真」「善」「美」と三箇条書きで解説が為されている背景と推定される。『弓道教本』の執筆に関して、作成した教本の原稿に対して宇野要三郎・浦上栄・神永政吉・高木隼の4人の範士に意見を求めたところ、否定も肯定もなく無言だったと村上久が述懐している。即ち、『弓道教本』の「あとがき」に記される通り、「非常な熱意をもつ」た千葉を中心とした執筆関係者たちが、弓道界においても流行の相を呈していたことを踏まえて「真」「善」「美」という標語を弓道の最高目標として掲げたと考えられる。

薩摩日置流の源流再考—本郷義則の出自とその歴史的位置—

○五賀友継（山梨学院大学）

【研究の背景及び目的】

薩摩日置流は、近世薩摩藩において成立し、現在まで実戦的射法を継承している特異な弓術流派である。近代以降、多くの弓術流派が実戦的要素を消失していった中で、薩摩日置流は戦場を想定した射法を保持してきた。しかし、その成立過程や武術流派としての特質については未解明な点が多く、とりわけ流派形成に関与した本郷義則の実態は十分に検討されていない。一般的に、薩摩日置流は日置流印西派の系統に属するとされ、薩摩系祖・東郷重尚は印西派の祖・吉田重氏（一水軒印西）の門弟であったとされる。しかし、薩摩藩が寛政2年（1790）にまとめた『諸家芸術伝来上申』によれば、東郷重尚は本郷義則から日置流の相伝を受け、その後上洛し、印西からも相伝を受けたとなっており、薩摩日置流の成立においては本郷義則が一定の影響を与えていた可能性が考えられる。そこで、本研究は、本郷義則の出自と歴史的位置付けを明らかにし、薩摩日置流の成立過程を検討することを目的とする。

【方法】

本郷義則は、備前岡山藩・宇喜多秀家の家臣であり、関ヶ原の戦い後、秀家とともに薩摩へ落ち延びたとされる。そこで、本研究では、宇喜多家の家臣帳である『浮田家分限帳』や、『備前軍記』などの軍記史料を調査するとともに、薩摩移住後の動向については『新薩藩叢書』所収史料を中心に検討を行った。また、薩摩日置流に関係する伝書類を、鹿児島県歴史・美術センター黎明館、出水市歴史民俗資料館のほか、鹿児島県出水市の旧家において新たに発掘し、その翻刻・分析を実施した。さらに、鹿児島市・興国寺墓地において本郷義則の墓石を確認し、ひかり拓本を用いた銘文の解説を試みた。

【結果および考察】

本郷義則が薩摩に来る以前の動向については、史料上確認できなかった。関ヶ原合戦直前に宇喜多家家臣団に加わったか、敗戦後の逃亡過程で変名を用いていた可能性が考えられる。

薩摩に来て以降は、薩摩藩の公式記録に本郷義則の名が複数確認できる。さらに、死去に際しては島津忠恒（家久）から弔歌が贈られており、その記録に基づいて興国寺墓地を調査した結果、本郷義則の墓石を確認することができた。

伝書の伝系（相伝系譜）では、本郷義則の名が常に最初に記されている。このことは、薩摩日置流において本郷義則が流派の始源的人物として位置付けられていたことを示している。

さらに、薩摩日置流の目録条数は、一般的な日置流印西派の六十か条・六十三か条よりも多い。この点は、印西派成立以前の古い日置流の内容を保持している可能性を示唆している。一方で、印西の花押が据えられた伝書も確認されることから、薩摩日置流は本郷義則を通じて伝えられた系統と、後に相伝された印西系統が複合した流派であったと考えられる。

【結論】

薩摩日置流は、本郷義則を通じて伝えられた古い日置流を基盤とし、その後、印西系統の日置流の相伝を受けることで形成された流派である。特に伝書の伝系や目録構成からは、本郷義則の影響が強く残されていることが確認できた。

近代武道における修養論の展開に関する一考察

○筒井雄大（大阪体育大学）、酒井利信（筑波大学）、
大石純子（筑波大学）、村上雷多（大阪体育大学）

【研究背景及び目的】現代武道は、「人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的」（武道憲章）とし、今日では学校教育・社会教育の場において、人間教育における重要な一翼を担っている。特に、「人間形成」は武道の主たる目的として位置づけられており、1975年に制定された「剣道の理念」では、剣道が「人間形成の道」であることが明確に示されている。そして、同時に制定された「剣道修練の心構え」においては、剣道の特性を通じて「礼節」「信義」「誠」といった道徳的徳目を身につけ、常に「自己の修養」に努めることが求められている。『武道文化の探求』（2003）において大石は、「このようなことは、剣道に限らずその他の武道においても共通する内容」であると述べており、「武道の修行過程においては、技術修練と自己修養は車の両輪をなすものと捉えられ、究極的には、一つの技の中に獲得した優れた人格をも表現しようとする」特徴があると論じている。本発表では、こうした武道の特徴を踏まえ、武道による「人間形成」の具体的な方途として示される「修養」に着目し、武道（武術）と同概念が結びついた経緯について、近代武道と修養論の展開に焦点をあてて考察を試みる。

【先行研究と問題の所在】武道（武術）と「修養」の結びつきを取り上げた先行研究については、杉江正敏「近代武道の成立過程に関する研究」（1973）（1974）（1985）が挙げられる。同論考において杉江は、「明治期において武道を修養として捉えた最初は山岡鉄舟であった」ことを指摘しており、山岡が「技法よりは修養に重きを置き」、「伝統的に主張されてきた修養論的価値を個人のレベルで内在的に発展」させた点を挙げている。しかし、「修養」という用語・概念自体が、我が国において大衆化してきたのは、明治30年代以降であり（田嶋, 2016他）、武道（武術）が「修養」のための実践として位置づけられ始めたのは、山岡の没後であったと推察される。本研究では、この辺りを問題の所在とし、同時期の武道（武術）と「修養」が結びついた経緯について、先行研究やこれに関わる言説を収集・整理し考察を試みる。

【結果および考察】王成（2004）によると、「修養」がはじめて近代的意味で使用されたのは、中村正直がスマイルズ『自助論（Self-Help）』を翻訳して出版した『西国立志編 原名 自助論』（1871）であり、cultivateやcultivationの訳語として使用されたことに始まるという。その後、キリスト教に深い関心を抱く者を中心に、近代的な個人の形成のための手がかりとなる言葉として使用されるが、明治中期から後期にかけては、「伝統的な心身一元論の人間論に基づく自学自修の人間形成論の系譜」（田嶋, 2016）が台頭する。そして、公教育への「修身」教育の定着や日清・日露戦争における我が国の勝利は、儒学や禅の思想に立脚し、精神と肉体を一つの事象（「心身一如」）として捉える修養論の流れを形成しはじめた（田嶋, 2016）。同時に、現代において「修養ブーム」、「修養書ブーム」と呼ばれる社会現象も発生し、特に、新渡戸稲造『修養』（1911）は当時のベストセラーとなったことが知られている。

本研究では、同時期に設立された大日本武徳会の機関誌（『武徳誌』）に、「修養」という用語を題した言説がいくつか確認された。その中でも、1907年2月に発刊された『武徳誌』第2篇第2号には、新渡戸稲造「武士道と精神修養法」が掲載されており、『修養』（1911）が発表される以前に、新渡戸が武士道との関連から修養論を展開していたことが窺えた。本発表では、同誌に掲載された他の言説も踏まえて考察を行うとともに、「出版事業を通して修養論の大衆化に大きな役割を果たした」人物として知られる、大日本雄弁会講談社を創業した野間清治の言説・修養実践についても明らかにする。

夕雲流剣術から肥後雲弘流への影響に関する研究 —精神性に着目して—

○柴田直生（筑波大学）、酒井利信（筑波大学）、大石純子（筑波大学）、

【目的】夕雲流は17世紀中ごろに創始された剣術流派であり、技術的な「わざ」よりも精神性を重視した点に大きな特徴があった。また当流は後代の剣術流派にも一定の影響を及ぼしており、中でも雲弘流との間で強い関連が窺える。雲弘流は17世紀後半に江戸にて開かれ、江戸と肥後熊本の地にて展開されたが、特に肥後雲弘流は歴代当主が藩校（時習館）の師役に就くなど一定の評価を受けていた流派であることが知られている。先学では夕雲流と雲弘流の関連について、雲弘流の「雲」は夕雲流から取られた字であることや、雲弘流伝書の『随順抄』『三教録』らは弘流の伝書を基に夕雲流の要素が加筆されたものであること、そしてかた（組方）動作の中には夕雲流由来の技術である「相打」が含まれていることが指摘されてきた。両流の関連を検討する上でこれらは極めて重要な知見だといえるが、上述の通り夕雲流の特徴は精神性に焦点を当てた所にあり、これが雲弘流へいかに受け継がれているのかという問題については未だ検討の余地が残されている。また、先の二つの伝書は雲弘流の流派成立時に著され、当流の思想的な基盤が記されたものであることは間違いがないが、その後肥後における思想展開の様相や、これに対する夕雲流からの影響を直接窺うことは難しい。肥後の地にて高く評価された肥後雲弘流の思想に夕雲流がいかなる影響を及ぼしていたのかを明らかにするためには、従来の伝書に加え肥後雲弘流へ移って以降著されたものも対象とする必要がある。よって本研究では、夕雲流の精神性にまつわる思想が肥後雲弘流へいかなる影響を与えていたのか、またそこでどのような思想が展開されていたのかという問題について、肥後雲弘流の中で著された伝書も対象に検討を行い、詳細を明らかにすることを目的とする。

【史料と方法】本研究では、先学で取り上げられてきた夕雲流『夕雲流剣術書』『天真独露』（1686）（富山県立図書館蔵）と雲弘流『随順抄』『三教録』に加え、肥後雲弘流三代目建部帰雲の教えが記された『建部先生著述教諭之書』（1822、熊本県立図書館蔵）を扱う。具体的には、先学にて夕雲流の特徴を示す主要な思想とされてきた「相討」「相ぬけ」、「赤子」「天理（自然）」の心、「畜生心」「畜生兵法」の教えに注目し、両流で語られた内容を比較検討していく。

【結果および考察】雲弘流では、上記の内「相ぬけ」を除く全ての思想が殆どそのままの形で受け継がれており、特に「相討」に関する道義的な教えが継承されていたこと、また夕雲流にて語られた「赤子」の状態こそが「天理（自然）」に適った理想的なものであるという考えが雲弘流の示した「不思不求不願不貯不捨」な心を内面「一盃」に満たすべきという教えに取り込まれており、これが肥後雲弘流へ至っても受け継がれていたことが明らかとなった。また『建部先生著述教諭之書』には「学校方御達御座候、（中略）止むを得ず御請け仕り候」とあり、これが藩校からの要請により著されたものであることが確認された。そしてそこでは、「忠孝を守り、身を慎み、影闇事に仕ず廉直」であるという武士の基本姿勢が示される中で、これと対照的に己の利欲を満たし他者を軽んじる姿は「畜生心」だと重ねて批判されていた。以上の内容から、夕雲流の精神性にまつわる思想は肥後雲弘流での教えの基盤となっていたといえるが、その一方で、当書では他者と協力した修行の在り方という夕雲流にはなかった教えや、日常の在り方・規範を重ねて説く内容が確認されており、夕雲流の思想は肥後雲弘流へ同様の形で継承されつつも、肥後雲弘流が藩校教育としての役割を果たそうとした時には、剣術実践に加え日常の問題を強く意識したものに再構成されていたことが推察された。

Reconstructing Japanese Budō: Technique, Education, and Value-Based Governance

○SangJin Yoon (International Centre of Martial Arts for Youth Development and Engagement under the auspices of UNESCO, Republic of Korea)

[OBJECTIVE]

This study reconstructs the historical definition of Japanese budō by tracing its transformation from battlefield-oriented techniques (jutsu) to an institutionalized Way (dō), and finally to value-based governance. Rather than treating budō as either tradition or sport, it asks how the concepts of bu and dō, the pedagogy of kata and rei, and devices such as curricula, grades, qualifications, safety rules, and federation governance were reorganized from modernization through post-war reconstruction and global dissemination.

[METHODS]

A historico-philosophical document analysis was conducted using scholarship, policy documents, federation regulations, institutional reports, and public-facing materials in Japanese, English, and Korean. Searches used Google Scholar, CiNii, J-STAGE, and RISS, with targeted searches of governmental and federation sources. The analysis identified works defining budō, collected materials on schooling and governance, extracted institutional standards from charters, rules, manuals, and curricula, and reconstructed six phases according to changes in authority, educational framing, and operational rules.

[RESULTS]

The study periodizes budō into six phases: Inception (pre-modern, pre-Meiji [1868]), Institutionalization (Meiji-1920s), Ideologization (1931-1945), De-ideologization (1945-1957), Reconstruction (1958-1980s), and Global Institutionalization (1990s-present). Inception shifted martial knowledge from closed lineage-based combat toward dōjō-, kata-, and licensing-based education. Institutionalization translated dōjō knowledge into standardized textbooks, curricula, kata, grades, and qualifications through organizations, schools, police institutions, and credential systems. Ideologization incorporated these structures into wartime mobilization and nationalist moral education. After 1945, De-ideologization removed militaristic meanings and re-centred budō around safety, educability, and non-political physical education. Reconstruction restored public legitimacy through national curricula, federation rules, safety regulations, and composite assessment standards linking technique, health, cooperation, and attitude. Global Institutionalization connected domestic standards to transnational federation rules, mutual recognition of credentials, safeguarding, anti-doping, and inclusive/adaptive practices. Across these phases, budō shifted from a "technique-victory" idiom to a "standards-recognition" language. Rei, kata, and self-cultivation gained institutional force when translated into procedures for instruction, examination, licensing, qualification, and accountability.

[CONCLUSIONS]

Japanese budō is best understood as a changing mode of coordination: from fighting techniques, to educational cultivation, to internationally shareable norms. The transformation did not erase tradition; it re-described traditional values through safety, respect, fairness, responsibility, and public accountability. The framework links ideational change with institutional capacity and supports comparison with Korean muye and Chinese wushu.

IB-1

柔道の旗判定の意義に関する研究：対象者の拡大による再検討

○成田泰崇(国士舘大学)，佐藤雄哉(国士舘大学)，鈴木桂治(国士舘大学)，吉永慎也(国士舘大学)，田村昌大(國學院大學)，星野映(甲南大学)，佐藤博信(関西学院大学)，河緒一彦(関西学院大学)

【目的】

柔道における旗判定は、審判の主観的判断に基づき勝敗が決定される判定方式であり、その過程には一定の曖昧さが内在する。この曖昧さは、柔道経験者にとっては技術的理解に基づき受容されやすい一方、未経験者にとっては不透明さや不公平感として認識される可能性がある。昨年度の研究では、柔道経験者は旗判定を「妥当」と評価しやすい一方で、「納得感」や「曖昧さの認知」といった主観的評価については、経験の有無による有意差は認められなかった。このことから、旗判定の評価には「技術的正当性」と「感情的受容」という異なる側面が存在し、両者の間に乖離が生じる可能性が示唆された。

そこで本研究では、昨年度実施した調査を基盤とし、同一の調査内容を用いながら対象者数を大幅に拡大することで、先行研究で得られた結果の再現性を検証するとともに、柔道経験および曖昧さ耐性が旗判定に対する評価に与える影響をより精緻に明らかにすることを目的とする。

【方法】

大学生 486 名を対象に、「柔道の旗判定に関する調査」と題したアンケートを作成し、Google フォームを用いて Web 上で実施した。調査項目は昨年度研究で用いた質問紙を踏襲した。質問内容には、旗判定に対する評価項目および曖昧さ耐性に関する項目を含め、得られたデータについて t 検定を用いた統計的分析を行った。

【結果および考察】

分析の結果、柔道経験者は未経験者に比べて、「判定は妥当である」($t=3.75, p<.001$)、「判定の結果に納得している」($t=4.03, p<.001$)、「判定の瞬間に緊張や興奮を感じた」($t=3.42, p<.001$)において有意に高い値を示した。一方で、「判定に曖昧さを感じた」($t=-3.00, p<.01$)および「自分の印象とは異なると感じた」($t=-5.72, p<.001$)については、未経験者の方が有意に高い値を示した。

これらの結果は、昨年度の研究では「妥当性」にのみ有意差が認められ、「納得感」や「曖昧さの認知」には差がみられなかったことと比較すると、対象者数を拡大したことで潜在的な群間差がより明瞭に検出されたことを示している。

すなわち、経験者は判定基準の理解に基づいて「妥当性」や「納得感」を高く評価し、さらに試合の緊張感や興奮も強く感じる傾向がある一方、未経験者は「曖昧さ」や「違和感」を強く認識する傾向があることが示された。

さらに、曖昧さ耐性に関する項目の一部においても群間差が認められ、経験者は不確実な状況をより肯定的に受容する傾向が示唆された。

以上より、旗判定の評価は単なる主観的印象ではなく、競技理解に基づく認知的枠組みと個人の心理的特性によって規定されると考えられる。したがって、観戦者の理解と納得感を高めるためには、判定基準の明確化や説明の充実に加え、判定過程の可視化などが重要である。さらに、本研究の結果は、柔道における「曖昧さ」の価値を再評価する視点を提示するものであり、柔道に固有の文化的・教育的価値を考える上でも重要な示唆を有する。

海外における柔道教育に関する研究 —フランス人柔道実践者を対象としたインタビュー調査を通じて—

○田中航太（筑波大学）、酒井利信（筑波大学）、大石純子（筑波大学）、
柴田直生（筑波大学）

【研究の背景及び目的】日本において柔道は、「体育」「勝負」「修心」を兼ね備えた教育材として発展し、人間形成を重視する武道として位置づけられてきた。現在では国際的に普及し、競技スポーツのみならず、多様な目的で実践されている。近年の海外柔道実践現場では、柔道を通じた人間形成の取り組みや、発達障害のある子どもへの教育的実践などがみられ、柔道の教育的価値が海外にも浸透しつつあることが窺える。また、酒井利信氏の研究などでは、海外武道実践者へのインタビュー調査を通じて、武道教育の効果が海外でも認識され始めていることが明らかにされている。しかし、柔道実践者を対象として柔道の教育効果がどのように認識されているのかという問題については、未だ十分に検討がなされていない。そこで本研究では、フランス人柔道実践者へのインタビュー調査を通して、日本武道の教育力や嘉納治五郎の理念が海外でどのように受容されているのかを明らかにすることを目的とする。

【方法】本研究では、フランスにて柔道実践を行う柔道実践者1名（以下A）を対象とし、これまでの柔道実践の経歴に関する回顧録の依頼と、それを基にしたインタビュー調査を通じて考察を行う。そして、入手した文字テキストを基に従来の文献学的手法に質的データ分析法を援用し、日本の武道教育及び柔道教育におけるロジック（心身一如、身体一心、精力善用、自他共栄、倫理・道徳的精神性など）と照合することで、対象者の思想構造を多角的かつ詳細に明らかにしていく。

【結果及び考察】対象者Aについて、Aは身体面と精神面の双方を鍛えることを目的とした「心身一如」を期待し柔道を始めていた。そして現在では、柔道実践を通して培った力を日常生活や仕事へと昇華していることが確認された。また、柔道を通して戦う技術を学んだことで自信が身に付き、自己主張ができるようになったと述べており、ここには「身体一心」および「精力善用」の効果が見られた。さらにAは、礼儀や道徳的教えなど柔道に内在する価値観を学んだことが自身に大きな影響を与えたと語っており、この点には「倫理・道徳的精神性」が認められる。また、自身が教わった内容を道場の仲間に教えていることから、

「自他共栄」の実践も確認された。加えて、Aは柔道を通して身体的・精神的・技術的成長のすべてが得られると指摘しており「心身一如」の影響が見られたが、その背景には、所属道場の指導方針が関係していると考えられる。Aの道場では、技術指導だけでなく、柔道文化や技の意味、「なぜその技を行うのか」という理由まで丁寧に説明しており、理論と実践を結び付けた指導が行われている。ここでは、Aが通う道場では日本に対して尊敬の念を持って柔道を行っていることが窺える。また、技を繰り返し練習し、原理を身体的に理解した上で応用へと発展させていくことで、探究心が増し、自身でも技を追求するようになったとしている。また、柔道の本質を「相手の力を利用すること」と捉えており、「精力善用」とともに、互いを尊重しながら競い合う考え方も認められた。加えて、Aはキリスト教との共通点として、高次の存在に敬意を払う姿勢を挙げていた。以上のことから、柔道はAに対して身体的、精神的の双方に教育的な効果を与え、人格的成長を支える要素となっていた。

学校体育における武道の競争性に関する試論 ：他者性概念による教材特異性の検討

○田井 健太郎（群馬大学）

【背景と目的】中学校保健体育において武道は必修で学習する領域の一つとして位置づけられている。武道は、相手との身体的相互作用を中核とする身体文化であり、その教材化をめぐるのは武道学・武道教育研究の領域で議論が積み重ねられてきた。武道学習は、試合のみならず、対人的な技能練習や「形」の学習においても、相手との関わりを前提に成り立っている。他方で、武道授業には攻防や勝敗を伴う場面が含まれており、武道もまた競争性をもつ教材として取り扱われる側面がある。学校体育における競争の取り扱いをめぐるのはスポーツ哲学の分野で、競争を回避すべきか、学習者の同意を問うべきか、活動条件を調整すべきか、競争を受け入れるべきか、という四つの規範的立場(Aggerholm et al., 2018)から議論が行われている。武道においても競争を取り扱う上では、こうした規範的議論が有益な視座を提供しうるだろう。同時に、相手との関わりが学習の核を成すという武道の特性に即して、学習場面で「相手」が学習者にとってどのような存在として立ち現れ、関わりの対象となっているのかを整理するが必要である。他者は、学習者にとって相手がいかなる存在として現れ、どのような関わりの対象となるか。本研究の目的は、武道授業の学習場面において相手がどのように現れているのかを、哲学における「他者性」の概念によって整理することである。これにより、武道の競争性を考えるうえで参照しうる分析的視座を提示する。

【方法】上記の目的に即して、文献に基づく概念分析を行う。本研究では、『学習指導要領解説』に示される「相手の動きに応じた攻防」「対人的な技能を基にした運動」という武道の特性を、対人的な身体的相互作用として捉えたうえで分析対象とする。一方、他者性や対人性に関する議論は、スポーツ哲学および武道学の領域において展開されてきた。これらを踏まえ、本研究では武道授業において問題となる「相手との関わり方の質」と「相手を手段に還元しないことへの規範的歯止め」の二点に焦点を絞る。前者については Buber の関係論を、後者については Levinas の応答責任論を参照する。両者の議論はそれぞれ深い射程をもつが、本研究では武道現象の分節のために必要な範囲で援用する。武道の学習形態については、『学習指導要領』等を踏まえ、試合・対人技能練習・形の三つに分類する。

【結果および考察】武道学習における他者の現れ方は、学習形態によって異なる構造をもつと考えられる。試合では勝敗を介して相手と対峙し、対人技能練習では攻防を通じて相手と相互に作用する。形の学習では、試合のような直接的な勝敗状況ではないが、想定された相手との攻防関係を前提として技を練磨する。以上の整理から、武道における他者性は、①現前する他者(対人状況において応答する相手)、②想定された他者(物理的に不在であっても攻防の合理性において前提される相手)、③規範的他者(相手を単なる手段に還元してはならない存在として要請する視点)の三層に区別される。これら三層は、学習形態と単純に一对一で対応するものではなく、同じ学習形態であっても、授業の構成によって他者の現れ方は異なりうる。

【結論】武道授業において相手は、単に勝敗を争う競争相手としてのみ現れるのではなく、現前する他者、想定された他者、規範的他者として多層的に現れる。この三層の区別は、武道における他者の現れ方の多様性を分析的視座として示すものである。この整理は、競争的活動の抑制が他者との関わりの排除と同一視されない条件を検討するための基盤となりうる。

オーストラリアにおける生涯柔道の現状と課題 武士道柔道クラブの取り組みを事例に

○マーヤ・ソリドーワル（津田塾大学）

【目的】本研究は地方での柔道普及に焦点を当てながらオーストラリアにおける生涯柔道の現状と課題を考察した。オーストラリア・ニューサウスウェールズ州の武士道柔道クラブの事例に基づいて柔道が地域コミュニティに長期的に貢献できる取り組みを検討し、生涯スポーツとしての柔道のあり方を展望してみる。

【方法】2026年3月22～30日にオーストラリアのニューサウスウェールズ州の武士道柔道クラブにおいて現場調査を実施した。幼年から小学生までの子供を対象にするジュニアクラス、中学生以上のシニアクラス及び地域の高齢者が参加する転倒予防のクラスを視察し、指導者の聞き取り調査も行った。

【結果および考察】1969年創設の武士道柔道クラブは歴史が長く、国内国際大会及びオリンピックで活躍した選手を輩出した歴史が長いオーストラリアの柔道クラブである。現在の拠点は約3000～4000人の人口があるショールヘイブン・ヘッズ市である。ショールヘイブン・ヘッズ市の2021年の人口は3248人であった。その中に、市民の5～19才の割合は14.9%、20～29才は5.9%、60才以上は45.5%¹の高齢者が多い町である。武士道柔道クラブの現会員数は83人である。その中に、4～12才以下の会員は48人(58%)、13～19才は10人(12%)、20～60代の大人は25人(30%)である。20以上の大人の中、40代の会員が11人で、子供が会員である保護者は17人である。柔道活動は週1回コミュニティセンターに行われ、講習会等のイベントも定期的に行われている。また、柔道活動とは別に、高齢者向けの転倒予防のクラスも実施されており、参加者数は19で、年齢は74～87才で、平均年齢は76才である。

【結論】武士道柔道クラブの会員数を年齢別に分析すると、12才以下の会員が最も多く、12～19才の会員数が最も少ない現状が明らかになる。したがって、中等学校（中学校と高等学校）に入学すると同時に、柔道から離れる会員が多い。また、大人会員25人の中に、20代（4人）と30代（4人）の会員が少ないのは、ショールヘイブン・ヘッズ市においてこの年齢層が薄いという状況が反映されている。したがって、大学への進学や就職のため町から離れてしまうのは柔道活動をやめる原因の一つとして考えられる。ここでは、会員数を確保するため、ショールヘイブン・ヘッズ市に生活の拠点がある子供会員の保護者を積極的に柔道活動に参加させて、指導者にも育成させる取り組みは、会員の増加につながる効果的なアプローチとなる。また、高齢者向けの転倒予防プログラムを提供することは地域コミュニティに貢献し、柔道の認知度を高めることにもつながると考えられる。

¹ Australian Bureau of Statistics (2021) Shoalhaven Heads Census. 2026年5月28日参照。

《<https://www.abs.gov.au/census/find-census-data/quickstats/2021/SAL13555>》2026年5月28日参照

リバ剣における「中断と再開」 ーライフスタイル構築の視点からー

○井上涼（東海大学大学院博士課程後期）

天野聡（東海大学）、笹木春光（東海大学）、松本秀夫（東海大学）

【目的】人生 100 年時代が到来するといわれる現代において、年齢やライフステージに応じた健康づくりへの必要性が指摘されている（厚生労働省, 2018）。1990 年代以降、「生活者中心のパラダイムへの転換（神原, 2014）」によって、生活の質や生き方が注目されるようになり、新たなライフスタイル形成への必要性が示唆され、ライフステージに応じたスポーツ振興施策がされている（スポーツ庁, 2021）。このような背景の中で、全日本剣道連盟（2018）は、中断者を減少させることに加え、剣道復活や生涯剣道を支援し剣道人口の増加を図っている。

剣道は、生涯を通じた修練が可能であるが、ライフコース上やむを得ない理由やネガティブな理由での中断がみられる。近年では、剣道復活をリバイバル剣道（以下、リバ剣）と呼称し、剣道を再開する現象がみられている。

関ら（2025）は、剣道再開者の継続要因に着目し、再開後、剣道の多様な価値観への気づき、周囲との人間関係の広がり継続要因となっていることを報告おり、「中断と再開」を経て、新たなコミュニティの発生など、ライフスタイルのへの関与があると考えられる。これまで、「中断と再開」の過程とライフスタイル構築の関与について焦点を当てた研究は見当たらない。本研究は、剣道の「中断と再開」がライフスタイル構築にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

【方法】本研究では、リバ剣における「中断と再開」がライフスタイル構築へどのように関与しているのか考察する。分析方法は、先行研究に加えて、文献、剣道雑誌記事を収集し、比較検討を行う。

【結果および考察】リバ剣は、Crossman ら（2025）の示唆する、成人期のスポーツ再参加がライフコース上の変化と連動しながら生活の中に再び組み込まれていくプロセスと同様に、時間経過、対人関係、社会環境の変化によって、再び剣道が組み込まれライフスタイルが構築されていく現象であると考えられる。また、ブルデュー（1979）は、人間の行動が個人の意思や嗜好に基づくものではなく、社会的地位や生活条件によってされるものだと考察している。中断以前に身につけた、社会規範やアイデンティティがハビトゥスや社会構造に関与して、ライフスタイル構築にも影響すると考えられる。そして、「再開」の選択は、ライフコース上の変化と連動して、中断前の社会構造と一致したときにされるのではないだろうか。

次に、リバ剣再開初期は、project-based leisure (Stebbins, 2008) といわれる、計画・努力・技能・知識を必要とする比較的複雑な余暇活動に該当する可能性がある。リバ剣の継続によって、段位制度や道場等のコミュニティによる活動など、キャリアが熟達した実践者の一部は、シリアスレジャーとしての意義が高まり、専門性を身につけていくと考えられる。

このように、リバ剣実践者のライフスタイル構築は、昇段制度や文化的意義といった制度化された身体運動文化と適合し、余暇活動に留まらず、キャリア、コミュニティなどライフスタイルの一部として組み込まれている可能性が推察される。

【結論】本研究は、剣道の「中断と再開」がライフスタイルを構築にどのような影響を与えているのか、明らかにすることが目的であった。リバ剣は、中断以前に培った、社会規範がハビトゥス等に影響して、ライフコース上の変化と再開できる社会環境が一致した際、再び剣道をライフスタイルの一部として組み込み、構築するプロセスであることが推察された。

大学剣道部員のアスリート・ポートフォリオ・チャート記述にみる 人間形成の様相

○秋山大輔（九州産業大学）、萩原悟一（九州産業大学）、武井幸二（国士舘大学）、
久保優樹（国士舘大学）、岸本卓也（国士舘大学）、安藤翔（国士舘大学）、
村富聖気（国士舘大学）、田中宏和（高崎経済大学）

【目的】

本研究は、大学男子剣道部員が作成したアスリート・ポートフォリオ・チャートの自由記述を対象に、日常的な「取り組み方法」がどのような「方針」によって意味づけられ、さらにどのような「アイデンティティ」へ接続されるのかを明らかにすることを目的とした。特に、学年進行に伴う記述内容と共起構造の違いを検討することで、剣道部活動における人間形成の段階的様相を質的に把握することを試みた。加えて、競技力向上、学生生活、将来の職業生活に関する語の結びつきを読み解き、剣道経験が自己理解や行動変容にどのように関与するかを考察した。

【方法】

分析対象は、大学男子剣道部員 108 名が作成した AP チャートであり、内訳は 1 年生 26 名、2 年生 25 名、3 年生 31 名、4 年生 26 名であった。対象欄は「取り組み方法」「方針」「アイデンティティ」とし、付箋に記された語句・短文を文脈単位で整理した。まず同義語や表記ゆれを統合し、剣道実践、身体・健康管理、自己管理・計画性、学業・進路、対人関係・社会性、人間形成・価値観、内省・心理などにカテゴリ化した。次に、学年別に各カテゴリの出現傾向を確認し、同一個人内で三欄がどのように接続するかを共起ネットワーク的に探索した。

【結果および考察】

全学年を通じて、「取り組み方法」では稽古、自主練習、トレーニング、食事、睡眠、課題提出等が多く、剣道実践と生活管理が日常行動の中心であった。1 年生では、授業出席、課題提出、規則正しい生活、稽古への参加など、大学生活と部活動への適応を示す記述が目立ち、方針は「継続」「時間を守る」「体調管理」など基礎的自己管理と結びついていた。2 年生では、稽古内容の工夫、筋力・体力向上、食事改善等が「試合で勝つ」「単位取得」「信頼される人になる」と共起し、競技成績と学生生活の両立が課題として表れていた。3 年生では、部内での責任、後輩指導、就職・進路、将来像に関する語が増え、方針は「責任感」「計画性」「周囲への配慮」と関連した。4 年生では、感謝、礼儀、社会人としての振る舞い、指導者像等が多く、剣道で培った価値を卒業後の生活へ接続する記述がみられた。以上から、学年進行に伴い、剣道実践の意味づけは、技能向上や生活適応から、対人関係、役割意識、将来の自己像を含む人間形成へ拡張する可能性が示唆された。また、三欄の接続をみると、単なる目標列挙ではなく、「行動の具体化-価値づけ-自己像の形成」という省察過程が表れており、AP チャートが部員の内省を促す教育的媒体として機能している可能性も認められた。

【結論】

AP チャートの記述は、部員が稽古、学業、生活管理、対人関係を個別の行動としてではなく、自己の成長や将来像に結びつけて捉える過程を可視化していた。特に、低学年では適応と自己管理、高学年では責任、感謝、社会的役割に関する記述が強まり、剣道経験の意味づけが発達的に変化する様相が確認された。したがって、AP チャートは学年段階に応じた省察支援や指導方略の検討に活用できると考えられる。

中国大学体育における武道の需要と変容-厦門市にみる武道的条件の不在とその実態

○劉暢 （国際武道大学）

【目的】近年、日本の武道は国際的な普及を見せているが、中国の大学教育における微視的な受容実態を捉えた研究は少ない。本研究は、中国福建省厦門市の大学におけるフィールドワークを通じて、中国の大学教育における武道の現状を調査し、異文化環境および大学制度下における武道の需要と変容の実態を明らかにすることを目的とする。

【方法】2026年3月22日から26日にかけて、厦門市内の3大学（厦門理工学院、厦門大学、集美大学）を対象に実地調査を行った。厦門理工学院では、必修の「公共体育」という授業における空手道授業にて参与観察を実施し、33名いる受講生のうち11名および担当教員に対する半構造化インタビューを行った。また、厦門大学、集美大学においては現地調査に加え、体育授業の担当者への聞き取りを実施した。

【結果および考察】厦門市における武道的条件の「不在」は、制度的・空間的側面と、文化的・意味論的側面の二重構造となっていることが確認された。第一に、制度的・空間的な「不在」である。厦門大学や集美大学では指導者不足や大学側の意欲低下により、柔道、剣道など武道関連の授業が一切開講されていなかっただけではなく、サークル、同好会などの学生を中心とした愛好団体存在も確認されなかった。唯一、厦門大学では過去の柔道活動の様子を写した写真一枚であった。その写真では畳ではなくジョイントマットが使用され、靴下を履いて稽古する姿が映されており、日本的な道場空間の決定的な不在が観察された。第二に、文化的・意味論的な「不在」である。厦門理工學院の空手道授業では、学生の約75%を女子が占め、防身やフィットネスへの能動的な受講姿勢が見られた。しかし、学生の多くは空手道に「日本の武道」としての特殊性を意識しておらず、通常の体育科目と同列に捉えていた。彼らの空手道尾に対する認知は映画やアニメ等の大衆文化に依存しており、実際の稽古体験を通じて「中国の散打や武術套路に似ている」と母国の身体文化を参照した再解釈が行われていた。さらに、中国特有の教育政策である「思政教育」（思想政治教育）の要請により、担当教員が「空手道の起源は中国武術である」と歴史的側面を強調して指導しており、日本の武道としての文脈が漂白され、中国的教育文脈に適応する形で再解釈される実態の存在も確認された。

【結論】中国の大学体育における空手道は、専用の道場空間や日本文化としての武道精神が実質的に「不在」のまま受容されている。しかし、それは単なる文化の未成熟ではなく、指導者や施設といった物理的制約、学生の認知、そして「思政教育」といった国家制度に適応した結果生じた、中国独自のローカライズされた現代体育実践としての必然的な変容であることが示唆された。

社会経済学的観点からみた柔道場の社会的価値

○中村 和裕（福山大学）

【目的】本研究は、社会経済学的観点から柔道場の社会的価値を分析し、現代社会における柔道場が提供できる価値を再認識する。それらの価値を柔道の携わる方々が認識することで、改めて現代社会における柔道が果たせる役割が、再認識又は実践されることを期待するものである。嘉納治五郎が講道館を創設して144年、柔道は「精力善用」「自他共栄」の理念のもと日本固有の文化的遺産として発展してきたが、近年は競技化・体制化の進展により、本来の「誰もが参加できる柔道」という理想から乖離しつつある。この問題を個々の道場や指導者の努力不足に帰するのではなく、社会経済学の分析枠組みを用いて構造的に解明することが本研究の狙いである。

【方法】東京大学柔道部の部長を長く務め、自身も柔道や空道といった武道を実践し、経済学者で社会経済学が専門の松原隆一郎氏（東京大学名誉教授）の専門家インタビューを主な研究方法とした。分析の枠組みとして、経済学における「クラブ財」論、「外部性」概念、「情報の非対称性」論、および政治経済思想における「中間団体」論を援用し、道場が社会に提供する価値の多層的な構造を明らかにした。

【結果および考察】第一に、道場は「クラブ財」として二層の価値を提供することが明らかになった。第一層は技術指導という「流れていくサービス」であり、第二層は時間とともに蓄積される「人間関係資本」である。世代・職業・立場を超えた人々が共に稽古に励む道場は、孤立化が進む現代社会において、政府と個人の間に位置する「中間団体」として民主主義社会の結合を支える固有の役割を担う。第二に、柔道は市場で評価されにくい多くのプラスの「外部性」を社会に提供していることが確認された。受け身の習得による転倒骨折の予防（医療費削減効果）、青少年の健全育成・非行防止、地域コミュニティの活性化などがその代表例である。こうした社会的便益に対して適切な対価が支払われる仕組みが存在しないことが、柔道の経済的持続可能性を低下させている根本要因の一つである。第三に、登録人口減少の背景には、少子化・余暇の多様化という外的要因に加え、競技エリート育成に傾斜した組織構造、社会人・高齢者への対応不足、「お金」への抵抗感から生じる道場経営基盤の弱さという内的要因が複合的に作用していることが示された。特に、嘉納が柔道普及の主な場として学校を位置つけた結果、指導者が「教員として就職する」というキャリアモデルが定着し、民間道場の経営という発想が育ちにくい土壌が形成されてきた点は重要である。少子化と部活動縮小の進展により、この「学校柔道」モデルの基盤は急速に揺らいでいる。

【結論】社会経済学的分析を通じて、道場は技術指導の場にとどまらず、「人間関係資本」の育成と社会的便益の供給という二重の意義を持つ社会的インフラであることが示された。日本柔道の再興は、(1)嘉納の「精力善用」「自他共栄」の理念への原点回帰、(2)社会人・高齢者を包摂する生涯武道としての文化の現代化、(3)道場の社会的価値の再定義と発信、という三つの方向での取り組みを必要とする。それは登録人口の数字の回復にとどまらず、柔道が現代社会に必要とされる人間教育の場として機能するための根本的な再設計の営みに他ならない。

IB-9

保健体育科が担う教育課題と剣道の理念との関係

○高橋 怜央（岡山大学大学院/環太平洋大学）、高橋 徹（岡山大学）

【背景および目的】

保健体育科では、安全性の確保や運動量の保障、生徒の興味・関心を高める授業づくり、さらに到達目標の明確化が求められている。これに関連して、剣道授業においてもこれまで多くの課題が指摘されてきた(糸岡ら, 2011 ; 江原, 2018 ; 菊本・新保, 2022)。こうした教育課題を理由に、剣道授業では剣道の教材化が進められ、大橋（2014）が示すように、教員の指導観も安全や礼儀を重視する段階から、生徒に関心をもたせ、最終的には「楽しさ」を体験させるような授業構成へと変化してきた。しかしその一方で、こうした教材化の方向性によって、元来の剣道が有してきた教育的特性との間に齟齬が生じている可能性が考えられる。先行研究では、剣道授業の改善策や教材開発に関する提案が数多く示されているが、それらが剣道本来の特性にどのような影響を及ぼしているのかを体系的に整理した研究は多くない。

そこで本研究では、保健体育科が担う教育課題と元来の剣道教育との関係に着目し、特に剣道を体育授業用に再構成する「教材化」のプロセスによって、元来の剣道のどのような特性が変容、あるいは失われてしまっているのかを明らかにすることを目的とした。本研究は、実際の授業において、いかに剣道の特性を生かすことができるのかを検討し、今後の剣道授業の在り方について考えるための基礎的資料の提示を目指すものである。

【方法】

本研究の方法は文献研究である。具体的には、元来の剣道教育の特性に関する文献と、学校教育における剣道授業に関する文献を収集し、それぞれの言説を分類・整理した。

【結果および考察】

文献検討の結果、元来の剣道教育は全日本剣道連盟が掲げた「剣道の理念」を基に、礼を基盤とし、修練を通して人間形成を目指す教育体系として位置づけられてきたことが確認された。佐藤（1978）が『五輪書』に示された「能々、吟味すべし」という言葉を手がかりに指摘したように、剣道における学びは教え込まれるものではなく、修練の中で自得を目指す点に特徴がある。また中村（2007）が述べるように、武道教育は師の姿勢や稽古環境に依存する「滲み込み型」の教育であり、時間をかけた模倣と内省を通して成立するものである。

一方、学校体育における剣道授業では、限られた授業時間の中で運動量や生徒の満足感を確保することが求められるため（木原, 2007）、教材の簡略化や効率化が進められてきた。その結果、田中（2005）が指摘するように、剣道授業は「剣道の一身体験」に近い内容にならざるを得ず、修練を前提とした学びの構造が成立しにくい状況にある。また、試合や審判技能の習得が到達目標として設定されることで、剣道本来の教育目的が相対化されている可能性も示唆される（田中, 2005）。

これらを踏まえると、保健体育科が求める教育課題を優先することで、剣道の教育目的が体育の目的へと引き寄せられ、自己教育や自己発見といった精神的な学びの側面が十分に扱われなくなっている可能性が考えられる。しかし本来、剣道のもつ心身一如の特性（日本武道館, 2007）は、剣道の理念の基盤を成すものであるため（入江, 2003）、保健体育科が担う教育課題と同様に重視されるべき価値を有していると考えられる。したがって、今後の剣道授業においては安全性や効率性を重視した授業開発と並行して、剣道を通して学び方そのものを自ら学ぶ授業へと転換していくことを求める見解も示されている（山田・ベネット, 2005）。

攻防を学習の中核に据えた中学校柔道授業の提案と教材開発

○川戸湧也（三重大学）

【研究背景と目的】

日本の中等教育の学習指導要領を見ると、保健体育科の武道領域の学習内容として次の3つの点が示されている。①基本動作、②基本となる技、③攻防である。このうち、③攻防については、学習内容として明確に示されているにも関わらず、その指導方略については十分に理論化されておらず、また開発も進んでいない実態がある。これは中等教育で取り扱われる武道を通底する課題といえる。他方で、安全に留意するあまり礼法や受け身、あるいは素振りなどを繰り返すだけの授業も散見され、課題が積み残されていると言わざるを得ない。

そこで本研究では上記の課題、すなわち攻防に関する指導方略の欠如、および攻防と切り離された授業実践の改善に向けて、戦術学習モデルに依拠した中学校柔道授業の授業計画を設計・実践し、その有効性について検証することを目的とした。

【方法】

本研究では、先行研究のレビューを通して武道における「攻防」と柔道における「戦術」の姿を整理した。ついで、整理した戦術の枠組みに基づいて中学校第一学年の女子生徒25名（いずれも初学者）を対象として、段階的に修正された攻防を学ぶための8時間単元を設計し実施した。本発表では特に具体的な教材に着目して発表する。

当該授業の成果検証するために、学習過程の検証をとして授業計画の忠実性（Fidelity）の検証を行った。さらに学習者がゲーム中に発揮したパフォーマンスを検証するために記述的ゲームパフォーマンス分析を実施した。加えて、アンケート調査を用いて学習者の学びについて多角的に検証した。

【結果および考察】

本研究の結果、次の点が明らかとなった。第一に、設計された授業計画は、戦術学習モデルの構成要件を十分に備えており、また実施された授業の学習過程は授業計画に沿って実施されたことが確認され、戦術学習モデルに基づく授業計画に対して高い忠実性があったことが確認された。第二に、柔道初学者である対象者らは、自ら前に出て組もうとすること、また相手の組もうとする動きに対して払ったり振り解いたりする動きが発現していた。また授業の振り返りを通して有効な戦い方についての気づきを得ていることが確認された。すなわち授業を通して熟練競技者と類似した高い次元の戦術的思考および行動を示していた。第三に、戦術学習モデルに基づく本実践に対して、一貫して非常に肯定的な授業評価を下していたことが確認された。つまり、学習者らは当該実践を面白いと感じ、積極的に取り組むことができたことが確認された。

【結論】

本研究では武道授業をめぐるギャップ、すなわち「攻防」が学習内容として示されているにも関わらずその指導方略が十分に検討されていない点を課題として捉え、その解決を試みた実践研究を実施した。その結果、体育科教育学において蓄積されてきた戦術学習モデルに忠実に準拠して適用することで、上記のギャップを克服できる可能性が示された。

知的障害のある生徒の柔道経験は保護者にどのように評価されたか ～特別支援学校における授業実践を通して～

○岩井祐一（仙台大学）、中村 昌宏（東京学芸大学附属特別支援学校）、
濱名 智男（日本文化大学）

【目的】特別支援学校における体育・保健体育では、児童生徒の実態に応じた運動経験の保障と、安全に留意した主体的な運動への参加が求められる。学習指導要領において、武道は、楽しさや喜びを味わうこと、基本動作や基本となる技を身に付けること、伝統的な行動の仕方や安全への留意を学ぶ内容として位置付けられている。柔道は、受け身や姿勢、組み方などの基本動作を含む一方で、身体接触や転倒を伴うため、知的障害のある生徒に対しては、安全面への配慮や段階的な指導が重要となる。そこで本研究では、特別支援学校において実施した柔道授業を対象に、知的障害児の柔道経験が保護者にどのように評価されたのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】対象は、知的障害特別支援学校において実施された柔道授業である。授業では、外部講師と教員が連携し、礼法、基本姿勢、受け身、組み手、足をかける動作等を、マットを用いて段階的に扱った。授業後、保護者を対象にアンケート調査を2回実施した。第1回調査では、柔道に対するイメージ、子どもの反応、授業動画の感想等について尋ね、4件の回答を得た。第2回調査では、基礎指導、段階的な授業展開、安全面への不安、授業の有益性、継続希望等について尋ね、3件の回答を得た。選択式回答は単純集計し、自由記述は内容の類似性に基づいて整理した。なお、調査は任意回答とし、個人が特定されないよう匿名化して分析した。

【結果および考察】第1回調査では、保護者の柔道に対するイメージとして、「けがなどのリスクがある」「ルールが分からない」「痛そう」といった不安や距離感がみられた。一方で、授業後には、子どもが「楽しかった」「もっとやりたい」と話したこと、家庭で受け身や組み手を試したことなど、肯定的な反応が報告された。第2回調査では、受け身を含む基礎指導、段階的な授業展開、子どもの期待感、授業の有益性について、すべての回答が最も肯定的な評価であった。柔道の安全指導では、初心者に対して受け身を重視し、安全に配慮して段階的に指導することが求められており、本実践においても、外部講師と教員が連携して基礎的な動きを丁寧に扱ったことが、保護者の安心感につながったと考えられる。自由記述では、柔道授業が、礼儀作法、身体の使い方、相手を見ること、力のコントロール、初めての武道経験を得る機会として評価されていた。知的・発達障害児の柔道療育に関する先行研究でも、保護者が感じる効果として、身体面、精神面、社会面の変化が報告されており、本研究の記述にもそれらと重なる内容がみられた。ただし、本研究は少数の保護者評価に基づくものであり、生徒本人の技能習得や行動変容を直接測定したものではない。したがって、柔道授業の効果を断定するのではなく、安全に配慮した柔道経験が、保護者にとって身体的・心理的・社会的な学びの機会として受け止められたことを示す結果として解釈できる。

【結論】本研究の結果、知的障害児の柔道経験は、保護者から肯定的に評価されていた。保護者は、受け身等の基礎的な動き、安全に配慮した段階的指導、子どもの楽しさや意欲を引き出す活動として柔道授業を評価していた。また、授業動画による実践の共有は、保護者の不安軽減と授業理解に寄与していた。以上より、柔道経験は、安全配慮と段階的指導を前提とすることで、知的障害児にとって有意義な武道経験として保護者に受け止められる可能性が示された。今後は、生徒本人の反応や授業中の行動変容を含めた検討が必要である。

男性柔道指導者における指導の考え方を獲得するプロセス —指導経験による人間形成を目的とした指導に着目して—

○柴田大地（日本体育大学）、高井秀明（日本体育大学）

【目的】全日本柔道連盟（2023）は「長期育成指針」を策定し、選手の発達段階に応じた育成の方向性を明確化するとともに、短期的な勝敗に偏らない育成の重要性を示している。さらに、2025年には「指導者養成指針」が策定され、指導者に求められる資質や役割が改めて定義されている。一方で、全日本柔道連盟（2023）は、柔道指導者の十分な質的向上が図られておらず、科学的根拠に基づかない指導や経験則のみに依拠した指導が依然として存在することを指摘している。そこで本研究においては、男性柔道指導者が指導経験を通して、「人間形成」を目的とした指導の考え方をいかに獲得していくのか、そのプロセスを質的に明らかにすることを目的とした。

【方法】調査対象者は、公認柔道指導者資格を保有し、10年以上の柔道指導歴（平均指導歴 18.3 ± 7.4 年）を有する男性柔道指導者24名（平均年齢 43.4 ± 8.0 歳）であった。指導対象とする競技カテゴリーは社会人、大学生、高校生、中学生、小学生のいずれかに該当しており、調査対象者の中には複数の競技カテゴリーで指導経験を有する者が含まれている。言語データの収集は、半構造化インタビュー（平均時間 53.9 ± 14.5 分）によって行われた。その内容は、調査対象者の承諾を得てICレコーダーで録音され、逐語録が作成された。言語データの分析にはM-GTA（木下、2020）を用いた。分析焦点者は「男性柔道指導者」と設定し、分析テーマは「指導経験による人間形成を目的とした柔道選手に対する指導の考え方を獲得するプロセス」とした。

【結果および考察】M-GTAによる分析の結果、35の概念、7つのサブカテゴリー、8つのカテゴリーが生成された。そして、それぞれの概念に合う定義が設定された。以下、カテゴリーを〈〉、サブカテゴリーを[]、概念名を【 】で表す。男性柔道指導者はまず〈一方通行の指導〉から出発し、やがて〈指導が届かない現場に直面する〉局面に至る。この局面において、指導者は必ずしも同一の経路をたどるわけではなく、〈指導者としての責任〉を基点として〈理想と現実の指導ジレンマ〉に向き合い、〈信じてきた指導を問い直す〉プロセスに進む場合と、熱量や目的の異なる一部の選手に対する関与を縮減していく【届かない指導に対する諦め】に向かう場合とに分岐することが示された。特に後者は、指導の失敗や後退ではなく、現場の制約や選手の多様性の中で生じる現実的な対応として位置づけられる。問い直しを経た指導者は、〈関係性構築による土台作り〉を通して指導の在り方を再構築し、〈方向性を後押しされる〉経験を積み重ねながら、最終的には〈勝利を超えて成長を導く指導〉に至っている。この段階では、[生き抜く力を育てる] 具体的実践と[成長を支える価値観]とが相互に結びつき、競技成果と人間形成を対立的に捉えるのではなく、統合的に捉える指導の考え方が形成されていた。

【結論】男性柔道指導者の指導の考え方は、一定の理想像へ直線的に発達するのではなく、行き詰まりや葛藤、分岐を伴いながら更新され続ける実践のプロセスとして示された。とりわけ、【届かない指導に対する諦め】を独立概念として位置づけたことにより、必ずしも省察的成長に接続されない現実を含めて、指導実践の全体像を描き出した。

空手競技のコーチング実践現場における ICT 活用の有効性

○大徳紘也（平成国際大学）、西山哲成（日本体育大学）、
大石健二（日本体育大学）。

【目的】

日本では 2022 年に第 3 期「スポーツ基本計画」が策定され、科学的根拠に基づくパフォーマンス評価やデータ活用型トレーニングの重要性が示された（文部科学省, 2022）。特に ICT 技術はスポーツ振興を支える基盤として位置づけられ、指導、教育の効率化や選手のパフォーマンス向上への貢献に期待されている。空手競技においては、全日本空手道連盟が指導教材として、360 度自由視点映像による形の模範動画を製作し公開した。形の见たい場面や様々な方向から自由に視聴できる機能は指導者にとっても利用しやすい情報となった（空手道専門分科会, 2022）。ICT 技術の進化により学校現場における部活動においても、スマートフォンやタブレットといった ICT の活用が普及している。しかし、ICT の活用は競技特性の影響や指導者の経験値によって左右される場合がある（長谷ら, 2024）。指導者はパフォーマンスに関するコーチングのみならず、試合中の作戦を立案するための ICT を活用したコーチングスキルも求められると考えられる。本研究は、指導者のコーチング実践における選択肢の拡大並びにコーチングスキル向上を目的とした、ICT の活用方法について検証を行う。

【方法】

複数の異なる高校空手道部に対し調査を行い、部員 60 名及び各所属の指導者 3 名を分析対象者とした。分析対象者に対し、部活動時における ICT の活用状況に関するアンケート調査をオンラインにて依頼した。オンラインによるアンケート調査は Google フォーム（Google 社）を用いて実施し、質問項目は選択回答問題 11 問、自由記述回答問題 1 問とした。回答結果から ICT の活用頻度と活用目的、ICT 機器を用いたデータ活用への意欲、関心について情報収集を行った。

【結果および考察】

本研究の結果、44 名が練習場面において ICT を活用しており、51 名が試合場面において ICT を活用していた。場面に係わらずスマートフォンの使用が 22 名以上と最も多かった。また、ICT の使用目的としては場面に係わらず「映像撮影」が 38 名以上、「映像の記録と保存」が 27 名以上と多い結果であった。また、試合場面においては「対戦相手の分析」が 14 名と練習場面に比較し 7 名（11.3%）多い結果となった。本研究において指導者、選手共に ICT やデータを活用することへの意欲関心は高いことが明らかとなった。しかし、活用方法は映像撮影と動作（試合）の見直しに偏っていることが考えられた。また、活用方法は選手個人に委ねられていることもあり、映像内容に対する評価が主観的になっている可能性が推察された。指導者は選手に求めるパフォーマンスを明確に提示し、映像における評価項目の共有や、映像の活用のタイミングをチームとして統一することで ICT 活用の効果が向上すると推察された。

韓国におけるスポーツ政策としての体育特技者のキャリア形成上の問題 — 剣道特技者に対する意識調査を中心として —

○李 建喜（大阪体育大学大学院），神崎 浩（大阪体育大学）

【目的】

韓国では 1972 年に体育特技者（以下、特技者）制度が導入され、エリート選手育成に寄与してきたが、競技力重視の環境は引退後の進路問題にも影響を及ぼしている（申他，2025）。特に剣道は競技活動のみで生計を立てることが困難であり、キャリア形成が重要な課題である。本研究は、金（2010）を基に日韓の大学剣道選手の意識を比較し、特技者制度のもとで形成された価値観とキャリア形成上の問題を明らかにし、社会的課題解決を図ることを目的とした。

【方法】

日本の大学剣道部員 95 名、および韓国の大学剣道特技者 87 名を対象に、Google Form を用いた質問紙調査を実施した（2025 年 6～9 月）。質問項目は金（2010）の調査票を用い、剣道に対する意識に関する結果を分析した。また、特技者制度やキャリア形成に関する先行研究・韓国政府の政策を調査した。

【結果および考察】

韓国の特技者は「オリンピック種目化への働きかけ」（M=4.47）、「外国への普及」（M=4.26）、「スポーツの一種目」（M=4.17）で高い平均値を示した。同時に「武道である」も比較的高い（M=3.89）ことから、剣道をスポーツと武道の双方で捉える傾向が確認された。

一方、日本の選手は「スポーツの一種目」（M=2.79）、「オリンピック種目化」（M=2.84）が韓国より低く（ $p<.001$ ）、「武道である」（M=4.52）で高い値を示した（ $p<.001$ ）。

韓国の特技者が示すオリンピック種目化への高い支持は、競技機会の拡大や引退後のキャリアの幅を広げる期待を反映していると考えられる。韓国には独自の体育特技者制度が存在し、多くの選手が競技実績を基盤として進学や就職を行っている。そのため、競技の社会的認知度や価値の向上は、選手自身の将来にも直接的な影響を与える可能性がある。大韓体育会（2023）によれば引退選手の失業率は 37.01%、就業者のうち体育・スポーツ関連職種への従事率は 38.4%、そのうち非正規雇用率は 50.16%に達しており、特技者制度は競技力向上に寄与する一方で、引退後の支援には依然として課題が残されている。

【結論】

韓国の大学剣道特技者は、剣道を武道と認識しつつもスポーツ性や国際化に肯定的であり、これは競技力重視の育成環境と関連している可能性がある。今後は両国の大学生へのインタビュー調査を通じてキャリア形成に関する意識差を分析するとともに、韓国におけるキャリア教育や就業支援を含めた総合的な選手育成システムの構築の必要性を検討したい。

【参考文献】

- 金炫勇（2010）「韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識—韓国剣道大学選手との比較から—」広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部，第 59 号，345-352
大韓体育会（2023）「2023 年選手経歴者（引退選手）進路実態調査結果報告書」
申争恩・白周海・権亨一・具泰然（2025）「体育特技者制度の現況と課題—2010～2024 年の主要政策分析と発展方向—」韓国体育教育学会誌，30（3），255-273。

剣道指導者のための次世代型面防具の開発

○糸井秀太郎（東北学院大学大学院工学研究科）
鍋山隆弘（筑波大学） 濱西伸治（東北学院大学）

【目的】剣道において、頭部への衝撃による難聴、竹刀の破片が目に入る事故、転倒による後頭部の事故が多発しており、従来の面防具ではこれらへの対策や工夫は十分とは言えない。本研究ではこれらの問題に対応し、剣道で起こりうる事故に対する安全性と装着を容易にする簡易性を兼ね備えた、従来の面防具にとらわれない剣道指導者のための次世代型面防具を製作し打撃実験とシミュレーションを行い評価した。さらに剣道競技者に試装しアンケートを行った。

【方法】次世代型面防具の本体は市販のもので面防具に顔をはめる部分（内輪）が取り外せるものを使用し、装着を容易にするため、面防具と顔を固定させるための従来の面紐を無くし、代わりにゴムバンドを交差させるように取り付けた。また、打突時の衝撃を低減させるため、内輪の頭頂部に蜘蛛の巣型ゴム製サポーター、竹刀の破片から目を保護するため、プラ板を用いたアイガードをマジックテープなどで取り付けた。

打撃実験では、加速度センサが埋め込まれた石膏製のヒト頭模型を用い、打撃装置を使用して小型竹刀を振りおろした際の頭部の加速度を計測した。打撃シミュレーションでは、打撃実験の結果から衝撃低減率が高かった複数のサポーターの有限要素法モデルを、本研究室で独自に構築した面防具モデルに結合させ、打撃時の変形量を計算した。実際に剣道競技者に試作した次世代型面防具を試装してもらいアンケートも行った。回答項目は「打突時の衝撃吸収効果」、「装着時に打突を受けた際のずれ」など8項目である。

【結果および考察】打撃実験の結果、面防具のみへの打撃と比較して、衝撃加速度の低減率は約70%となった。有限要素法を用いたシミュレーションの結果、サポーター自身が形状を大きく変形させることで衝撃を吸収効果を高めていることが分かった。アンケートの評価として、着脱の際の容易性と打撃低減性能の評価は良好だった一方、装着時の打突の感覚に違和感を感じるという声やデザインや見た目については否定的な評価が多くなったため今後改善していく。

【結論】

特に剣道指導者において、打ち込みなどの稽古の元立ちの際に本研究で提案する面防具を使用すれば頭部へのダメージを大幅に低減できると期待される。

※ 特開 2025-098813

※ 科学研究費補助金（基盤研究 C）研究課題 21K11416

※ 科学研究費補助金（基盤研究 C）研究課題 26K14263

柔道経験による前回り受身の回轉的差異に着目したキネマティクスの研究

○長谷川 公輝（早稲田大学スポーツ科学研究科）
 射手矢 岬（早稲田大学スポーツ科学学術院）

【目的】平成 20 年の中学校学習指導要領の改訂によって、武道必修化の決定から施行期間を経て中学校以上で柔道の授業を行う現場も多い。しかし、柔道における怪我の報告もある（Kamitani et al., 2013）ため、安全に関する不安は存在する。安全に関する科学的知見を集積するため、本研究では初心者が柔道の指導の初期段階で教わる前回り受身を対象にし、回轉動作の特徴をキネマティクスの手法で究明した。

柔道を長期間行い受身に慣れている熟練者群の胴体の回轉が、水平面での回轉成分（Y 軸の＋方向角速度）が小さく、矢状面での回轉成分（X 軸の－方向角速度）が大きい、縦回轉を表現していると仮説を立てた。

【方法】競技に参加している柔道経験年が 8 年以上の柔道熟練者（以降、熟練者）群 9 名とおおよそ授業のみで柔道経験年数が 3 年未満の柔道未熟練者（以降、未熟練者）群 10 名が実験に参加した。スーツ型の慣性センサ式モーションキャプチャシステム（e-skin meva : Xenoma 社）を装着し、柔道場のマットの上で右前回り受身を行った。背部に装着された胸郭対応 IMU センサを胴体の動きと仮定し、立位→前回り受身→立位の順番の運動時のローカル座標 XYZ 軸周りの胴体の角速度をサンプリング周波数 100Hz で計測した。モデルにより前回り受身の動きを区間Ⅰ～Ⅴに分類して、それぞれの区間の平均角速度を 2 群で比較した。

【結果および考察】右前回り受身の右手をついてから両足離床をした区間Ⅲ（図 1）と、両足離床から回轉して右足が着地した区間Ⅳの平均角速度を算出した。区間Ⅲでは X 軸周りの角速度が熟練者群では $-5.6 \pm 1.0 \text{ rad/s}^2$ で、未熟練者群は $-4.3 \pm 1.1 \text{ rad/s}^2$ であった。Y 軸周りの角速度は熟練者群で $1.2 \pm 0.8 \text{ rad/s}^2$ で、未熟練者群では $1.2 \pm 1.5 \text{ rad/s}^2$ であった。区間Ⅳでは、X 軸周りの角速度が熟練者群では $-5.2 \pm 0.5 \text{ rad/s}^2$ で、未熟練者は $-4.0 \pm 0.8 \text{ rad/s}^2$ であった。Y 軸周りの角速度は熟練者で $3.4 \pm 0.8 \text{ rad/s}^2$ で、未熟練者では $2.6 \pm 2.9 \text{ rad/s}^2$ であった。区間Ⅲ、Ⅳともに X 軸周りの回轉において、熟練者の方がより大きな平均角速度が大きい可能性がある。Y 軸周りの回轉ではあまり差が見られなかった。この矢状面の角速度の差は、柔道経験によって引き起こされる受身技術の上達へのメカニズムの可能性はある。

【結論】熟練者と未熟練者の受身のメカニズムの差が矢状面上の角速度にみられた。

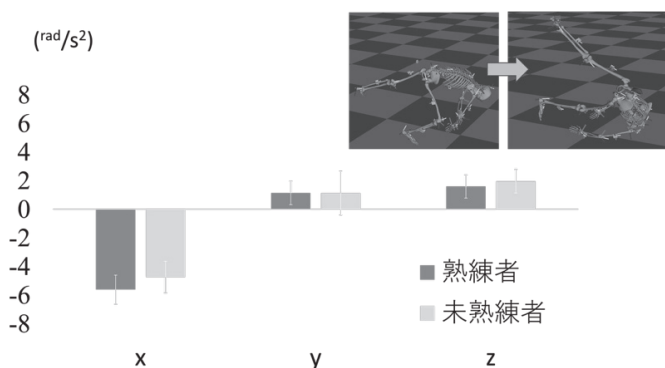


図 1. 区間Ⅲにおける各軸周りの平均角速度

ID-3

柔道受身時の頭部回転運動における熟練度の影響：回転軸と衝撃方向からの検討

○越田専太郎（SBC 東京医療大学）、石井孝法（NP0 スポーツコーチングアカデミア）、久保田浩史（東京学芸大学）、長谷川龍成（SBC 東京医療大学）、中禮宏（東京科学大学）

【目的】柔道における頭部外傷は、投げられた際に後頭部に衝撃を受けた結果、頭部に生じる矢状面上の回転運動が主要な受傷機転と考えられている。しかし、実際の柔道時に投げられた局面で発生する頭部衝撃の回転運動学的特性が、熟練度や頭部衝撃の作用点位置によってどのように異なるかは、十分に検討されていない。そこで本研究は、自由練習時に投げられた局面で発生する頭部回転運動の軸別特性を、熟練度と衝撃作用点位置の観点から検討することを目的とした。

【方法】対象は大学柔道部に所属する男女選手 20 名（初心者群 10 名、熟練者群 10 名）であった。測定には、三軸加速度計（ $\pm 200g$ ）および三軸ジャイロ（ $\pm 34.9\text{rad/s}$ ）を搭載したマウスガード内蔵型慣性センサ（Prevent Biometrics 社製）を用い、線形加速度 $8g$ を閾値として $3,200\text{Hz}$ でデータを記録した。記録された事象のうち、直線加速度 $5g$ 以上かつ角加速度 400rad/s^2 以上であり、動画により投げられた局面と確認された事象を解析対象とした。また、設定アルゴリズムによる衝撃の推定作用点に基づき、後頭部衝撃と非後頭部衝撃に分類した。頭部重心座標系における最高角加速度と最高角速度について、前額面回転、矢状面回転、水平面回転それぞれで、熟練度（熟練者/初心者） $\times$ 衝撃作用点位置（後頭部/後頭部以外）の交互作用を一般化線形混合モデル（GLMM）（ガンマ分布、対数リンク）により分析した。有意な交互作用に対しては GLMM に基づく推定周辺平均を用いて、作用点位置別の熟練度差、および熟練度別の作用点位置差に関する単純主効果分析を行った（ $\alpha=0.05$ ）。

【結果および考察】確認された 732 件の頭部加速度事象から、投げられた局面で生じた 193 件が解析対象であった。熟練度 $\times$ 作用点位置の交互作用が有意であったのは矢状面回転のみで、最高角加速度および角速度の両方で認められた（ $p<0.001$ ）。一方で、前額面および水平面回転では交互作用は有意でなかった。事後解析では、後頭部以外に作用する衝撃において、初心者は熟練者より最高角加速度（推定平均比=2.35, 95%CI=1.67-3.31, $p<0.001$ ）および最高角速度（推定平均比=2.21, 95%CI=1.65-2.96, $p<0.001$ ）共に有意に高値を示した。一方で、後頭部への衝撃では熟練度による差は認められなかった（最高角加速度： $p=0.832$ ；最高角速度： $p=0.406$ ）。さらに初心者では、矢状面における最高角加速度が後頭部以外への衝撃が、後頭部に作用した衝撃より有意に高値であった（推定平均比= 1.88, 95%CI:1.11-3.17, $p=0.018$ ）。これは非後頭部衝撃の結果生じた矢状面の PAA が約 1.9 倍であったことを示している。本研究の結果、柔道において従来重視されてきた後頭部衝撃だけでなく、初心者においては非後頭部衝撃に伴う矢状面方向の頭部回転運動学的負荷にも着目する必要性を示唆する。

【結論】自由練習時に投げられた局面で発生する頭部衝撃において、矢状面方向の頭部回転に対する技能の影響は、頭部衝撃の作用点位置に依存する可能性が示された。熟練者では後頭部以外に衝撃が作用した際に角加速度・角速度ともに大きく抑制されたが、後頭部へ作用した衝撃において熟練度の差は認められなかった。さらに、初心者では後頭部以外に衝撃が加わった際に矢状面角加速度がより高くなることが示された、

内股試技における運動学的特徴—試技時の条件による比較から—

○濱岡あかり（東京学芸大学大学院），松井高光（帝京科学大学），久保田浩史（東京学芸大学），

【目的】柔道における内股は女子競技の主要な得意技の一つであり（吉村・井上，2010），技の成否は「崩し—作り—掛け」の連続的動作によって規定される（松井，2007）。本研究では，崩し・つくり局面における取の運動学的特徴が投込と乱取という施技条件の違いで異なるか明らかにすることを目的とした。

【方法】被験者は東京学芸大学柔道部に所属する競技者2名（相四つ組）であった。試技条件は相四つ投込および相四つ乱取の2条件とし，各条件3回の施技を分析対象とした（乱取1試技はマーカー欠損のため除外）。三次元動作計測には光学式動作分析装置（VICON，赤外線カメラ8台）を使用し，身体25点に反射マーカーを貼付した。体幹傾斜角度，体幹回旋角度，肩関節角度（右），骨盤傾斜角度，身体重心移動量，変位速度の6指標を局面ごとに算出した。内股施技動作は第一局面「崩し」（取の右足離地から再着地まで）と第二局面「つくり」（取の左足離地から再着地まで）の2局面に区分した。統計解析は一元配置分散分析（ANOVA）を用い，統計的有意水準は5%に設定した。

【結果および考察】

各指標の詳細な数値は表1に示した。体幹傾斜角度および骨盤傾斜角度は両局面において投込が有意に大きく，投込では体幹・骨盤による崩しが局面を通じて明確に発現し，取が意図的に受の重心を崩す動作を安定して遂行できていることが示された。

一方，体幹回旋角度は第一局面のみにおいて，乱取が投込より有意に大きかった（ $\eta^2=.71$ ）。これは，乱取では受の抵抗により体幹・骨盤による崩しが不十分な段階から体幹回旋が代償的に先行していることを示唆する。肩関節角度（右）も両局面で乱取が有意に大きく，体幹回旋との連動が示されたが，必ずしも効果的な崩しに結びついていない（藪根ら，1991）。身体重心移動量および変位速度は第一局面においてのみ有意差が認められ，乱取がより動的な動作特性を示した一方，第二局面では条件間差が消失し，つくり局面で動作形態が収束する傾向が認められた。

【結論】

内股動作において，投込と乱取では崩し局面を中心に動作特性が異なることが明らかとなった。投込では体幹・骨盤傾斜による崩しが両局面を通じて一貫して発現するのに対し，乱取では体幹回旋・上肢動作が早期に先行する傾向が認められた。これらの結果は，練習形態の違いが技の運動構造に影響を及ぼすことを示しており，崩し動作を意識した段階的指導の重要性を示唆するものである。

表1 主要指標における投込・乱取の比較（Mean±SD）

指標	局面	投込	乱取	p値	η^2
体幹傾斜角度（°）	第一局面（崩し）	168.34±0.11	158.70±3.86	<.001	.66
	第二局面（つくり）	159.66±10.20	141.87±14.45	<.001	.33
体幹回旋角度（°）	第一局面（崩し）	3.94±0.87	14.24±3.65	<.001	.71
	第二局面（つくり）	23.64±13.45	19.46±5.48	.17	.04
骨盤傾斜角度（°）	第一局面（崩し）	74.83±0.11	72.43±3.86	<.001	.64
	第二局面（つくり）	77.83±2.58	71.59±2.57	<.001	.59

状態遷移に基づく柔道の試合構造モデルの構築と検証

○三宅 恵介 (中京大学), 早川 太啓 (中京大学), 長谷 晃希 (中京大学大学院),
伊藤 潔 (九州共立大学), 廣瀬 伸良 (順天堂大学)

【目的】本研究では、柔道の試合における一連の攻防をシーケンス (以下, Seq) 単位の状態系列として整理し、状態遷移に基づく試合構造モデルを構築するとともに、本モデルによる分類の判定可能性ならびに観察者内・観察者間信頼性を検証することを目的とした。

【方法】分析対象は、2026 年度全日本選抜柔道体重別選手権大会 (男女各 7 階級, 全 98 試合) から、RAND 関数を用いて各階級 3 試合ずつを無作為に抽出した計 42 試合とした。主審の「はじめ」から「待て」または「それまで」までを 1Seq と定義し、本戦およびゴールデンスコアを含む全試合時間を分析の対象とした。各 Seq では、両選手を柔道衣の色 (白・青) により区別し、投技試行 (TA), 投技結果 (TR), 寝技攻撃 (NA), 寝技結果 (NR), 罰則 (P), 終結状態 (E) の 6 要素を、それぞれ末尾の数字 (0: なし, 1: 白, 2: 青, 3: 判定困難または両者) を付した状態コードで記録した。投技試行は、立姿勢において選手が投技動作を行い、試行者または相手の少なくとも一方が寝姿勢へ移行した場合と定義した。寝技攻撃は、寝姿勢への移行後、抑込技、絞技、関節技につながる攻撃動作が観察された場合と定義した。得られたコード間の推移を状態遷移とし、1Seq 内の状態遷移を連続的に並べたものを状態系列として整理した。判定可能性は、TA3 および NA3 を含まない Seq の割合 (完全判定可能率) により評価した。信頼性の検証については、分析対象の 42 試合から各階級 1 試合ずつを RAND 関数を用いて無作為に抽出した計 14 試合 (158Seq) を対象とした。同一観察者が 2 週間以上の間隔において再分類した結果と初回分類との一致度を観察者内信頼性、柔道経験を有する第二観察者が分類した結果と初回分類との一致度を観察者間信頼性とし、1Seq 内の全コードが完全に一致した場合のみを一致とみなして Cohen (1960) の κ 係数を算出した。

【結果および考察】42 試合から計 474Seq が抽出された。このうち完全判定可能 Seq は 454 件 (95.8%) であり、判定困難コードは TA3 が 17 件、NA3 が 3 件であった。観察者内信頼性は $\kappa = 0.903$, 観察者間信頼性は $\kappa = 0.924$ を示し、いずれも Landis ほか (1977) の基準において「Almost perfect (ほぼ完全な一致)」に該当したことから、本モデルによる分類は、観察者内・観察者間のいずれにおいても高い再現性を有すると考えられる。また、状態遷移に基づく状態系列では、「TA2-TR0-NA0-NR0-P0-E0」が 82 件 (17.3%), 「TA0-TR0-P0-E0」が 78 件 (16.5%), 「TA1-TR0-NA0-NR0-P0-E0」が 71 件 (15.0%) と高頻度で観察された。これらの状態系列の分布から、投技試行後に得点へ至らず、寝技攻撃の有無を経て、罰則なしで Seq が終結する流れ、または投技試行や寝技攻撃が観察されないまま「待て」に至る流れが多いことが示された。一方で、投技動作ではない動作による倒れ込みや、寝技攻撃者の判定が難しい場面が散見されており、分類基準のさらなる精緻化が今後の課題として残された。

【結論】本研究で構築した状態遷移に基づく試合構造モデルは、一定の判定可能性と高い信頼性を示した。本モデルは、柔道の試合における投技試行とその結果、寝技攻撃とその結果、罰則を含む攻防の過程を、Seq の終結まで一連の状態系列として整理し、状態遷移として分析するための基礎的な枠組みとなり得る。

開・閉眼片脚立位における柔道経験者の姿勢制御戦略 — 重心動揺の周波数解析から —

○曾我部晋哉（甲南大学）

【目的】近年、柔道を含む武道・格闘技経験者では、競技特性に応じた姿勢制御能力や感覚運動適応が発達する可能性が報告されている。たとえば、柔道選手の姿勢安定性や競技レベルとの関連を検討した研究では、柔道トレーニングが姿勢制御能力に影響する可能性が示されている。また、柔道家は視覚遮断や支持面変化を伴う条件でも優れたバランス制御を示すことが報告されており、視覚だけでなく体性感覚や前庭感覚を含めた感覚情報の再重みづけが関与している可能性がある。そこで本研究では、柔道経験者と一般健常成人を対象に、開眼および閉眼片脚立位時の重心動揺を測定し、前後方向および左右方向の速度パワースペクトルを周波数領域別に比較することにより、柔道経験者に特徴的な姿勢制御戦略を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象は、立位姿勢保持に影響を及ぼすような傷害や手術歴のない一般健常男性 13 名、柔道経験男性 11 名であった。一般健常男性は年齢 21.8 ± 1.7 歳、身長 168.9 ± 4.0 cm、体重 60.6 ± 7.9 kg、柔道経験男性は年齢 21.0 ± 1.2 歳、身長 170.1 ± 7.9 cm、体重 75.4 ± 9.9 kg、柔道歴 15.7 ± 1.0 年であった。重心動揺の測定には、システムグラフィコーダ G-5500（アニメ社製）を使用した。被験者には、片脚、すなわちボールを蹴る際の軸足でプラットフォーム上に立たせ、腕は胸の前で組ませた。この姿勢を保持したまま、開眼および閉眼の 2 条件で、それぞれ 30 秒間の重心動揺を測定した。得られたデータから、前後方向および左右方向の速度パワースペクトルを MEM（最大エントロピー法）により解析し、低周波域 0.04- 0.20 Hz、中周波域 0.20- 2.00 Hz、高周波域 2.0- 10.0 Hz の面積比を算出した。統計処理には対応のない t 検定を用い、有意水準は 5% 未満とした。

【結果および考察】開眼片脚立位では、前後方向の速度パワー面積比において、低周波域は柔道経験群 $3.59 \pm 0.74\%$ 、一般成人群 $2.93 \pm 0.70\%$ であり、柔道経験群が有意に高値を示した。また、中周波域は柔道経験群 $55.95 \pm 4.49\%$ 、一般成人群 $52.22 \pm 4.35\%$ であり、同様に柔道経験群が有意に高値を示した。

閉眼片脚立位では、前後方向の速度パワー面積比において、中周波域が柔道経験群 $56.51 \pm 3.24\%$ 、一般成人群 $50.38 \pm 6.40\%$ であり、柔道経験群が有意に高値を示した。一方、高周波域では、柔道経験群 $38.96 \pm 4.78\%$ 、一般成人群 $47.36 \pm 7.20\%$ であり、柔道経験群が有意に低値を示した。

本研究において、一般成人群では閉眼片脚立位時に高周波域の割合が高かったことから、視覚情報が失われた状況で姿勢を維持するために、足関節周囲の細かな修正反応や感覚入力への依存が増大した可能性がある。一方、柔道経験者では、組み合わせ、崩し、投げ、受け身などを通じて、視覚に頼らずに相手の力方向や自己の身体位置を感じ取り、重心を制御する経験を長期間積み重ねている。そのため、閉眼条件においても高周波的な微修正に依存するのではなく、体性感覚や前庭感覚を利用した、より滑らかで全身的な姿勢制御戦略を用いていた可能性がある。

【結論】以上の結果から、柔道経験者は視覚情報が制限された不安定な片脚立位条件においても、急速で細かな姿勢修正に依存するのではなく、体性感覚や前庭感覚を利用した、より安定的で全身的な姿勢制御戦略を用いている可能性が示唆された。これらの能力は、競技パフォーマンスのみならず、転倒予防や姿勢制御能力の向上にも応用できる可能性がある。

異なる負荷での事前運動が柔道選手の握力に与える影響

○佐々木健志（順天堂大学）、竹澤稔裕（順天堂大学大学院）、伊藤潔（九州共立大学）、大嶋悠正（筑波大学大学院）、廣瀬伸良（順天堂大学大学院）

【目的】柔道における攻撃防御は、柔道衣を介して互いに組み合わせることで展開されるため、「握る」という動作は必要不可欠である。先行研究においては、競技レベルが高い選手ほど最大握力が大きく、その持久能力の高いことが報告されており、握力は柔道のパフォーマンスに大きな影響を与える要素の一つであると言える。柔道競技会時における選手は、自身のパフォーマンス向上を目指し、多様なウォーミングアップを実施しているが、その効果や根拠については明らかとなっていないものが多く、握力発揮についても同様の状況である。本研究では異なる負荷強度による事前運動を実施することが柔道選手の握力発揮に及ぼす影響を検討することを目的とした。

【方法】日常的に柔道のトレーニングを行なっている男子学生 17 名を対象に、最大握力および筋力発揮率（RFD: rate of development）の測定と持久握力の測定を最大握力および RFD の測定については、W-up の 3 分後に Pre test、その 5 分後に各条件（CON 条件、30%1RM 条件、60%1RM 条件、90%1RM 条件）での事前運動を実施し、8 分間の休息の後に Post test を実施した。持久握力については、W-up の 3 分後に各条件（CON 条件、30%1RM 条件、60%1RM 条件、90%1RM 条件）での事前運動を行い、8 分間の休息の後に持久握力測定を実施した。得られた測定結果から平均値および標準偏差を求め、比較検討した。

【結果および考察】30%1RM 条件および 90%1RM 条件では最大握力の有意な増加が見られ、60%1RM 条件においても増加傾向が見られたことから、負荷を伴う事前運動は最大握力を高めることが示唆された。特に、変化率の条件間比較では 90%1RM 条件でのみ CON 条件より有意に高値を示したことから、高強度の事前運動は最大握力発揮を増強させるための有効な条件である可能性が示唆された。RFD については CON 条件では Pre に対して Post が有意に低値を示したが、他の条件では有意差が認められず、負荷の伴う事前運動がその後の握力発揮の RFD の低下を抑制する可能性があることが示唆された。持久握力については、条件間に有意な差は確認されなかった。

【結論】30, 60, 90%1RM 条件での最大握力が高値を示したことや、CON 条件以外の条件で RFD の低下が確認できなかったことから、負荷を伴う事前運動は其後の握力発揮に良い影響を及ぼす可能性がある。また、90%1RM 条件での最大握力の変化率が CON と比較して高値を示したことから、高強度負荷での事前運動は最大握力を増強させる有効な条件であることが示唆された。

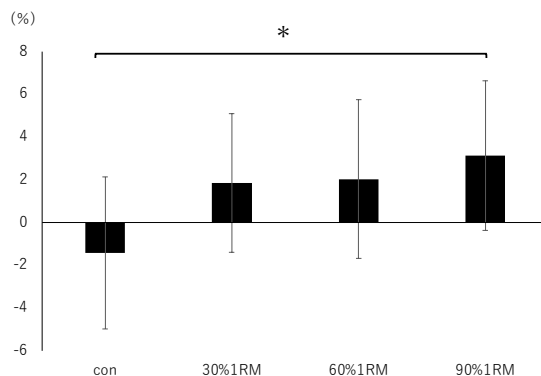


図. 最大握力変化率の条件間比較 $p < 0.05$

投の形動作評価システムを活用したフィードバック効果の検証

○横山喬之（摂南大学）、坂本道人（福岡大学）、久保田誠也（摂南大学）

【目的】

著者らはこれまで、動画像から自動で骨格検出可能な技術である OpenPose を活用した投の形の動作評価システムの開発に関する研究に取り組んできた。これまでの研究として、OpenPose の検出結果を用いて算出した動作の類似度の評価指標としての妥当性に関する検証（横山ほか，2023）、OpenPose の骨格検出精度向上を目的とした研究（横山ほか，2024）、技を掛ける前後の姿勢変化による検出精度の差に関する検討（横山ほか，2025）がある。本研究では、本動作評価システムによる分析結果を用いたフィードバックが、形の技術向上に効果があるかを検証することを目的とする。

【方法】

本研究の分析対象の動作は、投の形（手技・腰技・足技）の施技中の動作のうち取（技を掛ける側）の掛け前（技を掛けるまで）の動作とする。検証用のデータとして、形競技未経験ペアである被験者および形熟練者ペアの施技中の様子をスマートフォンにて正面から撮影された動画像を用いて、以下の手順で検証を行う。

手順①：各動画像に対する OpenPose での検出結果を基に DTW による動画間のフレーム対応付けを行い、形熟練者と被験者の動作の類似度の算出および骨格検出位置を基に算出された部位角度の推移グラフの作成を行う。

手順②：掛け前の取の動作のうち類似度が低い値を示した部位をフィードバック対象部位、各部位の類似度の平均値が低い値を示した施技をフィードバック対象施技として選定する。なお、本研究のフィードバック対象部位として、右技における左大腿部および左技における右大腿部、フィードバック対象施技として、「払腰」および「支釣込足」を選定した。

手順③：被験者に対して、形熟練者と被験者自身のフィードバック対象施技中の動作に対する骨格検出結果を示した骨格検出画像およびフィードバック対象部位の部位角度推移グラフをパソコン画面上に表示した上で、形熟練者 1 名が骨格検出画像をコマ送りしながら形熟練者との差異が大きい箇所を口頭にてフィードバックする。

手順④：フィードバック後に被験者がフィードバック対象施技を実施する様子を撮影し、手順①と同様の処理を行い、フィードバック前後での類似度および部位角度の変化を比較する。

【結果および考察】

フィードバック前後の類似度を比較すると、右技における左大腿部については、払腰では +0.05、支釣込足では +0.16、左技における右大腿部については、払腰では +0.05、支釣込足では +0.06 とフィードバック後の類似度が高い値となった。また、部位角度の変化からも、動作評価システムを用いたフィードバックには一定の効果が見られることが推察された。

【結論】

本研究では、投の形の取が後ろに下がる動作、いわゆる「崩し」・「作り」と言われる掛け前に着目して、取の右技における左大腿部、左技における右大腿部を対象として検証を行い、フィードバック効果が見られた。掛け前における重要な評価ポイントは各技によって異なるため、今後の課題として各技の重要ポイントを選定しフィードバック対象にした上で、技ごとのフィードバック効果の検証を行う。また本研究では、対象者の体組成（特に取と受の身長）に関しては考慮されていないため、体組成のデータが反映された共通の指標での比較・分析が可能な評価手法への改善も今後の課題として取り組む必要があると考えられる。

なお、本研究は JSPS 科学研究費補助金（科研費）25K14656 の助成を受けたものである。

投込人形を用いたタバタスタイルトレーニングの生理学的負荷

○長谷 晃希 (中京大学大学院)・深澤 由杜 (中京大学大学院)
三宅 恵介 (中京大学)・大家 利之 (中京大学)

【目的】

柔道のパフォーマンス向上には、有酸素性および無酸素性エネルギー供給能力の両方を高めることが重要であり、その方法の一つにタバタスタイルトレーニングがある。我々はこれまで、柔道に特異的な投込を用いたタバタスタイルトレーニングが、有酸素性および無酸素性エネルギー供給機構に高い負荷をかけられることを明らかにしてきた。一方、このトレーニングは単独で実施することができないという課題があった。そこで本研究は、投込を用いたタバタスタイルトレーニングにおいて、スタンダード柔道ダミー（以下、人形）を用いて単独で実施した場合の生理学的負荷を明らかにすることを目的とした。

【方法】

研究対象者は成人男子柔道選手 12 名とした。対象者は、20 秒間の全力運動と 10 秒間の休息を挟んで 8 セット行うタバタスタイルトレーニングを、①自転車条件、②人形条件、③受 1 人条件の 3 条件で実施した。測定項目は施技数、運動中の酸素摂取量および心拍数、血中乳酸濃度とした。統計処理は対応のある一元配置分散分析および多重比較検定 (Bonferroni 法) を用い、有意水準は危険率 5% 未満に設定した。

【結果および考察】

施技数は、人形条件と比較して受 1 人条件で有意に多かった ($p < 0.001$)。タバタスタイルトレーニング中の酸素摂取量および心拍数の最高値は条件間で有意な差はなかったものの (図 1)、人形条件ではそれぞれ最大酸素摂取量の 98.8%、最大心拍数の 93.4% に達した。最高血中乳酸濃度は、受 1 人条件と比較して自転車条件および人形条件で有意に高い値を示した (自転車条件: $p < 0.001$, 人形条件: $p < 0.05$) (図 2)。人形条件では、人形を起こす動作が必要であることから運動の中断が生じにくく、持続的な筋活動が維持された。そのため、解糖系によるエネルギー供給の関与が増大したと考えられる。以上の結果から、人形条件は単独で実施可能でありながら、有酸素性および無酸素性エネルギー供給機構の両方に高い負荷をかけられる方法であることが示唆された。

【結論】

投込を用いたタバタスタイルトレーニングにおいて、人形を用いて実施する方法でも高い生理学的負荷をかけられることが示された。本方法は、相手を確保できない状況においても柔道に特異的な動作を取り入れたトレーニングを可能にし、柔道の競技力向上を目的としたトレーニングの選択肢を広げる一助となることが期待される。

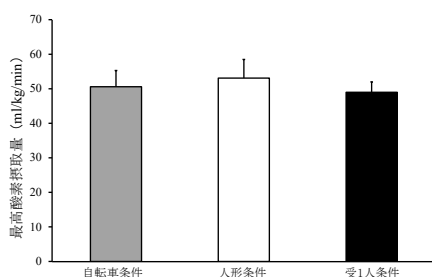


図1 タバタスタイルトレーニング中の最高酸素摂取量

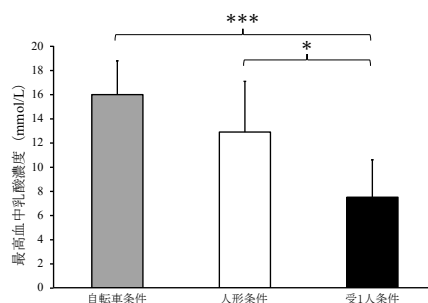


図2 タバタスタイルトレーニング後の最高血中乳酸濃度
(*** $p < 0.001$: * $p < 0.05$)

剣道面打ち動作における全身角運動量の生成戦略：八段と学生の比較および足部離地タイミングに着目して

○村瀬直樹（中京大学）

【目的】剣道の面打ちでは、竹刀を素早く振るだけでなく、前方へ移動しながら姿勢を崩さずに打突へつなげることが求められる。指導現場では「手で打つな、足で打て、足で打つな、腰で打て」といった表現が用いられ、下肢や体幹を含めた身体全体の使い方が重視されている。全身角運動量は、身体各部の回転だけでなく、身体重心に対する各部位の移動も反映するため、全身をどのように使って動作を開始しているかを検討するうえで有用である。しかし、面打ちの動き出しにおいて、熟練者がどのように全身角運動量を発現させているのかは十分に明らかではない。本研究では、剣道八段者と大学剣道選手を対象に、面打ち動作中の全身角運動量に着目し、動作初期の特徴を比較した。さらに、足部離地タイミングを分析し、全身角運動量の発現と下肢の接地・離地様式との関係を検討した。

【方法】対象は剣道八段者 10 名および大学剣道選手 8 名とした。被験者は構えた状態から前方の目標に対して面打ちを行った。三次元動作解析装置を用いて身体各部および竹刀の運動を計測し、身体重心まわりの全身角運動量を算出した。動作開始は身体重心速度が 0.20 m/s を超えた時点、打突は竹刀角速度の変化に基づいて定義した。動作開始から打突までを 0-100% に時間規格化し、各被験者の成功試技 3 本を解析対象とした。全身角運動量の時系列変化に加えて、動作初期における X 軸まわり全身角運動量の積分値と、その試技間のばらつきを算出した。また、床反力データから右足および左足の離地タイミングを求め、動作時間に対する割合として評価した。

【結果および考察】全身角運動量の時系列波形では、解析区間全体を通して明確な群間差は認められなかった。一方、動作初期の X 軸まわり全身角運動量の積分値は、八段者で大きい傾向を示し、特に動作開始直後の区間でその差がみられた。また、打突時間および動作初期の全身角運動量積分値のばらつきは、八段者で小さい傾向を示した。これらの結果から、八段者の面打ちでは、全身角運動量の大きさそのものよりも、動作初期に角運動量を安定して生み出すことが特徴であると考えられる。さらに、足部離地タイミングでは、八段者は大学剣道選手に比べて左右足ともに離地が遅い傾向を示した。とくに右足の離地が遅いことは、踏み込み足を早い段階で前方へ振り出すのではなく、右足の接地を保ったまま身体重心を前方へ移行させる動きと関係している可能性がある。このような接地・離地様式は、下腿・足部と身体重心との相対運動を生じさせ、動作初期の全身角運動量の発現に関係している可能性がある。これは、剣道で経験的に語られる「腰から動く」動作や、打突動作前の「タメ」を力学的に捉える手がかりになる可能性がある。

【結論】剣道八段者の面打ち動作では、全身角運動量の波形全体に大きな違いがあるというよりも、動作初期に角運動量を安定して生み出す点に特徴がみられた。また、八段者では左右足、とくに右足の接地を保ったまま身体を前方へ移行させる傾向がみられた。したがって、八段者の面打ちでは、足を早く振り出すのではなく、接地を利用しながら身体全体を前方へ移行させる下肢の使い方が、安定した動き出しに関係している可能性が示された。

空手道競技における頭部外傷に関する考察

○元野紘平（神戸大学）、武岡由樹（神戸大学）、島稔樹（神戸大学）、
高島良典（兵庫県立リハビリテーション中央病院）、峯山佳恵（神戸大学）、黒田良祐（神戸大学）

【目的】空手道競技大会にて学年別（小学生・中学生・高校生・大学生）の頭部外傷および脳震盪の発生率を算出し、競技特性との関連を明らかにすること。

【方法】対象は2022年3月から2025年8月に大阪府、京都府、兵庫県で開催された空手道競技大会に参加した大学生以下の選手12894名とした。試合中に発生した外傷を記録分類し、頭部外傷に着目した。頭部外傷に占める脳震盪の割合を算出し、受傷機転および防具の有無との関連について統計学的に解析した。

【結果および考察】調査対象の18大会において頭部外傷は51件認められ、総参加者に対する発生率は0.4%（51/12894）であった。脳震盪の発生率は0.04%（5/12894）であった。頭部外傷に占める脳震盪の割合は、9.8%（5/51）であった。受傷機転としては、突き技32件、蹴り技17件、投げ技1件、転倒受傷1件であった。防具の有無と技別（突き・蹴り）の分布についてカイ二乗検定を行った結果、両群間で有意差を認めた（ $p<0.05$ ）。残差分析の結果、防具なし群では突きによる頭部外傷が有意に多く、防具あり群では蹴りによる頭部外傷が有意に多かった。防具の有無で頭部外傷の有無を比較すると、防具なし5%（1/21）、防具あり13.3%（4/30）であり、両群間に有意差は認めなかった。しかし、防具あり群で脳震盪の発生率が高い傾向を認めたが、症例数が少なく、視野制限・競技レベル・接触強度などの交絡因子の影響を受けている可能性がある。

【結論】空手道競技大会における脳震盪は低頻度であるものの、頭部外傷の約1割を占めており注意を要する外傷である。受傷機転として突き技が最多であったが、防具の有無により受傷機転の分布に差を認めた。一方、防具による明確な予防効果は示されず、今後は競技特性を踏まえた予防戦略の確立が求められる。

空手道競技における上肢外傷の特徴、肩関節脱臼に注目して

○島稔樹（神戸大学）、武岡由樹（神戸大学）、元野紘平（神戸大学）、
高島良典（兵庫県立リハビリテーション中央病院）、峯山佳恵（神戸大学）、黒田良祐（神戸大学）

【目的】空手競技中に発生した上肢外傷（手指、手部、手関節、肘関節、肩関節）について、その競技特性との関わりを明らかにすること。

【方法】2021年3月から2025年8月に大阪府、京都府、兵庫県で開催された小学生からマスターズまでの空手道競技大会に参加した12894人中、大会中に救護対応受けた585名を対象とし、打撲、捻挫、脱臼、骨折について後ろ向きに調査した。

【結果および考察】調査した18大会において、競技中受傷の上肢外傷は35例であった。内訳は手指（打撲:7例、捻挫:5例、脱臼:1例、骨折:4例）、手部（打撲:1例、捻挫:0例、脱臼:0例、骨折:2例）、手関節（打撲:0例、捻挫:2例、脱臼:0例、骨折:2例）、肘関節（打撲:2例、捻挫:2例、脱臼:0例、骨折:0例）、肩関節（打撲:1例、捻挫:0例、脱臼:6例、骨折:0例）であり、手指打撲と肩関節脱臼に集中していた。特に肩関節脱臼のうち4例は同側の脱臼歴のある反復性脱臼であった。反復性脱臼の受傷機転は、突いた瞬間（2例）、引手を引いた瞬間（1例）、相手の蹴りを避けた瞬間（1例）であり、少なくとも引手を引いた瞬間（1例）、相手の蹴りを避けようとした瞬間（1例）の2例は非接触型であった。初回脱臼の2例は組手中に相手選手と衝突し転倒したものと、相手の突きが直接当たったことによる受傷であった。自然整復が2例、現場徒手整復が4例であり、全例が当日の競技を中止し病院受診とした。肩関節脱臼は転倒し手をついた際や、コリジョンスポーツで相手選手との衝突により発生することが一般的である。しかし本調査では大会競技中に発生した少なくとも2例が非接触的な受傷起点であった。先行研究でも反復性肩関節脱臼はコリジョンスポーツに限らず、オーバーヘッド動作や軽微な外力などでも発生しうると報告されている。脱臼により不安定性のある肩関節に対して空手競技の突きや引手といった動作は、その反復動作で再脱臼を生じる可能性がある。

【結論】空手競技中の肩関節脱臼は、反復性脱臼では非接触的受傷起点が含まれていた。反復性脱臼は手術治療が必要になる場合が多く、空手競技はその動作そのものが再脱臼の誘因になる可能性があることから病院受診の徹底や再発予防指導が必要である。

高齢空手道選手の日常生活活動能力に関する研究（第1報） —社会調査データの2次分析を通じて—

○鈴木浩司（日本大学）、谷木龍男（東海大学）、末次美樹（駒澤大学）、水田洋平（伊藤整形外科）、飯出一秀（(公財)全日本空手道連盟）、村田利衛（(公財)全日本空手道連盟）

【目的】超高齢社会の中で空手道が高齢者の健康の維持・増進の可能性を検討することは、この価値を考える意味においても大きな意義がある。先行研究では高齢空手道選手は一般高齢者と比較して静的平衡能力に優れていることが報告されている。しかし、日常生活活動能力については十分に検討されていないのが現状である。そこで本研究は、既存の定量的調査データを用いた二次分析により、高齢者空手道選手（空手道群）と一般高齢者（一般群）と日常生活活動能力の差異について検討した。

【方法】分析には(公財)全日本空手道連盟(JKF)が公表した「高齢空手道選手生活運動能力調査」のデータとスポーツ庁が公表した「令和6年度体力・運動能力調査」の一般高齢者データを用いた。JKFの調査対象は、日本スポーツマスターズ2025空手道競技及び第38回全国健康福祉祭埼玉大会空手道リハーサル大会の出場選手であり、年齢階層は65～69歳、70～74歳、75～79歳の3群に分類されていた。各年齢階層における、空手道群と一般群との比較を、独立サンプルのt検定によって実施した。有意水準は5%未満とした。

【結果および考察】空手道群と一般群のデータを比較した結果、65～69歳群では、走行能力($t=3.67, p<.001$)、障害物越え能力($t=2.17, p=.030$)、立ち上がり能力($t=3.15, p=.002$)、静的平衡能力($t=2.36, p=.019$)において、空手道群が一般群よりも有意に高い値を示した。これらは移動および姿勢制御に関わる能力であり、高齢期に差し掛かったばかりの時期において、空手道群ではこれらの能力が高いことが示唆された。特に、障害物越えや立ち上がりといった動作は下肢筋力および静的・動的平衡能力を複合的に要求するため、空手道の基本動作や反復的な練習との関連が考えられる。

75～79歳群では、歩行能力($t=2.82, p=.005$)、走行能力($t=1.96, p=.050$)、立位保持能力($t=2.79, p=.005$)において有意な差が認められ、空手道群において基本的な移動能力および姿勢保持能力に高いことが示唆された。この年代では複雑な動作能力よりも、歩行や立位保持といった基礎的機能において差が認められた点が特徴的である。これは、加齢に伴う身体機能の低下により高難度課題での差が縮小する一方、日常生活の基盤となる能力においては群間差が残存しやすい可能性を示している。

一方、70～74歳群では有意な差が認められた項目は立ち上がり能力($t=2.79, p=.005$)のみで、群間差は明瞭でなかった。この年代は身体機能の個人差が拡大する時期であり、生活習慣や既往歴、運動歴などの影響が強く反映される可能性がある。そのため、群間比較において差が顕在化しにくかった可能性が考えられる。また、階段昇降能力、更衣能力、巧緻性、家事遂行能力については、いずれの年齢階層においても有意差は認められなかった。

【結論】男性高齢者において、空手道群は一般群と比較して、日常生活活動能力において有意に高い値を示した。特に、移動能力および姿勢制御に関わる項目において顕著であった。本報告は群間比較に基づくものであり因果関係を示すものではないが、空手道を継続している高齢者においては、これらの能力が相対的に高い可能性が示された。

今後は、移動能力および姿勢制御に関わる能力に着目し、空手道の継続年数、稽古頻度、稽古内容との関連等を詳細に検討する必要がある。さらに、縦断研究や介入研究を通じて、空手道が高齢者の生活活動能力の維持・向上に寄与する可能性を明らかにしていきたい。

柔道選手における日常の水分代謝と腎バイオマーカーの関連性

○田窪成将(筑波大学), 近藤衣美(大阪体育大学), 内沢彰子(国立スポーツ科学センター, 日本学術振興会特別研究員), 渡部厚一, 平岡拓晃, 増地克之, 岡田弘隆, 下山寛之(筑波大学)

【背景】

柔道をはじめとする体重階級制競技では、減量時において、脱水や飲水制限に伴う腎血流低下や尿細管ストレスによって、クレアチニンなどの腎バイオマーカーが上昇することが明らかとなっており、一過性の急性腎障害を引き起こす危険性が指摘されている。加えて、急性腎障害の反復は慢性腎臓病のリスク因子となることが明らかとなっている。したがって、減量を繰り返し行う柔道選手において、一時的あるいは潜在的な腎ストレスが蓄積することで、減量を実施していない日常状態においても腎バイオマーカーが基準値外を示す可能性も否定できない。しかし、反復的な減量を行うアスリートの日常状態の腎バイオマーカーについては十分に提示されていない。また、腎機能が低下すると尿濃縮能や尿希釈能が障害され、尿量の調整がうまくいかず乏尿あるいは多尿になり水分代謝異常を呈する可能性があるが、柔道選手の日常的な水分代謝状態と腎バイオマーカーとの関連性については十分に検討されていない。

【目的】

本研究では、柔道選手における反復的な減量が日常状態の腎バイオマーカーに及ぼす影響および、日常の水分代謝と腎バイオマーカーの関連性を明らかにすることを目的とした。

【方法】

筑波大学柔道部に所属する反復的に減量を実施する大学生アスリート 16 名を対象に測定を行った。すべての測定は減量のない体重が安定している時期に行った。水分代謝は二重標識水法を用いて測定した。安定同位体投与前をベースラインとし、投与の翌日、1 週間後の午前と午後採尿を行った。得られたサンプルは安定同位体比質量分析計により分析を行った。水素安定同位体比の 1 週間の減衰率から水分代謝を算出した。また、腎臓機能の指標としてシスタチン C、血中クレアチニン、L 型脂肪酸結合蛋白(L-FABP)、好中球ゼラチナーゼ結合性リポカリン(NGAL)の測定を行った。

【結果および考察】

本研究における対象者の水分代謝は 4.25 ± 1.15 L/d であった。腎バイオマーカーのシスタチン C は 0.82 ± 0.09 mg/L、血中クレアチニンは 0.84 ± 0.10 mg/dl、L-FABP は 1.91 ± 1.40 ng/mL、NGAL は 24.80 ± 10.10 ng/mL であった。

シスタチン C および L-FABP は先行研究と比較して(Erlandsen & Randers, 2018; Kamijo et al., 2011)、年間を通して複数回の減量があるにも関わらず 16 名の全員が基準値内であることから、慢性的な腎機能低下は生じていないことが明らかとなった。また、日常の水分代謝と腎バイオマーカーとの間に有意な関連性は認められなかった。したがって、本研究対象の柔道選手においては、反復的な減量に伴う一時的あるいは潜在的な腎ストレスが、日常状態の腎バイオマーカーおよび水分代謝に影響を及ぼしている可能性は低いと考えられる。

【結論】

本研究では反復的に減量を行う柔道選手において、日常状態におけるシスタチン C および L-FABP は基準値範囲内であることを明らかにした。また、日常の水分代謝と腎バイオマーカーとの間に有意な関連性は認められなかった。

IP-1

関西における武道の起源・伝播・普及に関する事例研究

—相対的視点からの考察—

○清野宏樹（桃山学院大学）

【目的】 武道は明治中期以降、武術の近代化過程で形成された文化であり（井上，2024），その語は明治末から大正期に普及した．各種目の明確化は大正から昭和初期にかけて国民への普及に伴った（中林，1987）．このような武道の成立過程を踏まえ，本研究では関西発祥の武道の起源・影響・伝播を実証的に考察することを目的とした．

【方法】 関西所在の武道連盟・団体の史資やインタビュー調査，文献考証を基に実施した．

【結果および考察】 柔道の創始者である嘉納治五郎は，1860（万延 1）年に神戸市東灘区御影で出生し徳川四代将軍家綱の頃から清酒「菊正宗」を醸す家に育った．1870（明治 3）年，父治郎作に伴われて上京し成達書塾に入門したことが，後の柔道の契機となった．剣道は，幕末から明治維新にかけ多くの剣客が大阪へ集結が由来となる．徳川幕府の軍事都市に位置づけた大阪は，1 万人以上の武士が居た．1895（明治 28）年，平安遷都 1100 年と日清戦争勝利を記念し大日本武徳会を結成，活動拠点として京都に武徳殿と武術教員養成所を開設した．大日本武徳会は，1917（大正 6）年から全国の剣士に段位を付与し，剣道の総本山となるが，戦後，大日本武徳会に代わり全日本剣道連盟を発足した．弓道は，1895（明治 28）年に京都の武徳会が中心となり武徳祭の諸流派の競技に由来する．相撲は，来歴は古く，大阪商人の支援で昭和初期まで東京と拮抗した．明治末期の大阪学生大会で人気を博し，1909（明治 42）年に摂南住吉で大阪毎日新聞社主催の第 1 回学生相撲大会を举行了．後年，全国学生相撲選手権大会が堺大浜と東京両国国技館で交互開催の由縁となる．空手道は，摩文仁賢和が退役後警察官となり様々な武術を学び 1934（昭和 9）年に大阪で養秀館を開き，糸東流を創始した．富名腰は，毎月汽車で大阪へ通い，摩文仁に空手の型を教わる．小西康裕は，富名腰に空手を習い，和道流開祖の大塚と約束組手を考案し，嘉納と富名腰を仲介した．当時，経済恐慌で沖縄出身者が仕事を求め大阪に入り諸流派が結集し日本空手道連合会が成立した．日本拳法の創始者である澤山勝は，1906（明治 39）年に奈良県で出生し関西大学柔道部で活躍しつつ拳技に惹かれる．澤山は，防具装着の乱稽古を考案し投技や関節技を含む総合格闘技を確立した．少林寺拳法は，岡田彰男が 1954（昭和 29）年 4 月に本州最初の道院である大阪道院の設立から始まる．翌年 1 月 15 日付の大阪新聞が「禅の拳法」と見出しで報じたことで反響を呼び，報道を契機に普及した．合気道は，1883（明治 16）年和歌山県田辺市出生の植芝盛平が創始した．植芝は，徴兵不合格を機に鍛錬を重ね再検査で合格．後に，1912（大正 1）年に北海道開拓移住民団体団長として紋別郡白滝村に入植し植芝は，大東流合気柔術の武田惣角と出会い武術の開眼を得た．しかし，父の危篤で 1918（大正 7）年に田辺市へ戻り，京都府綾部市で「合気武術」を大成し上京した．なぎなたは，1941（昭和 16）年に国民学校女子正課となり武徳会の卒業生が全高等女学校で指導，1953（昭和 28）年に演舞会が復活し翌年大阪市教育委員会協賛で大阪なぎなた連盟を結成した．

【結論】 本研究から，関西が近代武道の形成・伝播・普及の枢要地域として明らかとなった．

中学校における「日本剣道形」専門剣道部設置の意義と可能性 —設置に至る経緯と設置の課題について—

篠原佳代子（奈良教育大学教職大学院）、太田順康（大阪教育大学）

【目的】

本研究は、中学校において日本剣道形を中心とした剣道部活動を設置し、その教育的意義と実現可能性を検討することを目的とする。

近年、少子化や部活動の地域移行の進展に伴い、剣道人口の減少、とりわけ中学校段階における新規参加者の減少が顕著となっている。その要因としては、防具購入等に伴う経済的負担や、生徒の興味・関心の多様化、生活の多忙化などが挙げられる。こうした状況の中、防具を必要としない日本剣道形を基盤とした活動は、剣道への参加障壁を下げるとともに、「正しい剣道の継承」という観点からも有効であると考えられる。奈良県では、令和8年度より高校生を対象とした奈良県演武大会が開催され、次年度以降は中学生の参加も予定されているなど、形稽古の価値が再評価されつつある。

本研究では、こうした背景を踏まえ、形稽古を中心とした剣道部（以下、「形剣道部」）の設置を試み、その実践経過と現状について報告する。

【実践方法・実践経過】

令和8年度の奈良県では、部活動の地域移行が推進されているものの、指導体制や受け皿の整備が十分ではないことから、当該年度当初は従来どおり学校教員が部活動指導を担うこととなった。そこで、既存の剣道部顧問および管理職と協議し、従来の剣道部と並行して新たに形剣道部を設置することを提案し、了承を得た。形剣道部は週1回活動し、従来の剣道部との兼部あるいは形剣道部のみへの入部も可能とした。対象校はいずれも部員数の減少が課題となっていたため、新入生への部活動勧誘の際、防具を必要とせず、礼法・所作、対人理解などに有効な形稽古の利点や意義について説明し入部促進を図った。

その結果、当該年度に従来の剣道部へ入部した生徒は男子9名であったが、形剣道部のみを希望する生徒はいなかった。この結果を踏まえ、既存の剣道部活動の中に当初の目的である形稽古を計画的に位置付け、週1回の形稽古を導入した。木刀による基本動作や所作に親しませることで、形稽古に対する理解と関心を高める取組を実施している。その結果、現時点では、生徒の形稽古に対する理解や興味・関心は高まりつつあり、専門部としての設置は課題もあるが、既存剣道部に形稽古を導入する形であれば実現可能性が認められた。

【考察及び今後の展望】

今回、形剣道部のみへの入部者は見られなかったが、これは入学前の部活動紹介や部活動見学において、竹刀剣道の活動の様子のみを紹介したため、形稽古の価値や魅力が十分に伝わっていなかったといえる。しかしながら、週1回の形稽古の実施を通して、生徒の理解や興味・関心が高まりつつあることから、形稽古そのものに対する受容の可能性は確認された。

そこで、今回の実践成果を次年度の部員募集活動に活用し、実演や体験活動を通して形稽古の魅力を発信することで、小中学生の形稽古に対する興味・関心を高めることができると考えられる。

今後は、竹刀剣道と形稽古を相互補完的に位置付けた指導体系を構築することにより、剣道人口の維持・拡大のみならず、日本剣道形を通じた剣道文化の継承と発展に寄与することが期待される。

IP-3

大学柔道選手と指導者の非言語的行動の印象と頻度の認知の差異

○熊代佑輔（国際武道大学）、前川直也（国際武道大学）、
廣瀬伸良（順天堂大学大学院）、伊藤潔（九州共立大学）

【目的】コミュニケーションには、言語によるものと言語を伴わない非言語（顔の表情や顔色、視線、身振り、体の姿勢、相手との物理的な距離、声のトーンや声質など）に分類される。情報の伝達経路の手段として言語を補う役割が強調されているが、微妙な感情を表現するには非言語のほうが有効であり、メッセージの3分の2は非言語的変数によって構成されている（遠藤ら、2004）。このことから、選手は指導者の非言語的な行動の影響を少なからず受けているものと推察できる。そこで、本研究は、大学柔道選手が指導者から受ける非言語的な行動の印象と頻度についての実態を明らかにすることである。

第56回大会での発表では、大学柔道選手が指導者から受けた非言語的行動において、選手が抱く印象、選手が体験した頻度に有意差が認められた項目について発表した。加えて、それらの印象や体験頻度の男女差についても発表した。第57回大会では、第2報として、因子分析および重回帰分析の結果を発表した。第58回大会では、学年、経験年数、最高の競技歴、階級による属性で有意差の認められた項目について発表した。

本発表では、追加で指導者を対象に調査をした結果と選手の比較について発表することとする。

【方法】2023年4月～6月に全日本学生柔道連盟に所属する大学柔道選手を対象に郵送法にて調査を行った。そのなかで調査用紙の記載項目に不備のない383名（男268名、女115名）のデータを分析対象とした。

調査項目では、石塚ら（2017）の先行研究で用いたノンバーバルコミュニケーション36項目に対する印象と体験頻度の評価を求めた。指導者が各項目についての行動をとった場合の印象について、「悪い」、「やや悪い」、「どちらでもない」、「やや良い」、「良い」の5件法で評価を求めた。体験頻度については、これまで実際にどのくらい体験したかを、「少ない」、「やや少ない」、「どちらでもない」、「やや多い」、「多い」の5件法で評価を求めた。

指導者を対象とした調査は、2024年1～3月に、全日本学生柔道連盟に所属する大学指導者を対象に実施し、そのなかで調査用紙の記載項目に不備のない23名（男18名、女5名）のデータを分析対象とした。選手、指導者ともに印象、頻度の回答を間隔尺度として取り扱い、選手、指導者の比較を行った。

なお、本研究は国際武道大学研究倫理規則に基づき、研究倫理部会で承認された研究である（承認番号22021、23024）。

倫理的配慮として、対象者には研究趣旨およびプライバシーの保護、回答拒否および回答の中断が可能であることを調査用紙に明記し、同意できる者のみに回答依頼を行った。

【結果および考察】印象においては、「足を組む」「身を乗り出して説明する」「ガッツポーズをする」「上半身を後ろに反り、椅子に浅く座る」「ポケットに手を入れる」「目をつり上げる」「選手の手に触れる」「選手の肩に触れる」「選手の背中に触れる」「選手の顔に触れる」「後頭部で手を組む」「足を踏みならす」「足を広げて座っている」においては、選手のほうが有意に印象が良かった。「沈黙がある」については、指導者のほうが有意に印象が良かった。これらのうち、両者の平均値が3点以上の項目は、「身を乗り出して説明する」「身を乗り出して話を聞く」「腕を伸ばし、触れあえる距離で話す」「にこにこ笑う」「選手の肩に触れる」「選手の背中に触れる」であり、これらは選手が好印象を抱く非言語的行動であると解釈することができ、選手と良好な人間関係を築くうえで重要なことから、指導者は理解しておく必要があるといえよう。

攻撃・防御的な準備動作による打突・防御反応の遅速

○奥村基生（東京学芸大学）

【目的】対人競技では相手の動きに早く正確に反応することが重要である。先行研究では、実験で「蹴る・投げる・打つ」のような動きを映像などで呈示し、参加者に反応させ、競技レベルが高くなると、反応が早く正確になることを示してきた。しかし、これまでの研究では競技の「文脈」を考慮していない。たとえば、剣道では、自分が前進した後は攻撃、後退した後は防御する頻度が多くなる。また、相手が前進した後は自分が防御、相手が後退した後は自分が攻撃する頻度が多くなる。このような文脈は、攻撃や防御の反応の早さや正確性に影響を与えている可能性がある。本研究では、剣道の攻撃・防御的な準備動作を呈示し、その後に攻撃か防御の反応をさせ、準備動作と反応の関係を検討した。

【方法】東京学芸大学の女性剣道部員が実験に参加した。参加者は相手の動作の映像を観察し、キーボードのボタンを押して攻撃と防御の反応をした。映像は、1) 自分も相手も構えて動かない中立的な準備動作、2) 自分が前進する攻撃的な準備動作、3) 自分が後退する防御的な準備動作、4) 相手が後退する攻撃的な準備動作、5) 相手が前進する防御的な準備動作、を呈示した後に、①相手が面か小手を空ける、②相手が面か小手を打突する、という20種類があり、30試技ずつ計600試技①に2攻撃、②に2防御の4選択の反応課題を実施した(図1)。相手役は協力者1名が務めた。映像の撮影時に、相手役の身長、構えたときの二者間距離を測定し、モニタ上の相手の身長が、実際と同じ視野角になるようにモニタと参加者の目の距離を規定した。分析では、誤反応、反応時間が0.20秒以下と1秒以上、各参加者の2標準偏差以上のデータを除去した。

【結果および考察】分析の結果、ほとんどの映像に対する防御の反応時間が短かった。自分が前進・後退する準備動作では、攻撃的な準備動作で攻撃の反応時間が短くなるように、文脈と一致した反応の促進が見られたが、文脈と一致しない反応の変化もいくつか見られた。相手が後退・前進する準備動作では、防御的な準備動作で防御の反応が早くなり、攻撃的な準備動作で防御の反応が遅くなるように、文脈と一致した反応の促進や抑制が多く観察された(図2)。また、防御の反応で正確性が低くなっており、反応の速度－正確性相反が観察された。なぜ、防御の反応時間が短くなり、正確性が低くなるのかは検証が必要である。

【結論】相手が攻撃的な準備動作をすると防御の反応時間が短くなっており、反応が文脈に依存して促進されることが示された。また、相手が防御的な準備動作をすると防御の反応が遅くなっており、反応が文脈に依存して阻害されることも示された。文脈情報がブライム刺激としてはたらき、脳の関連部位を賦活させ、反応を促進・阻害したと考えられる。しかしながら、これらの結果は、参加者数が少なく暫定的なものである。大会までにデータを収集し、まとめたうえで議論したい。

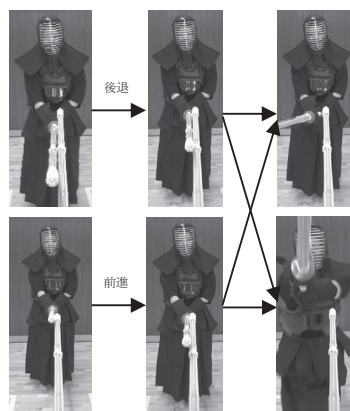


図1. 実験用映像の相手の動作の例

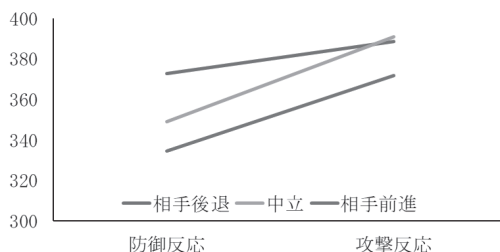


図2. 相手の準備動作による反応時間の変化

IP-5

「国際柔道連盟試合審判規程の更新に伴う試合傾向の変化」 ～2025 年度と 2026 年度の選抜体重別選手権大会の比較～

○伊藤 海央音（東海大学）、位高 駿夫（東海大学・株式会社ハイクラス）、吉田 岳（東海大学）、中矢 力（東海大学）、上水 研一朗（東海大学）

【目的】

国際柔道連盟は近年の競技規則改正において、選手主体の積極的な攻撃行動を促し、よりダイナミックで魅力ある柔道の実現を目指している¹⁾。その一環として実施された有効評価基準の更新は、従来得点として評価されなかった攻撃局面を試合結果に反映させるものであり²⁾、試合の勝敗決定過程や展開様式に影響を及ぼす可能性がある。しかし、有効評価基準更新前後における試合構造の変化については十分に検討されていない。そこで本研究では、全日本選抜柔道体重別選手権大会を対象として、競技規則更新前後の試合データを比較し、競技規則更新が勝敗決定様式、時間構造および得点構造に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は、2025 年および 2026 年に開催された全日本選抜柔道体重別選手権大会における男子の全試合とした。試合映像は全日本柔道連盟配信動画を用い、試合時間、得点の有無および決着方法を記録した。分析項目は、①平均試合時間（時間構造）、②本戦決着率、③本戦一本決着率（勝敗決定様式）、④本戦における有効による決着割合（得点構造）を中心に行った。棄権試合を除き、2025 年は 47 試合、2026 年は 46 試合を分析対象とした。平均試合時間は対応のない t 検定を用いて比較し、有意水準は 5%未満 ($p < 0.05$) とした。

【結果および考察】

2025 年および 2026 年の全日本選抜柔道体重別選手権大会における試合データを比較した結果、平均試合時間は 2025 年が 320 秒、2026 年が 280 秒となったが、t 検定の結果、 $p=0.17$ で有意な差は認められなかった。また、本戦決着率は 2025 年が 42.5%、2026 年が 45.6%であった。本戦一本決着率についても 2025 年が 10.6%、2026 年が 17.3%と高値を示した。さらに、本戦において有効による決着となった試合割合は、2025 年が 10.6%、2026 年が 17.3%であり、2026 年が高値を示した。

これらの結果から有効評価基準の変更後には、平均試合時間は短い値を示したものの、違いは認められなかった。一方、本戦決着率および本戦一本決着率は 2026 年で高値を示し、勝敗決定様式に変化が生じた可能性がある。また、本戦一本決着率の増加は、有効評価基準の変更が部分的得点による決着だけでなく、本戦内の攻防にも影響した可能性を示している。さらに本戦における有効による決着割合は 2026 年で高値を示し、得点構造に変化をもたらした可能性が示唆された。

【結論】

本研究では、有効評価基準更新後に一部の試合指標に変化が認められたものの、これまでの分析においては、試合構造への明確な影響を示すには至らなかった。その背景には国内大会における代表選考を兼ね備えている特性の影響も考えられ、今後は国際大会との比較検討が必要である。

参考文献

- 1) International Judo Federation. *Judo Presents the New Rules*. 2024.
- 2) 全日本柔道連盟審判委員会：『2025-2028 国際柔道連盟試合審判規程の更新について』

テキストマイニングによる武術・武道研究の動向分析

○佐藤皓也（新潟医療福祉大学），小林勝法（文教大学）

【目的】

武術・武道研究は、日本武道学会の大会発表部門にもみられるように、人文社会科学系、自然科学系、武道指導法系といった複数の系統にまたがって展開されてきた。しかし、個別研究の蓄積に比べて、研究主題の全体的な傾向や時期的変化については、なお整理の余地がある。そこで本研究は、日本武道学会の機関誌『武道学研究』に掲載された論文を対象とする。同誌は、武術・武道に関する多様な研究成果を継続的に掲載してきた媒体であり、当該研究の動向を把握するうえで適した資料である。本研究の目的は、同誌に掲載された論文を対象に、テキストマイニングを用いて武術・武道研究の動向と研究テーマの変遷を明らかにすることにある。これにより、武術・武道研究の蓄積を俯瞰的に整理し、今後の研究課題を検討するための基礎的知見を提示することを目指す。

【方法】

分析対象は、『武道学研究』に掲載された論文 638 本（1968-2025）である。KH Coder で論文タイトルに含まれる語を抽出し、頻出語および共起ネットワークを確認した。さらに、共起ネットワークのサブグラフの語と各タイトルの関係を確認し、3 語以上の該当語を含むタイトルを主要語と明確に対応するものとして整理した。そのうえで、年代別に主要語の出現傾向を集計し、武術・武道研究における研究テーマの変遷を検討した。加えて、該当論文の抄録または本文を確認し、研究対象、分析方法、問題関心などを質的に整理した。

【結果および考察】

共起ネットワークでは、サブグラフ（SG）ごとに次のような語が抽出された。

- SG1 剣道、柔道、研究、選手、動作、打撃、正面、大学、体力、競技
- SG2 調査、指導、実態、意識、練習、女子、筋力、減量、変化、体育
- SG3 試合、大会、選手権、全日本、分析、審判、内容、特性
- SG4 中学校、授業、対象、効果、用いる、評価、投技
- SG5 剣術、近世、武芸、思想、嘉納治五郎、考察、問題
- SG6 武道、教育、成立、過程、近代
- SG7 弓道、着目

その結果、「柔道」「剣道」「研究」「選手」「動作」などを中心とする語が現れた。また、「試合」「大会」「分析」「審判」などの競技分析系、「武道」「教育」「成立」「過程」などの歴史系の語も確認された。サブグラフの語と各タイトルとの対応を整理した結果、3 語以上の該当語を含む中核タイトルは 148 本（23.2%）、弱関連タイトルは 448 本（70.2%）、該当なしは 42 本（6.6%）であった。さらに、中核タイトルに含まれる論文の抄録または本文を確認したところ、SG1 では身体動作、体力、技術を対象とした研究が多く、SG3 では試合内容や大会成績の分析が中心であった。一方、SG5・SG6 では、近世、近代に関する歴史的・理論的検討がみられた。

【結論】

『武道学研究』掲載論文タイトルには身体運動・競技分析系の語が目立ち、近世・近代史に関わる語も確認された。また、年代別集計から中核タイトルには時期的な偏りがみられた。これにより、武術・武道研究の多領域性を主要テーマの分布と時期的特徴から示した。

武道歌 1303 首のトピック分析からみる剣術の思想・技術の変遷

○小林勝法（文教大学）、太田順康（大阪教育大学）
佐藤皓也（新潟医療福祉大学）、劉 暢（国際武道大学）

【目的】

江戸時代の剣術諸流派に伝わる武道歌 1303 首について計量テキスト分析を用いて内容的特徴を抽出し、その思想・技術の年代別の特徴を明らかにする。

【方法】

分析の対象とした 1303 首は、今村嘉雄編『武道歌撰集 上巻』（1989 年）に「剣術」として収録されている武道歌である。形態素解析辞書は近代文語 UniDic を使用し、計量テキスト分析には KH Coder v.3.02c を使用した。

まず、トピック分析により武道歌に表されている内容分析を行った。そして、語と年代の関係を調べるためにヒートマップを描画した。さらに、年代別特徴語から年代の特徴を推察した。

【結果および考察】

1. 武道歌に表れる主要概念（心法・理合・技術・修行観など）の抽出

トピックモデルで生成したトピックは、「武士道的価値観」、「心法・勝負観」、「構えと勝敗の理」、「兵法の理合と無刀の境地」、「修行・鍛錬」、「剣技と修得過程」という 6 つの領域に整理された。

2. ヒートマップによる年代比較

「戦国安土」と「江戸初期」は類似した語彙構造を示し、兵法・心法的要素が共通して強い。これに対し、「江戸中期」では「修行・鍛錬」トピックが相対的に強まり、精神的修養としての武道観が前面化する。さらに「江戸後期」では「剣術と修得過程」が最も強く、技法の細分化や実践的技術への回帰が特徴として現れている。

3. 年代別における共起語の上位 10 語（Jaccard 係数による抽出）

「心」と「兵法」は「戦国安土」と「江戸初期」に多く現れるが、「江戸中期」と「江戸後期」には「気」が上位に出現する。

武器については、「戦国安土」には「刀」と「槍」が現れている。

「江戸初期」には出現せず、「江戸中期」には「剣」、「江戸後期」には「太刀」「剣」「竹刀」が出現している。

1戦国安土		2江戸初期		3江戸中期		4江戸後期	
兵法	.290	兵法	.175	修行	.101	打つ	.200
心	.154	心	.171	勝負	.055	太刀	.185
武士	.153	道	.164	勝つ	.055	身	.100
習い	.082	敵	.122	気	.050	取る	.088
勝つ	.059	味	.074	真	.045	剣	.071
刀	.053	真	.043	後	.043	内	.060
不覚	.047	内	.035	波	.040	竹刀	.050
取る	.045	花	.033	勤める	.038	目	.049
極意	.043	業	.032	形	.038	気	.045
聞く	.042	稽古	.032	光	.038	技	.043

【結論】

以上の結果から、武道思想は以下のように変遷していると推察できる。

1. 戦国安土期：実戦的な兵法と武士の心構え
2. 江戸初期：兵法の体系化と“道”としての剣術
3. 江戸中期：修行中心・精神性の深化・形式化
4. 江戸後期：技法の細分化と実践的技術への回帰
「実戦 → 体系化 → 精神化 → 技法の再実戦化」という流れが読み取れる。

大石神影流と心形刀流との接点

○森本邦生（貫汪館）

【目的】堀正平は『大日本剣道史』に「大石神影流の元祖大石進種次は、長竹刀面籠手胴垂を用ふる、今日行はれて居る試合剣道の創始者である。」と記している。また大石進種次自身も大石神影流陰之巻に「其後東都ニ登リ右ノ業ヲ試ミルニ相合人々皆キフクシテ今ハ日本国中ニ広マリタリ、夫ヨリ突胴切ノテカズをコシラエ大石神影流ト改ルナリ、然ル上ハ諸手片手突胴切ノ業ヲ学モノハイヨイヨ吾コソ元祖タルヲ知ベシ」と記している。

男谷精一郎は天保3年（1832）3月5日に大石進種次と試合し、天保7年の柳河藩士の記録には「此先生は専ら他流試合有之故か突も用ひらる。諸手突、片手突ともに有之」と記されており大石進種次と男谷精一郎との交流によって男谷が諸手突、片手突を取り入れたのではないかということは想像に難くない。男谷精一郎以外の他流派の者も大石進種次との交流によって突き技や胴切りを試合に取り入れたことが考えられる。本発表では大石神影流と心形刀流との交流がどのように行われたかを明らかにしたい。

【方法】これまで大石神影流に関する調査の過程で収集した資料の中から大石神影流と心形刀流とのかかわりを証する資料を検証する。

【結果および考察】

1. 伊庭軍兵衛とのかかわり

大石進種次は天保3年（1832）と天保10年（1839）に出府している。天保3年の江戸での滞在についてはその行動が明らかではないが、天保10年から11年にかけての江戸での行動はある程度明らかになった。大石は3月13日に江戸に到着しているが、それに先立つ2月6日、伊庭軍兵衛は江戸の柳河藩邸に月に6日の柳河藩邸での稽古を願い出ている。これは大石進種次が出府することを知ったうえでの願出であると考えられる。また大石は天保10年9月3日に江戸の水野忠邦邸で水野忠邦の前で稽古を行っているが、この時、大石は2度伊庭軍兵衛と試合をしている。次に記録に残るのは天保11年2月13日の水野邸での稽古であるが、この時も大石は伊庭軍兵衛と試合をしており、2月17日には大石は伊庭軍兵衛方で稽古を行っている。天保10年から11年にかけての江戸での大石進と伊庭軍兵衛のかかわりは大石進の出府から柳川へ帰るまでの約1年間続いていたと考えられる。

2. 大石神影流の門人と伊庭軍兵衛とのかかわり

（1）富永清大夫

富永清大夫は蓮池藩心形刀流師範であった。はじめ小城藩の大石神影流師範五郎川大四郎について学び天保8年に免許皆伝となっている。その後天保9年に江戸で伊庭軍兵衛に学んだ。天保9年に出府した久留米藩剣術師範加藤田平八郎の『剣術家並ニ上等之門人大略』には心形刀流伊庭軍兵衛とその門人が記しており、門人には筆頭に小森三四佐、次に富永清大夫が記されている。伊庭軍兵衛は大石進が天保10年に江戸に出府する以前に大石神影流の遣い様を知っていたことになる。

（2）永田右源次

小城藩出身の剣道範士 辻真平の実父永田右源次ははじめ大石神影流師範江副兵部左衛門について学び後に伊庭軍兵衛に学び小城藩で心形刀流の師範となっている。

【結論】

伊庭軍兵衛は天保10年に大石進が出府すると積極的に大石進に接近している。また大石進の出府前にも大石神影流の免許皆伝であった富永清大夫を門人としており、積極的に大石神影流の試合技術を取り入れようとしていたことがうかがえる。

ⅡA-2

関口新心流に見る古伝の座法

海老塚明（関口新心流重印可・東京支部代表 大阪市立大学名誉教授）

【目的】明治維新以後に椅子座の文化が広く普及したが、それ以前の日本では床座が主流であった。そのため、多くの古流流派の座法も「正座」あるいは「立て膝」と呼ばれるものであると考えられている。しかし、和歌山県無形文化財に指定されている関口新心流（柔術・居合術・剣術）の座法は、「正座」あるいは「立て膝」に分類される座法とはかなり趣を異にしている。関口新心流に見られる「居敷座り」（イシキズワリ）と呼ばれる独特の座法（イメージ的には右立て膝から膝を床に着けた状態）を流派の座法として残しているのは管見の限り関口新心流だけである。しかし、この座法は、かつては多くの古流流派に見られるものではなかったかという仮説を提示することが今回の報告の目的である。

【方法】研究方法は、以下の三つである。①関口家に伝わる絵図を中心に、武士の座法の絵図を点検してみる。その際、武家の嗜みであった茶道の座法に関する絵図にも注目してみることにする。②武士の端坐と見なされてきた「正座」の普及過程を辿り直してみる。「正座」の歴史がそれほど古いものではなかったとすれば、「正座」以前は「居敷座り」が武士の主たる座法の一つではなかったかという推測も成り立ちうる。③「居敷座り」の武術性を確認する。「居敷座り」に武術的合理性が認められるならば、武士が積極的に受け入れたという可能性が高まる。なお、報告者のみでは十分な調査、考察ができかねるため、関口芳夫関口新心流第十三代宗家、無津呂弘之（関口新心流重印可、全日本剣道連盟居合道範士八段・剣道六段）および関口新心流東京支部道場門弟有志の協力を仰いだ。もちろん、あり得べき誤りを含めすべての文責は報告者のみに帰する。

【結果および考察】端緒的な調査作業の結果、①絵図、および戦前期の写真からすると、江戸時代の相当以前から「居敷座り」は武士の座法として用いられており、かつては相当数の古流流派の座法とされていたのではないのかとの推測も成り立つ。②武士の座法としての「正座」の起こりは江戸時代前半かと思われる。江戸城内の礼法に則った正式な座法として制定され、江戸時代後期に武士の座法として普及したのではないかと推察される。さらにその後、明治維新後の学校教育の整備および戦前の「国民礼法」制定を通じて「正座」が正しい座法との認識が国民全体に共有されたと考えられる。このことは、「正座」とは別の武士の座法が存在した可能性を示唆するものではないであろうか。③武術的な観点から、「正座」の場合、立つためには、跪座になり足裏を床につけて立ち上がるという二挙動を必要とするが、「居敷座り」の場合は、右膝を浮かせるという一挙動で立ち上がるということが可能である。「居敷座り」では、足裏を床に着けてから身体を浮かせるという動作は基本的に存在しない。支点となるのは右足の側面である。また、右膝を浮かすことで、ただちに左右へ座った状態で向き直ることができる。右膝を浮かせることのみで「浮き身」の状態を生み出せる。以上の観点からすれば、修練の程度による部分が非常に大きいとは言え、「居敷座り」は一定の武術的合理性を有すると考えられる。

【結論】資料の収集、検討段階のため暫定的な結論とはなるが、「居敷座り」は武士の主たる座法の一つであり、少なくとも江戸時代前半期までに成立した一定数の古流流派の座法であった可能性を否定できないと思われる。この仮説の提示が今回の報告の目的であるが、「居敷座り」が必ずしも特異な座法とは言えないという意味では、その目的はある程度果たされたのではないかと考える。この仮説についてのさらなる研究が今後の課題である。

○川島直央（北京体育大学）

【目的】本研究は、清代初期の王志誠による少林拳・心意把の古典写本『拳法摘要（十法）』に説かれる武術理論を体系的に整理し、現代的な解釈可能性を探る。同書は「三節」「四梢」「五行」「身法」「歩法」「手法・足法」「上法・進法」「顧法・開法・截法・追法」「三性法」「内筋法」の十章から成り、身体構造・運動制御・戦術判断・内在的力の発動を統一理論として提示する。本考察では、これらの原理を身体科学・心理学の知見と対照し、伝統武術理論の学際的意義を明らかにする。

【方法】第一に写本の原文を読み下し現代語訳を確定した上で各章の重要概念を抽出した。第二に、それらの概念を解剖学、生理学、運動学、心理学の枠組みと対応させた。第三に、継承者（楊桂吾・胡正生）の口述解釈を参照し実践的身体感覚との整合性を確認した。第四に各理論間の相互連関を図式化し構造を分析した。

【結果および考察】三節論は身体を梢節・中節・根節に分け力の伝達を「起・随・追」と説明する。外見上は先端が先行するが内部では体幹から力が発生し、意念は先端に置かれる。現代の運動連鎖の考え方と親和性が高い。四梢論は髪・爪・齒・舌を同時に活性化して内筋を発動する。これは怒りの生理状態を意図的に模倣した情動調整と自律神経覚醒の統合訓練である。発声は呼吸と動作の同調に寄与する。五行論は五臓・五官・五元素を対応させ、各臓器の活性化が特定の動作特性を生むとする。相生相克は戦術の手本を提供し、「火到金回」に代表される打撃時の呼吸制御と直結する。身法・歩法では起落・進退・反側・縦収と五種の歩法（寸・殿・過・快・剪）が体系化されている。「進走低、退走高」「無心にして妙を尽くす」などの原則は状況適応的な運動制御と自動化の重要性を示す。手法・足法では四種の手と蹴り・踏み込みが記述され、手足の動作原理は相同である。両手同時打ちや「脚踢渾身是空」は力の集約と脱力のタイミングの重要性を示唆する。上法・進法では六資質（工・順・勇・疾・恨・真）が提示され、「真」は心の真摯な発動が内筋を即座に生み出し相手の変化を許さない状態を指す。「心一戦而内筋出」という原理に集約される。顧・開・截・追法は防御から攻撃への移行を段階的に説明する。特に截法の四段階のうち最上位の「截心」は、相手の表情や言葉から意図を読み取り動く前に先制する認知戦略である。三性法は眼（見性）・耳（靈性）・心（勇性）を活性化し常に警戒・判断する「精靈之氣」を養う。状況認識の古典的定式化として現代の安全性確保や体育科学にも通じる。内筋法は筋の四状態（創筋・攻筋・崩筋・拈筋）を定義し、最適な「拈筋」が極速と不可視性を生むと説く。「志→氣→力」の連鎖は、意念が無意識下の筋活動を動員する過程として解釈可能であり、ここに筋膜網理論との接点が見出せる。六合と陰陽はこれら全体を統合する。外三合（手足・肘膝・肩膀）と内三合（心意・意氣・氣力）により全身を一つの筋肉のように同時収縮・拡張させる。陰陽の相互変転は硬軟・遅速・集放を一動作の中で連続させ、運動と静止の間の「回転」に真の力が宿るとする。

【結論】『拳法摘要（十法）』の武術理論は、身体の構造的連関・生理的覚醒・認知的判断・力の発動を一貫した体系として統合した高度な身体論である。運動連鎖、予測的姿勢制御、情動調整、自動化された運動技能、筋膜網といった現代的概念と多くの接点を持ち、実践的な訓練原則として有効性を維持している。特に「拈筋」「截心」「無心」などの概念は、意識と無意識、力と弛緩、予測と反応の統合に関する示唆を与える。今後は定量的な実験研究や機能回復・運動能力向上への応用研究が期待される。

「清水寺縁起絵巻」に見られる弓矢

○黒須 憲(東北学院大学)

【目的】現在、蝦夷は単一民族ではなく日本人とアイヌが混住した多様な集団と考えられている。「清水寺縁起絵巻」の戦闘場面に描かれている弓矢の形態から、蝦夷についての可能性をさぐる。

【方法】歴史資料、文献等による考察

【結果および考察】京都清水寺の創建は坂上田村麻呂であり、征夷大將軍として蝦夷征伐を行った。清水寺にはその時捕らえられ殺害された蝦夷のリーダー阿弼流爲(アテルイ)と副將軍、母禮(モレ)の慰霊碑がある。「清水寺縁起絵巻」(東京国立博物館所蔵・重要文化財)は室町時代・永正14年(1517)土佐光信により作成され、坂上田村麻呂の蝦夷討伐(791)の様子が描かれている。年

代的にその信憑性は定かではないが、上中巻にみるような蝦夷との合戦場面はほかに類例がなく、16世紀



始めころ朝廷の人間が「蝦夷」のイメージを伝える記録として貴重である。戦闘場面では田村麻呂の朝廷軍が直弓の上長下短の弓を使用しているのに対し、蝦夷軍は大陸系の握りが中央にある湾曲弓を使用している。作者が意識して区別したかは不明であるが、『吾妻鏡』貞応3年(1224)難破した高麗船の荷物の調査記録によると、高麗の弓は「(本朝の弓と比べて)短く、夷弓(蝦夷の弓)に似ていて、皮製の弦である」と記録されている。

『続日本後紀』に「弓馬の戦闘は夷獠(蝦夷)の生習にして」と語られ、『通天』には「尤も弓矢を善くす」と記されており、蝦夷は狩猟を生業として機動力に富んだ名馬を飼育し日常生活の中で自身の主な戦闘スタイルである弓馬(騎射)の技術を磨いていた。と言われている。アテルイは阿弼流為と書き「弓」の字は、弓を作る人という意味で、蝦夷の「夷」は弓と大が重なった良弓、または弓の名手を意味する文字といえる。朝廷軍は延暦八年の征夷で戦闘により矢疵を負った負傷者245人と、弓矢の被害が甚大だったと述べられている。蝦夷人というと穴蔵に住み狩猟を中心とした未開で野蛮人のように表現されることが多いが、この「清水寺縁起絵巻」を見る限り、立派な大型船を持ち大陸風の甲冑に進んだ



武器を使用し、組織的で高度な文化を有していたと判断できる。

『日本書紀』によれば570年に高句麗使節が越国に到着し、その後も573年・574年に四年間に三回、越の海岸に到着している。その後も渤海(698-926)の使節は朝鮮半島、対馬経由ではなく約200年の間に、34回も日本を訪れている。高句麗は唐や新羅と戦い、668年(天智7年)にほろび、海を渡って日本に渡来した難民が多くいた。日本では「高麗人」(こまびと)と呼び、716年(霊亀2年)に、関東各地(当時の7カ国)に住んでいた「高麗人」1,799人が武蔵国に集められ、「高麗郡」ができた。しかし、それとは別に朝廷とは関わらず、朝鮮半島の北側から直接、新潟や秋田、青森、北海道、蝦夷の地に移り住んだ高麗人がいたと想像できる。朝廷人は蝦夷との交渉に訳語(おさ)という通訳(官職)を必要とし、蝦夷の言語が日本語と異なっていたことが分かる。

【結論】蝦夷は、日本海を高性能の大型船で往復し馬や鉄器、先進的な技術や文化を持ち込み生活していた高句麗や渤海からの渡来人と考える事ができるかもしれない。

根岸流手裏剣術開眼『安中藩剣術指南役根岸松齡伝』

○早坂義文（古武道研究会）

【要旨】

安中藩荒木流剣術指南役根岸松齡がどのような経緯で、根岸流手裏剣術の流祖となったか、そして、どのように手裏剣術を伝えたかについて、様々な文献などで紹介されている。しかし、どのような経緯で開眼したかは、不明な点があり、実態は未だ不明である。そこで、これを解明するため、根岸松齡に関する文献などを検証したところ、以下の点が判明したので、以下考察する。

【安中藩荒木流剣術指南役根岸松齡】

天保4年11月、安中藩荒木流三代剣術師範根岸宣徳の嫡男として出生。幼名は父の少年名をとって忠蔵と称した。諱を宣教、松齡はその雅号である。嘉永2年(1849)、江戸に出て、祖父および父の門人であった海保帆平の海保塾に入り、塾頭を数年間に渡り、勤めたのち、1か年の予定で奥州武者修業に出て、安政4年(1857)25歳の時、帰参して、父の跡を継ぎ荒木流第四代目の師範職となる。

【根岸松齡の武術歴】

根岸松齡が修業した武術は、

- 1 実父根岸宣徳より荒木流剣術及び一刀流剣術を学ぶ。
- 2 大島流槍術を学ぶ。
- 3 海保帆平、千葉栄次郎から北辰一刀流を学ぶ。
- 4 海保帆平より願立流水戸伝手裏剣術を学ぶ。
- 5 奥州諸藩で武者修業(手裏剣の研鑽)をして帰藩する。

安中町長湯浅淺三郎からの手記「根岸松齡略傳」。成瀬関次の著書「手裏剣」による。

【根岸流手裏剣術開眼まで】

根岸松齡の武術歴から手裏剣の基礎となった流儀は、

- 1 荒木流
拳、組討、小具足、捕手、棒、長巻、手裏剣、乳切木、鎖鎌、居合、縄、勝身。
- 2 大島流
槍、薙刀、生縛、手裏剣、袖槍。
- 3 願立流水戸伝
手裏剣、打針
- 4 奥州武者修業で手裏剣を採求した流儀

會津藩白井流手棒手裏剣術、會津藩神道精武流手裏剣術、仙台藩願立流手裏剣術、仙台藩上遠野手裏剣術、仙台藩香取真魂流飛刀術、南部藩諸賞流手裏剣術、弘前藩本覚克己流手裏剣術である。

少年時期から青年時期にかけ修業した安中藩の武術、荒木流や大島流などから組み入れ根岸流手裏剣術の技法、「仕方、仕掛方、刀術組込、刀術併用など」に体系付け開眼した。

【結論】

海保帆平先生から学んだ願立流水戸伝手裏剣術の更なる完成を目指し、奥州に源流を訪ね、仙台藩で手裏剣術を表武芸としていた松林左馬助伝来の香取真魂流飛刀術を知り、この流儀の師範家今埜元三郎から学び、自ら学んだ手裏剣術に創意工夫を加えて開眼したのが、根岸流手裏剣術である。

ⅡA-6

古弓史料をデータとして記録する方法に関する研究 —吉田大蔵に関連する古弓の記録にあたって—

○松尾牧則（筑波大学）

【目的】吉田大蔵に関連する弓は貴重な史料であり、現物保存と共に、その弓の諸情報を記録しておくことは必要なことである。比較対象となりうるデータとして残すことに意味があり、対象弓の観察（計測）結果をデータとして記録することを試みる。対象弓の何に注目し、どのような事項と手法をもって記録するのが適切なのかを検討する。横断的に弓を比較することができるように、記録方法・測定方法の指針となるものがあることが望ましいという観点をもって検討することを目的とする。

【研究方法】伝書における弓絵図の記載確認として、『家傳弓図』『墓目勸請弓之圖』『弓之圖』内の弓絵図を確認する。記録方法①として原寸大弓形状の書き写しを試み、課題を検討する。吉田大蔵関連弓 5 点を対象として、その古弓の弓形状を記録して残す。記録方法②として、古弓の各箇所を測定し、一覧データとする。記録（測定）方法と記録（測定）項目の妥当性を検討する。こちらも対象弓は、吉田大蔵関連弓 5 点とする。

【結果と考察】『墓目勸請弓之圖』『弓之圖』を確認の結果、弓絵図は約 90%縮小にて描かれており、必ずしも原寸大に描いているとは限らない。弓絵図は張弓の状態で描かれているが、その張弓形状の正確性までは判断することはできない。記録方法①について、古弓は張弓の状態にしてから弓形状を記録することは困難であり、弦を装着しない状態のままの弓形状を記録することが現実的である。40 cm幅の用紙を用いることで、張弓はもちろん、裏反りの大きめの弓にも概ね対応ができる。鉛筆記録で複数なぞった記録線を観察すると、記録誤差が大きく、実寸よりも大きく（太く）なる。籐が巻いてある弓ではその状態を正確には書き写すことができない。ボールペン芯記録では、鉛筆よりも正確に形状を写し取れるものの、弓に密着したままで紙面に垂直を維持しながら書き写すことは困難な作業であり、現実的な方法とはしがたい。鉛筆及びボールペン芯のいずれの方法でも、記録誤差が大きく、筆記具による書き写しは、研究やデータ記録として残すための方法としては望ましいものとはいえない。記録方法②について、全弓長、拵（握り）位置、関板長（上下）、弓弭長（上下）、弓重量、弓幅（各部位）、弓厚（各部位）、全周長（各部位）、塗装・装飾、特記事項（その他）を記録項目とした。弓厚（mm）・弓幅（mm）、弓外周長（cm）ともに、握り節（握り革と矢摺籐の境目）を起点として、下方・上方それぞれ 10 cmごとに測定点をもうけた。弓厚と弓外周長の測定に特定点からの距離を基準にした場合には、節位置によって測定値に影響が及ぼされる可能性がある。塗弓では節を削って漆を塗るのが一般的であり、節位置による影響は少なくなるものの、節位置確認は難しい。

【結論】現状の弓の形状記録には、統一的なものはない。伝書における弓絵図の記載は必ずしも原寸大に描いているとは限らない。鉛筆及びボールペン芯のいずれの方法でも、記録誤差が大きく、筆記具による書き写しは、研究やデータ記録として残すための方法としては適切とはいえない。握り節を起点とした特定点による記録（測定）方法は、白木弓、塗弓に関わらず計測しやすくデータ収集しやすいがデメリットも考えられた。記録（測定）方法と記録（測定）項目の基準を定めれば、第三者であっても横断的に弓の比較をするためのデータとして利用が可能となり、データ価値が高まる。今回の記録（測定）方法と記録（測定）項目によって有益なデータを残すことができると考えるが、更なる検討の余地はある。

女性の生涯柔道環境の構築と維持に関する考察

○稲川郁子（日本体育大学）

【目的】発表者はこれまでに、競技柔道引退後あるいは競技柔道に関わったことのない女性柔道家を対象とした「女性の生涯柔道に関するアンケート調査」を実施し、自由記述に現れた語の出現頻度および共起関係から、女性の生涯柔道を阻害する諸要因を報告した（既報）。本研究は、既報で示された知見を基礎としつつ、女性の生涯柔道に関わる文献および女子柔道振興に関する近年の制度的・実践的動向を新たに調査・整理するとともに、既報の自由記述に対し若干の定性的検討を加えることにより、女性が生涯にわたり柔道を実践しうる環境の構築と維持に関する方向性および具体的方策を提示することを目的とした。

【対象および方法】「女性の生涯柔道に関するアンケート調査」における自由記述の計量テキスト分析において示された頻出語および共起関係の結果（既報）を基礎データとした。これに対し、本研究では女性の生涯スポーツおよび女子柔道に関わる文献的考察を行うとともに、柔道界における近年の取組みについての動向を調査した。あわせて、既報で取り扱った自由記述のうち、新たに若干の定性的検討を加え、これら一連の結果を対照させながら、女性の生涯柔道環境のあり方について検討した。

【結果および考察】既報においては「怪我」と「怖い」、「出産」と「体力」、「結婚」と「仕事」、「子ども」と「稽古」「時間」などの共起関係が示され、女性の各ライフイベントが生涯柔道の阻害要因となっていることが報告された。本研究で改めて文献的に検討したところ、これらは個別独立の課題ではなく、ライフステージに応じて連鎖的に作用する複合的構造を有することが示唆された。すなわち、出産・育児期には身体的負荷（体力低下、運動器外傷の既往およびその後遺）と環境的制約（稽古時間の確保、適切な稽古相手および稽古場所の不在）が同時に課題化し、復帰意欲があっても適切な「受け皿」が存在しないために実践から遠ざかるという経路が、女性スポーツ実践に関する先行研究の知見とも符合する形で確認された。また、既報の自由記述に対する定性的検討からは、「男性との乱取り」に対する忌避感が示された。その背景には、女性同士の稽古機会の乏しさ、ステレオタイプな「母親や妻の役割」と柔道実践との両立に対する周囲の無理解などに加え、「三様の稽古」の理念を十分に理解しない男性柔道家の存在を示唆する記述が認められ、より広範な人的環境上の課題が示された。他方、既報の自由記述に繰り返し現れた「気軽に」「フィットネス感覚で」といった希求は、勝敗や強さを至上としない柔道観の受容基盤が女性柔道家の側に既に醸成されていることを示している。動向調査からは、公益財団法人全日本柔道連盟による女子柔道振興委員会（2017年）、長期育成指針（2023年）、「7割柔道クラブ」（2024年）など、勝敗偏重から脱却した多様なパスウェイの方向性が確認され、これらは上述の女性柔道家における柔道観と整合的であった。さらに、各都道府県連盟などが主催する女性向け稽古会や親子柔道などの草の根的実践事例も複数確認されたが、制度的取組みと現場実践との間には、なお接続の不十分さが残存し、女性柔道家が継続的に通える「居場所」の重要性が示された。

【結論】既報の計量テキスト分析の結果に対し、本研究では新たに文献的考察と近年の動向調査を加え、あわせて若干の定性的検討を行った。その結果、女性の生涯柔道環境の整備には、ライフイベントに対応した柔軟な実践機会の提供、適切な稽古相手の確保、そして地域に根ざした持続的な「居場所」の制度的担保という三層の取組みが必要であることが示された。従来の武道的価値観を相対化しつつ、あらゆる年代の女性が安心して柔道に打ち込める環境の創出と維持に向け、連盟、道場、指導者など、関係する各々が連動する仕組みづくりが今後の課題である。

ⅡB-2

男子柔道選手に対する女性指導者のアドバンテージと特性の質的分析

ー トップアスリートの語りからー

○廣木あすか（早稲田大学大学院）

射手矢岬（早稲田大学）、中川原知波（横浜国立大学）

【目的】柔道界では、女子選手が国内外で活躍する一方、女性指導者の活躍は限定的である。指導現場では競技特性や伝統を重んじる考えから、いまだ男性中心であり、女性指導者が指導を継続できる環境が十分でない(金谷, 2015)ことから、女性が十分に活躍できないという課題が存在している。現在、スポーツ界においても多角的な考え方の重要性から女性の登用が増えている(スポーツ庁, 2019)。さらに、競技者の性別に関係なく女性指導者が活躍できる環境を整備することが提唱され(大勝, 2016)、女性が男子選手を指導する機会が増えることが考えられる。先行研究では、女性アスリートの特徴とセカンドキャリア(山口, 2013)や高校女子柔道選手が求める指導について(中原, 2016)という視点からの研究は行われてきたが、男子柔道選手に着目した女性指導者に関する研究はされていない。そこで本研究は男子選手に対する指導において女性指導者が有するアドバンテージおよび指導特性を明らかにし、女性指導者登用の有効性を探ることを目的とする。

【方法】男子柔道選手への指導経験を有する女性指導者4名を対象に、半構造化面接を実施した。得られた逐語録に対して質的内容分析を行うとともに、語りの特徴を多面的に把握するため、テキストマイニングを実施し、共起ネットワーク分析を行った。

【結果および考察】質的内容分析の結果、[指導経験と背景][指導の工夫と意識][感じる課題・困難][女性指導者の強み][必要な環境整備][男子指導に対する認識]の6カテゴリーが抽出された。女性指導者は、対話を基盤とした言語的指導や個別理解を意識した指導を行っていた。また、男子選手への指導においては、選手との信頼関係の形成や心理面への配慮を重視していることが示された。さらに、観察力や共感的理解、相談しやすい関係性の構築などが、女性指導者の強みとして語られ、男子柔道選手への指導におけるアドバンテージとして捉えられた。一方で、身体的差異や固定概念、指導環境といった課題も示された。これらのことから、女性指導者は男子選手に対して独自の指導特性とアドバンテージを有している可能性が示唆されるとともに、今後は女性指導者が継続的に活躍できる環境整備と組織的支援の必要性が示唆された。

【結論】女性指導者は男子選手指導において、対話を基盤とした信頼関係の形成や心理的配慮、個別理解を重視した独自の指導特性を有していることが示された。それらは観察力や共感的理解といった女性指導者特有のアドバンテージとして機能している可能性が示唆された。一方で、身体的差異や固定概念、指導環境といった課題も存在していた。今後は質的内容分析によって整理された指導特性が、どのような経験や関係性の中で形成され、実践へと結びついていくのかというプロセス構造を明らかにすることで、女性指導者のもたらす新たな指導価値に関する知見が得られると考えられる。

振り返りミーティング及びリフレクションノートが子どもの学びに与える影響 —JKF ステップアップキャンプ参加者保護者アンケートの分析—

○発表者 岡崎紀創（公益財団法人全日本空手道連盟）

【目的】近年、ジュニア期スポーツにおいては、競技技能の向上のみならず、子ども自身が経験を振り返り、主体的に学ぶ力を育成することの重要性が指摘されている。特にジュニア期における省察活動（reflection）は、メタ認知能力や主体的学習態度の形成に寄与するとされている。公益財団法人日本スポーツ協会日本スポーツ少年団が公表した「ジュニア・ユース大会レギュレーション」では、ジュニア・ユース世代のスポーツ大会において、勝利至上主義に偏ることなく、プレーヤー同士の交流、チャレンジする姿勢、スポーツを楽しむ体験を重視する方向性が示されている。また、同レギュレーションでは、ジュニア・ユース期を技術や戦術の習得だけでなく、こころとからだの成長において重要な時期と位置づけ、フェアプレー、他者への敬意、チームワークなど、スポーツを通じた倫理的教育の必要性が示されている。全日本空手道連盟（JKF）が実施する「JKF ステップアップキャンプ」では、小学生競技者を対象に、試合後の振り返りミーティングおよびリフレクションノートの記入を取り入れている。これらの省察活動は、競技結果のみならず、子どもが自らの経験を意味づけ、課題や目標を言語化し、主体的に学ぶ態度を育む実践として位置づけられる。そこで本研究では、2024 年および 2025 年に実施された JKF ステップアップキャンプ参加者の保護者向けアンケートを分析対象とし、振り返りミーティングおよびリフレクションノートが、子どもの学びや意識変容にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】対象は、2024 年および 2025 年に開催された JKF ステップアップキャンプに参加した小学生競技者の保護者を対象に実施したアンケート回答であった。アンケート内容には、キャンプ参加後の子どもの変化、振り返りミーティングおよびリフレクションノートに対する評価、日常生活や競技への影響等に関する自由記述および選択式回答が含まれていた。分析方法として、選択式回答については単純集計を行い、自由記述については質的記述的分析を用いてカテゴリー化を実施した。特に、「主体性」「自己理解」「目標意識」「競技への意欲」「コミュニケーション」等の観点から記述内容を整理し、振り返り活動がもたらした教育的効果について検討した。

【結果および考察】分析の結果、多くの保護者が、振り返りミーティングおよびリフレクションノートを通じて、子どもに前向きな変化が見られたと回答した。自由記述では、「自分で考えるようになった」「目標を言語化する姿勢が見られた」「練習内容を振り返る習慣ができた」「他者の意見を聞く態度が育まれた」などの記述が確認された。また、競技場面のみならず、日常生活においても主体性や自己管理意識の向上を示唆する記述がみられた。これらの結果から、振り返り活動は単なる技術指導の補助ではなく、子どもの省察的学習を促進し、主体的に学ぶ態度の形成に寄与している可能性が示唆された。また、武道教育において重視される「自己を見つめる姿勢」や「他者との関わりを通じた成長」とも関連する実践であると考えられる。一方で、振り返り内容の個人差や、記述活動への慣れによる影響も推察され、今後は子ども本人への調査や継続的な追跡が必要である。

【結論】JKF ステップアップキャンプにおける振り返りミーティングおよびリフレクションノートは、子どもの主体的学習態度や自己理解、目標意識の形成に一定の教育的効果を有する可能性が示唆された。本研究は、空手道における競技力向上のみならず、武道教育としての学びの側面に着目した実践研究として意義を有すると考えられる。今後は、子ども本人への調査や縦断的な検討を通して、省察活動の教育的価値について検証していく必要がある。

II B-4

THE DEVELOPMENT AND SPREAD OF TOYAMA RYU IAIDO: RESEARCH IN PROGRESS

○Harry D. Kearns (Keio University)

[OBJECTIVE]

This presentation introduces an ongoing research project examining the historical development of Toyama ryu iaido from its establishment at the Toyama Army Academy to its global expansion in the twentieth and twenty-first centuries. The presentation will focus on the pre-war development of the Toyama ryu, the major characteristics that distinguish it from other iaido schools; the evolution its three main postwar lineages, and the growth of the style outside of Japan.

[METHODS]

The research combines analysis of martial arts publications, organizational documents, and archival materials. It also examines instructional texts produced by early instructors and their students, as well as interviews with contemporary practitioners and instructors both within and outside Japan.

[RESULTS]

Toyama ryu was originally developed as a simplified and practical form of kenjutsu for army officers. Following World War II, the style devided into three main lines with different emphasis in training and exhibiting variations in kata, tameshigiri (test cutting) techniques and the inclusion of gekken (sparring). Although the number of Japanese practitioners has declined, its popularity has increased overseas.

[CONCLUSIONS]

Toyama ryu's historical status as one of the last kenjutsu styles used in actual combat, together with its emphasis on tameshigiri while retaining elements of classical kenjutsu, has contributed to its growing popularity abroad. However, these same characteristics, particularly the emphasis on tameshigiri, may also be negatively effecting its ability to attract new practitioners in Japan.

剣道七段者における剣道の実践と Well-being の関係

○笹木 春光 (東海大学), 馬越 千里 (聖カタリナ大学・東海大学大学院),
天野 聡 (東海大学) 松本 秀夫 (東海大学)

【目的】比較的高齢になっても継続できる特性を持つ剣道は、長期に渡って修行を積むことができる武道である。そして心身ともに熟練していくことによって、その時々々の年齢・実力に見合った目標を設定して稽古をすることが求められる。稽古を積み重ねながら目標を達成し、さらにレベルアップした次の目標を達成するといったサイクルを繰り返して、自己の向上を感じられること、結果を得ることに生きがいを感じる方が多いと考えるが、また一方では、目先にある目標を達成することだけに価値を置くのではなく、たとえ結果が得られなくても、「目標達成に向かって努力しているライフスタイルを確立できている」こと、さらにはその「確立したライフスタイルを継続すること」に生きがいを感じている方が多いとも考える。とはいえ、現代剣道では熟練した実践者にとって、結果が形となって表れるイベントは多く存在し、高段位（六段～八段）昇段審査会の受審や、全日本演武大会・各地域の剣道祭・高齢者大会などの参加により、日頃の稽古の成果を試し、その結果として「昇段する」「勝利する」ことで生きがいを得られるのは事実である。それを表す一つの傾向として、近年、剣道七段者が多く存在し、様々な現場や多くの大会でも活躍されている。しかしながら、最高段位である八段審査の合格率は 1%を切ることが殆どで、合格することは極めて難しい状況である。そのため、八段合格を最大の目標として稽古を積んでいる七段者は多いのが現状であろう。

筆者らは、これまで範士・教士八段者のインタビュー調査を実施してきたが、八段を目指す七段者の経験や考えを分析し、比較することも重要だと考える。そこで本研究は、剣道七段者を対象として半構造化面接を実施し、剣道の価値観や修行課程に焦点を当て、剣道の実践と Well-being の関係を質的に分析することを目的とする。

【方法】研究協力者は、剣道七段の男性 4 名とした。個別面接が可能な部屋にて 50～80 分程度の半構造化面接を行った。面接は文章と口頭で十分にインフォームド Consent 後、同意書に署名を求め、音声データは対象者の承諾を得た上で IC レコーダーに記録した。面接内容は①実践者としての経験について②活動用具・大会・講習会について③八段合格に向けて心がけていること。④Well-being（幸福感）について⑤人間的成長について（自己の成長・指導者として教え子の成長）について質問した。質問は、ありのままのエピソードや思い・考えを語ってもらうことを配慮した。分析は、TEM（複線経路等至性モデリング）を援用して、時系列に等至点、分岐点、必須通過点、社会的方向づけ、社会的助成などから分析的枠組みの設定を試み、質的記述的分析の手法（グレッグ美鈴他, 2007）によって概念化（コード・サブカテゴリー・カテゴリー）を生成し分析した。

【結果および考察】4 名の協力者において、何れも八段者同様の必須通過点（OPP）、分岐点（BFP）社会的助成（SG）が確認され、また、七段者の特徴を表す等至点（EFP）が確認された。質的記述的分析による概念化においても、七段者ならではのサブカテゴリー・カテゴリー生成に加えて、八段者同様の「健康の保持増進」「コミュニティの形成」といったカテゴリーを生成した。

【結論】本研究結果より、剣道七段者において、剣道を通じて良好な人間関係を形成しながら精進できる環境と、挑戦することへの意欲的で前向きな思考を維持できている点、また、健康的な生活を送っている点を確認することができた。このことから、総じて Well-being が高いことを示唆するものとなった。詳細については、当日発表することにした。

本研究は、JSPS 科研費 JP23K10767 の助成を受けたものです。

ⅡB-6

空手道大会における看護師向け救護実践セミナー開催の評価と展望

○峯山佳恵（神戸大学）、武岡由樹（神戸大学）、上田雄也（神戸大学）、島稔樹（神戸大学）、元野紘平（神戸大学）、高島良典（神戸大学）、黒田良祐（神戸大学）

【目的】身体接触による外傷のリスクが避けられない空手道選手権大会において、選手の安全管理と迅速な初期対応を可能にする救護体制の充実は極めて重要な課題である。医療安全を担保するには、競技特性を深く理解し、的確なアセスメント能力と専門的救護技術を兼ね備えた看護職者の育成が不可欠となる。本研究は、実際の空手道大会と連動して実施した看護師向け救護実践セミナー（以下、本セミナー）について、受講者が得た救護活動に対する「意識やイメージの変化」に焦点をあてて検証・評価し、武道やスポーツの救護の現場における看護師の意識維持・向上に向けた具体的な方策と今後の展望を提示することを目的とした。

【方法】対象は本セミナーを受講し、受講前後の Web 調査に同意した看護師 47 名（年齢 42.0 ± 9.6 歳）とした。プログラムとして、大会前に整形外科医師、看護師、トレーナー等の専門職者により、空手道で頻発する外傷に対応するための講義および、搬送技術の演習、実際の救護ブースでの傷病者対応、大会中のドクターコールへの対応実践を実施した。評価項目として、救護活動に関する「意識・イメージ化」5 項目、および「知識・実践力」12 項目についてセミナー前後に 5 段階リッカート尺度で回答を求め、ウィルコクソン符号付順位和検定を用いて比較分析した。

【結果】統計解析の結果、救護活動に関する意識面の全項目において、セミナー前後で統計学的に有意な向上が認められた。特に「実践の場での活用 ($p = 0.002$)」や「他の競技救護への応用 ($p < 0.001$)」のスコアが有意に上昇しており、実際の救護現場を経験したことで、救護活動に対する具体的なイメージの定着と、活動への高いモチベーション（意識の向上）が確認された。

【考察】本セミナーにより受講者の意識が有意に向上し、高い水準に至った理由として、空手道特有の受傷機転（頭頸部外傷、腹部打撲や下肢の筋挫傷等）を事前に学習した上で、直後の大会現場で実際のトリアージや応急処置に携わるという「臨場感を持った成功体験」が得られたことが挙げられる。これにより、不測の事態への不安が解消され、「自らの専門性を救護活動に生かせる」という強い自己効力感（自信）へと繋がったと推察される。

今後、この高い救護意識を維持・向上させるための方策として、①大会救護ブースでの対応事例（ヒヤリハットを含む）を可視化した「救護活動の振り返りカンファレンス」の実施、②個々のリフレクション（省察）を促すための「活動報告書」の活用と事例検討にまつわるプログラムの導入、③競技ごとのリスクに応じた「シミュレーション型継続学習プログラム」の構築、の 3 点を実施することを計画している。

【結論と展望】本セミナーは、空手道大会における看護職者の救護意識を即時的かつ効果的に向上させる教育モデルである。今後は本研究を踏まえ、意識向上のための方策を基軸とし、柔道や剣道など他武道種目や他のスポーツ競技の特性に応じた救護展開への応用と、スポーツ業界全体の医療安全ネットワークの標準化を進めることが重要な課題である。

欧州におけるスペインの剣道競技力と

ナショナルチームメンバーの特性について

○柳田 昌彦（同志社大学）

【目的】1970年に「国際剣道連盟（FIK）」が設立された当初は、17か国・地域が加盟していたが、2024年7月の時点では、64か国・地域まで拡大している。FIKの傘下で欧州の各国・地域の剣道関係連盟を統括する組織は「ヨーロッパ剣道連盟（EKF）」であり、現在はアフリカや中東の国々も含めて44の国と地域が加盟している。EKFの主な事業に「ヨーロッパ剣道選手権大会（EKC）」の開催があり、第1回大会が1974年にイギリスのブレッチリーで開催されて以降、2026年に第34回大会がモンテネグロのポトゴリツァで開催され、参加国が40か国近くに発展している。スペインは、剣道人口や運営資金などの理由から剣道単独の連盟ではなく、「スペイン王立柔道連盟および関連スポーツ連盟（RFEJYDA）」に合気道や武術太極拳などと共に武道関連種目の一つとして加盟している。本研究では、EKCの結果から欧州におけるスペインの剣道競技力と代表選手の特性について明らかにすることを目的とした。

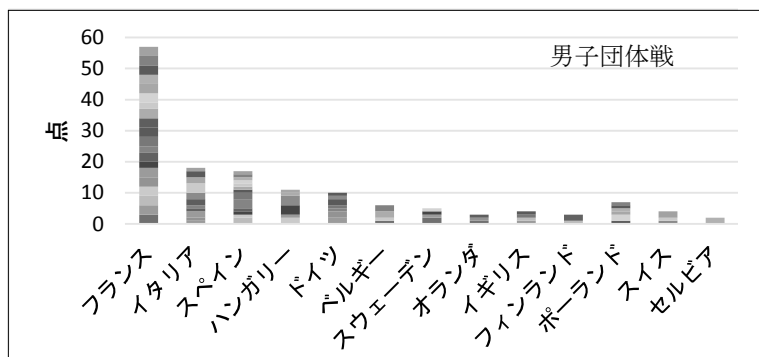
【方法】剣道の競技力については、約30年間（1993年～2025年）のEKCにおける団体戦の結果を用いて検討した。上位入賞国の順位に重み付けするために、優勝を3点、2位を2点、3位を1点として、累積したポイントを積み上げ棒グラフで男女別に解析した。また、スペイン代表選手の特性については、質問票を用いて年齢、職業、学歴、剣道開始年齢、段位について調査した。対象者は2024年に開催された第19回世界剣道選手権大会（WKC）または2025年に開催された第33回EKCに参加した男子9名、女子9名の計18名であった。

【結果および考察】欧州における男子の国別競技レベルを過去約30年間のEKCの戦績から評価すると、フランスがほとんどの大会で優勝しており、圧倒的に強いことが明らかになった

（図1）。次いで、イタリア、スペイン、ハンガリー、ドイツの順であった。また女子の国別競技レベルを評価してみると、男子と同様にフランスが最も高い競技成績を上げており、次いでドイツ、フィンランド、イタリア、ハンガリーの順であった。スペインは、男子に比べて女子の競技力は低く、2025年のEKCで初めてベスト8の成績を収めた。次にスペインのナショナルチームメンバーの特性については、①年齢の平均が女子で31.1歳、男子で33.7歳であり、日本（第19回WKC出場者では女子が27.0歳、男子が27.9歳）に比べて高い傾向にあった。②剣道の開始年齢が、女子の平均で18.6歳、男子で16.4歳であり、特に女子は成人してから始めたものが多くみられた。③職業はコンピューター関連やエンジニア、医師、薬剤師、大学研究員、

会計士など社会的地位の高い職業に従事しているものがほとんどであった。④学歴は全員が大学卒以上（一部は在学中）であり、修士の取得者が8名、博士が2名含まれていた。

図1. EKCの国別戦績



ⅡC-2

日本剣道形における刀操作と足さばきの協調を再考する

○有田祐二（筑波大学）

【目的】剣道における打突動作の大半は、互いにその場で打突できない間合から、足さばきによって身体を移動させ（つつ）刀で打突する複合運動として行われる。ここでの足さばきには、基本技能や形において多用される「送り足」と、対人的技能・試合場面で多用され、全日本剣道連盟『剣道指導要領』において送り足の発展形と位置付けられる「踏み込み足」とがある。彼我の関係や年齢等により送り足で打突する場合もあるが、踏み込み足によって竹刀操作と協調した打突が可能となることは、竹刀打ち込み稽古を成立させる前提であるともいえる。打突動作を刀操作と足さばきの協調という観点からみた場合、これを定量的に扱った研究はほとんど見られない。有効打突の成立には、要件・要素・鍊度に加え、状況や攻防の流れに応じた幅が存在することが一因であると推察される。そこで本研究では、現代剣道の原点である「日本剣道形」に立ち返り、とくに一本目から三本目の打突動作に焦点を当て、刀操作と足さばきの協調について定量的に明らかにすることを目的とする。

【方法】対象動作は、YouTube 全日本剣道連盟公式チャンネル「日本剣道形（日本語版）」（2022年3月14日公開）の映像とした。先行研究（有田ら，2012）で用いられた分節分けを参考に、「（木）刀操作」と「下肢動作」の分節を設定した。

映像中に1/100秒のタイマーを挿入し、YouTube上で計測を行った。30fpsにおいて、剣先（あるいは左右いずれかの足）が動き出した時点を経点とし、剣先が打突部位に到達した時点、または足の移動が完了した時点までを打突所要時間として算出した。その上で各分節を百分率で示し、検討を行った。とくに刀操作においては、木刀が寸止めされた時点である「打突瞬時」と、下肢動作における「右足移動完了」「左足移動完了」との時間的關係を分析した。なお、打太刀の刀操作については、打突部位の高さに到達した時点も考慮した。

【結果および考察】一本目は、打太刀・仕太刀ともに上段の構えからの正面打ちであり、刀操作に振り上げ動作はみられない。

打太刀の打突所要時間は、「刀振り下ろし開始」を経点として「左足着床」まで0.64秒であり、「打突部位到達時点」までは0.24秒であった。「右足着床」まで0.33秒、「左足離床」まで0.40秒、「刀振り下ろし完了」まで0.47秒であった。左上段から右足を踏み出し、剣先が正面の高さに到達するまでに0.16秒を要し、その後両足の移動が完了することから、刀操作が下肢動作に先行しているといえる。一方、仕太刀の打突所要時間は、「右足離床（＝刀振り下ろし開始）」から「左足着床（＝打突瞬時）」までの0.47秒であった。「右足離床」から約0.03秒後に「刀振り下ろし開始」がほぼ同時に生じ、「右足着床」まで0.17秒、「左足離床」まで0.27秒であった。これらの結果から、一本目における仕太刀の打突動作は、打太刀と比較して下肢の移動と刀操作がほぼ同期していると考えられる。

【結論】仕太刀の打突動作における刀操作は、一本目では上段からの振り下ろしのみ、二本目では下段付近まで下げて抜き、再度上段まで振り上げて小手部の高さまで振り下ろす大きな振幅を伴い、三本目では振幅のほとんどない突き動作である。このように各動作はそれぞれ異なる振幅を有している。このことから、多様な動作バリエーションを通じて、下肢動作に協調した刀操作への対応力が養われると考えられる。二・三本目を相互に比較検討し、さらなる検証を行う必要がある。

学校体育における弓道の指導者養成に関する研究

○小川貴子（筑波大学大学院），宮崎明世（筑波大学体育系）

【緒言】 平成 20 年に改訂された中学校学習指導要領保健体育編において、武道を必修とすることが示された。日本武道館が令和 2 年度に実施した「第 6 回中学校武道必修化に関するアンケート」では、中学校における武道種目の実施割合は、調査対象校 7,198 校のうち、柔道が 52.7%、剣道が 34.9%で、柔道と剣道の実施率が 9 割弱を占めていた。弓道の授業の実施率は柔道・剣道と比較して非常に少ないが、生徒が弓道に対して好印象を抱いていることを示す先行研究がある。例えば鼻岡ら(2017)は女子中学生を対象とした弓道授業を行って、「弓道の非日常な運動特性は、女子中学生の興味・関心を十分に惹きつける」可能性があることを示している。しかし、中学校の保健体育の授業で弓道を取り扱っている学校は 0.3%と非常に少ない。

弓道の正課導入が進まなかった歴史的背景として、五賀(2024)は、①体操教授要目に沿った内容が構築されていなかったこと（理論化）、②指導法が確立されていなかったこと（教材研究）、③正課採用に向けた積極的な働きかけがなかったこと（政治力）、④指導者の養成及び資格整備がなされなかったこと（指導者養成）の 4 つの課題を挙げている。また入江(1998)は、課題として施設・設備や指導者不足をあげ、弓道の飛躍的な発展のためには、特に指導者の養成に対して抜本的な対策が必要であるとしている。筆者は卒業論文で、体育授業における弓道導入の課題について、①指導者の確保、②施設の整備、③用具の整備、④安全管理を挙げてその解決策を検討した。その結果、②～④については一定の解決策を示すことができたが、弓道指導が可能な指導者が少ないことが根本的な課題であると考えられる。しかし、弓道授業の指導者養成に関する研究は管見の限り見当たらず、学校体育の弓道授業における指導者養成の実態や課題は明らかにされていない。

【目的】 本研究では、学校体育の弓道授業における指導者養成を目的とした研修会とその参加者の実態や課題を明らかにし、より良い指導者養成の在り方について検討することを目的とした。

【方法】 日本武道館と全日本弓道連盟が開催している全国弓道指導者研修会においてフィールドワークを行い、参加者に対する質問紙調査と、開催者に対するインタビューを行った。その結果得られた知見から、より良い指導者養成の在り方について検討した。

【結果】

2026 年 2 月に開催された「第 14 回全国弓道指導者研修会」において、フィールドワークを行った。また、同研修会の参加者への質問紙調査と、開催者のインタビューを行った。

フィールドワークの結果、研修会の内容は、主に講演、グループディスカッション、目的別研修であり、目的別研修では参加者が目的別に分かれて目的に沿った研修を行った。

参加者は 83 名で、75 名から質問紙を回収した。参加者の内 57 名は教諭であった。参加を決めた動機は 65 名(86.7%)が部活動であり、授業を動機としている参加者は 4 名(0.05%)であった。研修会で期待することでは、指導方法を学ぶことや自身の技術を上げることなどの回答があった。弓道を体育授業に導入するための課題については、「指導者」、「施設」、「道具」、「安全管理」、「費用」に関する記述が多く、中でも「指導者」に関する記述が多くを占めた。研修会の課題として、参加者・開催者ともに時間の少なさを挙げており、内容とスケジュールとの両立が課題であることが示された。

弓道家の右肩痛への鍼灸症例から考える指導方法

発表者 ○三保 翔平（仙台赤門医療専門学校）、
共同研究者 黒須 憲（東北学院大学）

【目的】 弓道は射法八節に基づく一定の動作を行う事から長期にわたる反復動作により肩関節に障害を生じやすい。特に右肩痛は弓道家に多く認められる訴えである。本報告は、2024年4月から10月にかけて右肩痛を訴えた弓道家4例に対する鍼灸施術を通じて、その臨床経過と共通点を整理し、弓道家の身体ケアに関する指導方法を抽出する事を目的とした。

【方法】 対象は弓道歴20～50年のベテラン弓道家4例（男性1例、女性3例）であり、いずれも右肩痛を主訴とした。施術方針は、体表面の浅層筋緊張を緩和しつつ、徐々に深部の緊張を解消する方法を採用した。肩局所に限定せず全身を診て、下半身・体幹のアンバランスにも介入した。各症例の施術経過と所見をまとめ、共通点および相違点を考察した。

【結果と考察】

症例1は日置流弓道歴50年の70代男性。欧州での稽古を契機に右肩痛と可動域制限を呈し、MRIで腱板部分断裂が判明した。鍼灸施術により血流改善や一時的な疼痛軽減は得られたが、腱断裂のため疼痛は持続し、最終的に手術方針となった。加齢による柔軟性低下と弓道偏重の運動習慣が要因と考えられた。

症例2は弓道歴30年の50代女性。半年前より右肩痛を発症。右半身全体の緊張が強かったが、4回の施術により肩痛は消失し、その後は他部位の訴えに移行した。多種目の運動を継続しており、筋緊張改善が起こりやすかったと推察される。

症例3は弓道歴20年の40代女性。半年前から右肩痛を発症したが、筋肉の柔軟性が高く、初回施術で症状が大幅に改善した。継続治療により弓力向上も図る事ができた。

症例4は弓道歴20年の50代女性。右肩痛と可動域制限が1年以上持続し、整形外科で五十肩と診断されていた。鍼灸施術での症状改善は緩徐であったが施術を継続する事で徐々に改善し、約1年かけて肩痛前に引いていた弓力を引けるまで回復した。弓道以外の運動習慣がなく、長期的な偏った動作と加齢による筋柔軟性低下が背景にあると考えられる。

右肩痛以外に4症例に共通してみられたのが右半身全体の緊張であった。弓道動作は右上肢帯に大きな負荷を与えるだけでなく、体幹・下肢の支持性にも依存しているため、右半身全体の緊張が右肩痛に関連している事が示唆された。さらに、若年かつ筋柔軟性が高い者、あるいは多様な運動を行っている者は改善が早い一方、加齢や運動偏重がある者は治癒が遅延する傾向がみられた。

【結論】 弓道家の右肩痛は、肩局所の問題にとどまらず、右半身全体の緊張や運動習慣と密接に関連していた。鍼灸施術は若年者や筋肉の質が柔軟な場合は改善が早かったが、筋柔軟性が低い場合や弓道偏重の運動習慣を持つ症例では改善が限定的であった。弓道家においては、日常的に他の運動を併用し、筋緊張の慢性化を防ぐことが障害予防に重要であり、また鍼灸施術などの物理療法による身体ケアの有効性が示唆された。

柔道競技における背部をグリップする投技の効果と体重階級の特徴 —2025IJF Grand Slam 男子競技を対象として—

○伊藤 潔（九州共立大学）、竹澤 稔裕（順天堂大学大学院）、佐々木 健（順天堂大学大学院）
三宅 恵介（中京大学）、佐藤 伸一郎（拓殖大学）、廣瀬 伸良（順天堂大学大学院）

【目的】本研究の目的は体重階級を考慮し、柔道着のバックナンバーをグリップする投技の効果を他のグリップ部位との比較およびバックナンバーのグリップ位置で検証することである。

【方法】

1. 研究対象・資料：2025IJF Grand Slam 9 大会における男子競技 66・81・100kg 級ベスト 8 以上（Repechage 含む）の 297 試合を対象とし、IJF が公開している IJF JUDO BASE の試合映像を資料とした。
2. 手続き：投技でスコアを獲得した映像から「グリップパターン」「バックナンバー（上部・中部・下部）」「組み方（相四つ・ケンカ四つ）」を評価、Microsoft Excel にてデータ化し、342 スコアを研究対象とした。2 名の分析者間で独立してデータ評価を行い、信頼性担保のため 1 名の分析者は全評価データの 10% 分の映像を 2 週間の期間をあけ再評価し、検者内・検者間評価のため Cohen's Kappa Coefficient を算出した。
3. 分析方法：検討項目の検証には χ^2 検定を用い、有意水準 5% 未満を統計学的有意と判断し、分析には IBM SPSS Statistics 21 を使用した。
4. 検討項目
 - A. グリップパターンと体重階級について：グリップパターンを「襟と袖」「襟と襟、袖と袖、襟、袖」「バックナンバー」「その他」に 4 分類、スコア獲得割合を体重階級間、階級内で比較する。
 - B. バックナンバーのグリップ位置と体重階級について：バックナンバーを上部、中部、下部の 3 つに区分し、スコア獲得割合を体重階級間、階級内で比較した。
 - C. 組み方とバックナンバーのグリップ位置について：「相四つ」と「ケンカ四つ」それぞれで、バックナンバー上部・中部・下部のスコア獲得割合を比較した。

【結果および考察】

- A. グリップパターンにおけるスコア獲得割合は階級間でバックナンバーに有意な差はなかった。階級内では 100kg 級でバックナンバー（30.7%）が「襟と襟、袖と袖、襟、袖」（12.3%）より有意に高く、他の階級で有意差はなかった。バックナンバーの効果は限定的である。
- B. バックナンバーのグリップ 3 区分におけるスコア獲得割合は体重階級間で差はなかったが階級内では 81kg 級で下部（54.8%）が上部（16.1%）より、100kg 級で下部（54.3%）が中部（14.3%）より有意に高かった。バックナンバーの下部グリップが重い階級で有効であることが示唆される。
- C. 「ケンカ四つ」でバックナンバーの下部（64.9%）をグリップしてのスコア獲得割合が有意に高く、中部が有意に低かった（14.3%）。「相四つ」では有意な差はなかった。ケンカ四つでの間合いが遠いことが要因であると推察している。

【結論】世界最高峰のベスト 8 以上の競技では、バックナンバーの効果は体重階級により異なり、重いクラスでバックナンバーの下部グリップが効果的であるといえる。

II C-6

女子柔道選手における釣り手および引き手の握り方に関する研究

○中川原知波（横浜国立大学）、伊藤奨（南山大学）、佐藤愛子（東京女子体育大学）、
久保田浩史（東京学芸大学）、射手矢岬（早稲田大学）

【目的】柔道において組み方は、試合の勝敗を左右する重要な技術要素である。2025 年の IJF ルール改正により、標準的ではない組み方も認められるようになり、釣り手で前襟、引き手で中袖を握る基本の組み方以外にも、多様な組み方や握り方が用いられている。従来の組み方研究は試合映像の分析が中心であり、試合映像のみでは、手の角度やカメラ位置の影響により、握る位置や指の使い方などの詳細な握り方を把握することは難しかった。また、男子選手の組み方に関する研究が多く、女子選手を対象とした研究は少ない。本研究では、女子柔道選手を対象に、握り方に関する質問紙調査を行い、釣り手と引き手の握り方について実態を調査することを目的とした。

【方法】調査対象者は、全国レベルの大学柔道部に所属する女子選手 209 名（年齢:19.6±1.5 歳、身長 159.7±5.5cm、体重 61.3±13.9kg、競技歴:12.8±3.0 年）であった。2025 年 6～7 月に、Google フォームを用いた質問紙調査を実施した。質問項目は基本属性および柔道衣の握り方に関する項目とし、「通常時」と「投げようとする時」の 2 条件について、釣り手・引き手それぞれ 7 種類の握り方から、相四つ・喧嘩四つごとに最大 3 つまで選択させた。統計解析には、 χ^2 適合度検定および標準化残差分析 (Bonferroni 補正) を用いた。

【結果および考察】分析の結果、釣り手・引き手ともに、相手との組み方や状況にかかわらず、釣り手では「前襟」56～68%、引き手では「中袖」42～49%を占め、基本の握り方が最も有意に多く用いられていた。釣り手では、相四つの場合、「前襟」に加え「奥襟」（通常時:24%、投げようとする時:29%）も有意に多く選択され、喧嘩四つでは「前襟」のみ有意に多くなった。これは、相四つでは喧嘩四つに比べて相手との間合いが近くなることから、奥襟を握って重心を崩しやすいためと考えられる。また、引き手では、通常時に「中袖」に加えて「親指で押さえる」（相四つ:21%、喧嘩四つ:22%）が有意に多くなった一方、投げようとする時には「中袖」のみ有意に多く用いられていた。このことから、引き手は通常時か投げる時かの状況に応じて、握り方を選択していることが示唆された。

2025 年のルール改定により標準的ではない組み方も認められるようになったが、女子選手では基本の握り方が多く用いられていた。その背景には、幼少期から釣り手で「前襟」、引き手で「中袖」を握る基本の組み方を指導されてきたことが影響していると考えられる。また、軽量級の女子選手では、組み替えずに技をかける戦術が有効であることも報告されている (伊藤, 2015)。女子柔道選手は、釣り手・引き手のいずれにおいても、比較的素早く握ることができ、効率的で安定した握り方を優先している可能性がある。

【結論】本研究により、女子柔道選手は、釣り手では「前襟」、引き手では「中袖」を握る基本の握り方が主流であることが明らかになった。また、釣り手の握り方は、相手との組み方に影響を受け、相四つの場合「前襟」に加えて「奥襟」が多くなり、喧嘩四つでは「前襟」のみ多く用いられていた。さらに、引き手の握り方は、状況（通常時・投げようとする時）に影響を受け、通常時は「中袖」に加えて「親指で押さえる」が多くなり、投げようとする時は「中袖」のみ多く用いられていた。

柔道の攻防場面における運動制御：アフォーダンス競合仮説の適応可能性

○高野綺海（東京学芸大学大学院），奥村基生（東京学芸大学）

【目的】

柔道の攻防場面では，選手は状況の変化に応じて運動を遂行・調整・切り替える知覚-運動技能が求められる．これまでに小外刈りを用いた2つの実験的研究を行ってきた．研究1では，相手の逃避動作の有無に応じて攻撃を遂行か調整する「調整課題」を設定し，熟練差を検討した．研究2では，相手の反撃（燕返し）の有無に応じて攻撃を遂行するか防御へ切り替える「選択切替課題」を設定し，知覚-運動技能の特性を検討した．本発表では，両研究の結果をアフォーダンス競合仮説（Cisek, 2007）の枠組みから統合的に考察するとともに，課題設定の妥当性と改善の方向性について検討することを目的とする．

【研究1：調整課題】

参加者は大学女子柔道部に所属する上級群（全国大会ベスト8以上8名）と中級群（全国大会ベスト16以下8名）であった．①相手が動かない状況で攻撃を遂行する「単純課題」と，②攻撃の遂行中に相手が逃避動作を開始するかどうかに応じて，攻撃を遂行または調整する「調整課題」を設定した．調整課題では人の2選択肢の反応時間（約300～600ms）より短い時間圧で即興の調整が要求された．中級群は相手が動いた調整課題で運動時間が有意に延長したが，上級群は全課題で一定の運動時間を維持した．参加者と相手の足の接触後の運動速度では，上級群が後半で速度が高くなっていた．これらは，上級群が遂行前から複数の運動の候補を並列に活性化し，遂行中もアフォーダンスの変化を即座に知覚して運動を選択して調整し続けていたことを示しており，アフォーダンス競合仮説の有用性を支持する．

【研究2：選択切替課題】

参加者は大学女子柔道部員14名であった．課題は①相手が反撃してこない状況で攻撃する「単純課題」．②相手の反撃（燕返し）の有無に応じて攻撃の遂行か防御への切替を選択する「選択切替A（早いタイミングで反撃）」および「選択切替B（遅いタイミングで反撃）」であった．いずれの課題でも運動時間に差はなく，参加者は相手の反撃の可能性がある状況でも素早い攻撃を維持できた．一方，正確性は選択切替Bで最も低下し，攻撃の安定性（総移動距離・最大速度）でも選択切替課題で移動距離が長く，速度も高くなることが示された．これは，攻撃の遂行中に相手の動きを知覚しながら運動の選択を継続するというアフォーダンス競合仮説と整合し，また，単純課題とは質の異なる運動を行っていることが示唆された．

【問題提起】

研究1から，熟練者は遂行前から複数の運動を並列に準備し，遂行中も相手のアフォーダンスの変化を即座に知覚して運動を選択して調整し続けているという知見が得られた．研究2では，単純課題と選択切替課題で運動の質が異なることが示唆されたが，明確な知覚-運動技能の差や熟練差までは確認できなかった．次の課題は，運動の切替の技能の相違がより明確になる実験課題を設定することである．しかし，運動の切替点を定義することや，運動の切り替えの失敗を客観的に評価することが難しい．このため，切替や失敗を客観的に評価可能な条件を担保した実験課題の設計が重要な課題となっている．発表時には，実験で切替点や失敗を客観的に判定するにはどのような動作を設定すれば良いか，また熟練差が観察できる攻防場面や技の組み合わせなどの条件についてご意見いただきたい．

II D-2

柔道団体戦における試合展開と待機選手間の心拍同期 :「流れ」を捉える社会生理学的研究

○松井崇、柴田理帆、山口峰史、高橋史穂、高見澤怜、橘雪菜、笠原遼之佑、都留麻瑞
土橋祥平、平岡拓晃、増地克之、岡田弘隆(筑波大学)

【背景】チームの目標達成に向けて各自の役割を果たしながら協働する力(課題結束)を性別を超えて発揮することは、現代人の重要な素養である。スポーツ・武道の個人競技においても、陸上混合リレーや柔道混合団体など、男女が同じチームで競技する場面が拡大している(IOC, 2024)。武道の団体戦は、個人が他者と心身の状態を共有しながら課題結束を果たす際の社会生理機構を検討可能な科学モデルとなるとともに、そうしたチームワークを育む場として機能する可能性がある。

チームの課題結束や社会的結束(一体感)は、スポーツパフォーマンスと関連する(Carron ら, J Sport Exerc Psychol, 2002)。近年、心拍同期を含む複数人の生理的同期は、集団の結束と協調課題パフォーマンスの社会生理指標として注目される(Gordon ら, Sci Rep, 2020)。競技や儀礼では、それらの実行者だけでなく、観測者や観客にも心拍同期を通じた一体感が生じる(Konvalinka ら, PNAS, 2011; Baranowski-Pinto ら, Sci Rep, 2022; Matsui ら, bioRxiv, 2026)。加えて、私どもは、心拍同期を促進する絆ホルモン・オキシトシンが柔道稽古で高まることも報告した(松井ら, 2023)。したがって、武道の団体戦において、試合中の選手への応援や次の試合への緊張や期待を共有する待機選手間では、心拍同期が相手チームの競技力や試合展開と関連して生じる可能性がある。

【目的】大学柔道男女混合団体戦において、待機選手達の心拍数とその同期度が、対戦チームの競技力と試合展開に応じて高まるかどうかを検討する。

【方法】2025年12月20・21日に香陵アリーナ(静岡県沼津市)で開催されたIKAI Christmas CUP第1回全日本学生柔道男女混合団体大会に出場した、T大学の男女選手12名を対象とした。対象試合は、予選第1試合、準決勝、決勝の3試合で、事前の競技力評価と試合結果に基づき、それぞれを「優位・快勝条件」「拮抗・接戦条件」「拮抗・快勝条件」と分類した。

各試合時の待機選手達の心拍数をウェアラブル心拍計により連続記録し、平均心拍数および最高心拍数から評価した。待機選手間の心拍同期は、心拍数の時系列データにおいて相互相関解析を実施し、心拍数動態の類似度(CCF)とそれがピークとなる際の時間差(Lag)を算出した。同時に、試合当日の質問紙により、チームの一体感と各試合における個人の主観的調子を評価し、これらの主観指標の条件間差と心拍同期との関連を検討した。

【結果および考察】質問紙により、試合当日のチーム一体感と各試合における個人の主観的調子には試合条件間の差がないことを確認した。このとき、待機選手達の平均および最高心拍数は、優位・快勝条件よりも、拮抗・接戦条件および拮抗・快勝条件で高かった。待機選手間の心拍同期度は、拮抗・快勝条件でのみ促進され、CCFが高まるとともにLagが短縮した。拮抗・快勝条件における心拍同期度は、チームの一体感とは明確な関連を示さず、個人の主観的調子と関連していた。

心拍数の上昇は、拮抗する相手との試合に伴う緊張や覚醒水準の高まりを反映する一方、心拍同期の促進は単なる覚醒水準の上昇や、チームの一体感というより、個人の調子の良さをチームが「良い流れ」として共有している状態を反映する可能性がある。

【結論】学生柔道男女混合団体戦において、心拍数は競技力が拮抗する相手との試合時に高まる一方、心拍同期度はチームが課題結束を形成し、「良い流れ」を共有している時に高まる可能性が初めて示された。待機選手間の心拍同期度は、個人競技の団体戦における課題結束や試合展開を捉える社会生理指標として、チーム力強化や教育的活用に役立つかもしれない。

石川県柔道における育成段階の評価方法の検討

○近藤俊（北陸大学）、石井孝法（NP0 スポーツコーチングアカデミア）、川端健司（北陸大学）

【目的】

石川県柔道では、長期育成指針に基づいた革新的パスウェイ実証実験「石川モデル」の構築を目指し、定期的な体力測定およびフィードバックを実施している。これは、試合結果のみを評価する選抜システムではなく、多様な評価軸を用いて育成・評価を行う石川の環境に合わせた識別システムの試験導入である。これまでに、各年代の強化事業等において体力測定は実施され、その結果を報告した研究も散見される。しかし、継続的測定を通して個人内変化を把握し、育成現場へフィードバックする評価体制は十分に整備されていなかった。

本研究の目的は、石川モデルにおける体力測定データを用いて、発育・発達段階における体力特性の変化および個人内変化を整理するとともに、長期育成に有用な評価指標について検討することである。さらに、継続的な測定とフィードバックを通して、柔道競技における革新的パスウェイ構築の基礎資料とすることを目的とした。

【方法】

石川県内の小学生柔道選手 95 名を対象に、①身長、②体重、③ディープスクワット、④バックスクラッチテスト、⑤立ち幅跳び、⑥4 方向ジャンプ、⑦チェストパステスト、⑧ハードルステップ、⑨腕の挙上テストを測定した。

測定は 2025 年 7 月 20 日、2025 年 11 月 22 日、2026 年 4 月 29 日の計 3 回実施した。参加状況は、1 回参加が 48 名、2 回参加が 30 名、3 回参加が 17 名であった。

測定結果は、発育・発達段階における変化の把握および個人内変化の分析を目的として整理した。3 回継続参加した 17 名について、測定 1 回目と測定 3 回目を対応のある t 検定を用いて比較した。有意水準は 5%未満とした。

【結果および考察】

1 回目と 3 回目の測定結果を比較したところ、各測定項目および身長で補正したスコアのいずれにおいても有意な向上が認められた ($p < 0.05$)。

また、身長の伸び率と各項目の伸び率との相関を検討した結果、立ち幅跳びで中程度の相関が認められ、発育による身体サイズ変化の影響が示唆された。一方、反動なし立ち幅跳びおよび片足立ち幅跳びでは弱い相関が認められ、4 方向ジャンプおよびチェストパステストでは相関が認められなかった。これらのことから、測定項目によって発育の影響の程度が異なり、個人差や動作特性の影響が存在する可能性が考えられた。

バックスクラッチテストや 4 方向ジャンプなど、左右別に測定した項目では、個人差やばらつきが大きく認められた。

発育・発達には大きな個人差が存在することが指摘されており、これらのことから、発育期における体力評価では一時点での他者比較のみではなく、継続的測定による個人内変化を多面的に把握することが重要であると考えられた。

【結論】

本研究では、育成段階における評価において、一時点での他者比較のみではなく、継続的な測定による個人内変化を多面的に把握していくことが重要であると考えられた。今後は、継続的な身長測定および体力特性の変化を蓄積することで、PHV を含めた発育・発達段階のさらなる詳細な把握につなげていく必要がある。

投の形のバイオメカニクス解析

—背負投を例とした嘉納治五郎『形は文法』論の科学的検証—

○石井孝法（NPO スポーツコーチングアカデミア），坂本道人（福岡大学），
横山喬之（摂南大学），越田専太郎（SBC 東京医療大学）

【目的】嘉納治五郎は，柔道修行における形と乱取の関係を，言語学習における文法と作文になぞらえた．この比喩は広く流布する一方で，形を再現すべき唯一の規範として狭く捉える理解とは整合しない．本研究は，形を有限の手段から無限の実践的産出を可能にする生成的体系——記述・生成・用法基盤的意味での「文法」——として捉え直し，その妥当性を背負投のキネマティクス比較によって検証することを目的とする．

【方法】石井ほか（2019）による三次元動作分析（VICON）のデータを再分析した．被験者は投の形で5度優勝した形世界チャンピオン1組（取・受）と，世界選手権メダリストで背負投を得意とする一流競技者3名であった．分析区間は取の軸足離地から受の接地までとし，取・受の身体重心速度（前後方向）および規格化角運動量（Hinrichs, 1987）を算出した．各試技を試技開始・軸足接地・受左膝最大屈曲・試技終了の4イベントで3局面に時間正規化（50/50/100点，計200点）したのち，形と一流の中央値時系列とのPearson相関係数，正規化クロス相関の最大ラグ，およびピーク値についてCrawford & Howell（1998）の修正t検定を算出した．

【結果および考察】規格化角運動量の時系列形状は形と一流で高く相関した（取 $r=0.93$ ，受 $r=0.97$ ）．ピーク値はCrawford & Howellの単一事例検定で形側が約20%小さい有意差を示した（取 0.18 vs 0.22 ± 0.01 ，受 0.41 vs $0.45 \pm 0.00 \text{ s}^{-1}$ ，いずれも $p < 0.05$ ）．一方，身体重心速度の時系列は両群で形状が非類似であり（取 $r=-0.07$ ，受 $r=-0.78$ ），ピーク到達時刻にも規格化時間で50%以上のずれを認めた．以上から，結果（角運動量）の差は約20%にとどまるのに対し，手段（身体重心速度）は形状もタイミングも異なっていた．すなわち形チャンピオンと一流競技者は，異なる時間配分の身体操作で近似的に等価な角運動量を生成し，投げの成立に至っていた．現代言語学では文法を「有限の規則・構文が無限の産出を可能にする生成的体系」（Humboldt, 1836; Chomsky, 1965）と定義し，記述的・内在化的・使用基盤的に捉えるのが国際的コンセンサスである（Saussure, 1916; Tomasello, 2003）．本結果は，形がこの意味での文法——手段の多様性を許容しつつ等価な結果を生成する体系——として機能していることを示し，「再現すべき唯一の型」とする規範文法的理解では嘉納の生成性比喩を捉えきれない．現行の形競技は「技の理合い」を規定動作との一致に矮小化し，規定外の実現を大幅な減点対象とするが，これは嘉納の往還比喩とも，上記の生成的文法観とも整合しない．投技は形への字義的一致ではなく，投げの成立（有効性）と原理適合（適切性）の二軸で評価されるのが望ましいだろう．

本研究は単一事例の再分析にとどまるが，形を生成的体系として捉える視座と形指導論・形競技評価軸の再検討にむけた仮説提案として位置づけられる．

裸足で稽古を行う武道競技者におけるヘモグロビン濃度の非侵襲的評価：空手道および剣道競技者を対象として

○前川剛輝（福井工業大学スポーツ健康科学部）

【背景及び目的】スポーツ現場では、激しい運動に伴う赤血球の破壊により溶血性貧血が生じることがあり、スポーツ貧血の一因として知られている。特に、足底を繰り返し地面に強く接地させる競技では、機械的刺激により溶血が生じる可能性がある。空手道および剣道は、いずれも裸足で稽古を行う武道競技であり、足底への反復的な衝撃を伴う場面がみられることから、Hb 濃度の実態を把握することは、貧血リスクを考える上で意義がある。

一方、貧血評価には採血を伴う血液検査が一般的であるが、競技者に身体的・心理的負担を与える可能性があり、競技現場で継続的に実施するには制約がある。近年、近赤外分光画像計測法を用いて非侵襲的に Hb 濃度を推定できる装置が開発され、スポーツ現場におけるコンディション評価への応用が期待されている。そこで本研究では、近赤外分光画像計測法を用いて、空手道および剣道競技者の Hb 濃度を非侵襲的に評価することを目的とした。

【方法】対象者は、高校生・大学生の空手道競技者 39 名および大学生の剣道競技者 56 名の計 95 名であった。空手道競技者は男子 25 名（ 17.6 ± 1.9 歳）、女子 14 名（ 16.7 ± 0.7 歳）、剣道競技者は男子 49 名（ 20.0 ± 1.1 歳）、女子 7 名（ 20.3 ± 0.9 歳）であった。Hb 濃度の測定には、近赤外分光画像計測法による非侵襲的ヘモグロビン濃度測定装置（ASTRIMFIT、シスメックス社製）を用いた。Hb 濃度の測定は 2 回実施し、その平均値を測定値として採用した。なお、2 回の測定値が 1 g/dL 以上異なった場合には 3 回目の測定を実施し、近似する 2 つの値の平均値を測定値とした。生活実態調査は、アンケート用紙を用いて実施した。調査項目は、主観的健康状態、運動実施状況、朝食摂取状況および睡眠状況とした。Hb 濃度の群間比較には、対応のない t 検定を用い、有意水準は 5%未満とした。

【結果】男子における Hb 濃度は、剣道競技者が $14.6 \pm 1.4 \text{ g/dL}$ 、空手道競技者が $14.1 \pm 1.5 \text{ g/dL}$ であり、両群間に有意な差は認められなかった（ $p=0.172$ ）。一方、女子における Hb 濃度は、剣道競技者が $13.6 \pm 1.9 \text{ g/dL}$ 、空手道競技者が $11.6 \pm 1.2 \text{ g/dL}$ であり、空手道競技者は剣道競技者と比較して有意に低値を示した（ $p=0.033$ ）。WHO により示されている貧血の基準値である男子 13.0 g/dL 以下、女子 12.0 g/dL 以下に照らして、基準値以下を示した者の割合を算出した。その結果、剣道競技者では男子 6 名（12.2%）、女子 1 名（14.3%）であった。一方、空手道競技者では男子 5 名（20.0%）、女子 10 名（71.4%）であった。特に女子空手道競技者では、WHO 基準値以下を示した者の割合が高かった。

【考察】本研究では、裸足で稽古を行う武道競技者を対象に Hb 濃度を評価した。その結果、男子の空手道競技者および剣道競技者、ならびに女子剣道競技者の Hb 濃度は、同年代のスポーツ競技者における既報値と大きく乖離しない水準であった。一方、女子空手道競技者では、剣道競技者と比較して Hb 濃度が有意に低く、WHO 基準値以下を示した者の割合も高かった。これらの結果から、裸足で稽古を行う武道競技者において、Hb 濃度の低値が一様に認められるわけではなく、特に女子空手道競技者において顕著である可能性が示された。したがって、足底への反復衝撃は Hb 濃度低下に関与する可能性があるものの、裸足で稽古を行うこと自体を主因と断定することはできない。今後は、競技特性、稽古内容、足底への衝撃の程度に加え、性差、月経状況、栄養摂取状況、鉄栄養状態などを含めた多面的な評価が必要である。

ⅡD-6

画像処理を用いた剣道の打突動作における打撃力の非接触測定

○渡邊 隆（仙台高等専門学校）、吉本 陽亮（神戸市立工業高等専門学校）、
兼重 明宏（豊田工業高等専門学校）

【目的】剣道競技において、竹刀の破損による負傷のケースが問題視されており、安全に競技を行うためには、競技者自身が竹刀の状態を的確に把握することが重要であるが、竹刀の使用限度や交換時期に関する明確な判断基準は確立されていないのが現状である。そのため、主観的判断に依らない竹刀の交換時期を推定するシステムの構築が求められている※。

竹刀の破損に影響を及ぼす要因の一つとして、打突時に生じる力（打撃力）が挙げられる。先行研究では、測定器に対して打突を行い、打撃力を直接計測する接触型の手法が提案されているが（原口 他、茨城大学教育学部紀要（教育科学）56号 pp.141-147, 2007）、これらの手法は、稽古や競技中の計測が困難であることが問題として指摘されている。一方、打突動作の撮像画像から特徴量を抽出し、打撃力を推定する非接触型の手法は、実用性の観点から接触型手法に対して優位性を有すると考えられることから、本研究では打突動作時の打撃力を非接触で計測するシステムの開発を目的とする。

【方法】面の打突動作を被験者の側方からハイスピードカメラにて 500fps のフレームレートにて撮像し、振り下ろし動作における竹刀の柄と中結部からそれぞれ特徴点を抽出する。前フレーム画像の特徴点位置から、現フレーム画像の特徴点位置へ移動する方向の情報から瞬間中心を算出し、竹刀の回転運動の中心座標とする。その後竹刀が面に接触するフレームまで本処理を継続し、竹刀が面に接触した位置座標を取得することで回転運動の半径が算出可能となる。事前に実験に利用する竹刀の質量 m を計測しておき、フレームレート情報から竹刀の加速度 a を求め、ニュートンの運動方程式 $F=ma$ の式を用いて打撃力 F を算出する。

本手法の妥当性を評価するための実験として、剣道経験者である 50 代男性 1 名に被験者を依頼し、面への打突動作 5 回分の打撃力の計測を行った。

【結果および考察】前述の原口らが提案した打撃力を直接計測する接触型の手法による打撃力算出結果（接触型）と本研究の打撃力算出結果（非接触型）を比較した結果、接触型における最大打撃力値が 98.92kgf であったのに対して、本手法を用いた場合の平均打撃力値は 75.72kgf、最大打撃力値が 84.81kgf、標準偏差は 5.475kgf であった。標準偏差の値から、誤動作が無い安定した処理を実現できていることがわかる。一方で取得した最大打撃力値を比較すると、接触型の結果は本手法の結果よりも 10kgf 以上高い打撃力値を示したことから、竹刀の振り下ろし時の加速度および竹刀が打突部位へ接触する瞬間の回転中心の位置などの条件の違いによるものと考えられる。

【結論】本研究の目標であった打突動作時の打撃力を非接触で計測するシステムの開発に成功した。今後は、実環境下において被験者の年代・性別・人数を増加させた実験を行うことで信頼性の評価を行う予定である。また、本システムの信頼性を確立することにより、竹刀の交換時期推定のための要素技術としての利用を目指す。

※ 科学研究費補助金（基盤研究 C）研究課題 25K14579

PROJECT KABUTO - TOOLS/DEVICES FOR SAFER KENDO

○ George OGAWA (Stanford Kendo Club Head Instructor)

[OBJECTIVE]

It has been noticed that some kendo practitioners (kenshi) have experienced concussion when struck in the head incorrectly. The objective of this research and development (R&D) project are two fold:

- 1) To develop safer MEN which provides better protection.
- 2) To develop training tools which the instructors and beginner kenshis can utilize to learn striking of men properly.

[METHODS]

The methods used are mostly making usage of digital circuitry and high-tech designs as well as advanced material that are more recently available. The devices will have functionalities such as collecting the striking data such as the force at impact, the angle of the impact and the arc of the shinai before the impact and more. The data can also be transmitted to external devices such as computers, smart phones and smart watches for further analysis as needed.

It is also planned that the new design for men that provides additional protection will include features to redirect the men strike energy and insertion of (or replacement of) the material that are being used currently.

Also, it is planned that additional protection towards the back of the men (for cases when a kenshi falls backwards and hits the back of the head on the floor) as well as better protection against foreign objects being hitting the eyes during practices. There have been cases where a kenshi fell backwards and struck the floor to suffer concussion for a very long time. There also have been case where a split bamboo from the shinai got through the men-gane and penetrated the eye.

[RESULTS AND CONCLUSIONS]

We produced a prototype. The members of the Kabuto Project Team firmly believe that these devices will significantly improve safety in kendo.

全日本学生剣道連盟の黎明 —旧制四高『剣友』（昭和4年）から—

○小田佳子（法政大学） 永木耕介（法政大学）

【目的】人類の試練でもあったコロナ禍を経て2022年2月に勃発したロシア・ウクライナ戦争、さらに2023年10月にはイスラエル軍によるガザ侵攻と続く中で、昭和百年とされる2026年2月にはアメリカとイスラエルがイランへの先制攻撃をしかけ、中東情勢の不安定化と原油危機を招いている。現在の国際情勢は軍事力行使による戦前回帰の様相を呈している。AI時代の到来とともにユヴァル・ノア・ハラリの語る『NEXUS 情報の人類史』を引くと、私たち「賢いヒト（ホモサピエンス）」は10万年におよぶ進化の末に、なぜこれほどまでに愚かな戦争を繰り返し、生態環境とテクノロジーの両面で自滅的な行為や争いを止めることができないのか。

本発表では、かつて争いの「術」であった武術が人間形成という思想性を伴う「道」へと昇華し「武道」に至ったその歴史と伝統を踏まえたい。そこで、百年前（大正から昭和初期）の学生剣道の黎明期に焦点を当て、戦前の全日本学生剣道連盟の発足に至った学生剣士らの高き理想とその思想性について検証することを目的とする。

【方法】以下の先行研究を主要参考文献として、全日本学生剣道連盟の黎明期の学生達とその支援者であるOBらの活動実態とその思想性を考察する。

- 1) 第四高等学校剣友会(1929)『剣友第四号』昭和4年2月 pp. 7-10 他
多羅尾光道「全日本学生剣道連盟の成立」
- 2) 庄子宗光(1956)『剣道五十年』時事通信社, 昭和31年, 学生剣道の隆盛 pp. 155-184
- 3) 庄子宗光(1970)『剣道百年』時事通信社, 昭和45年7月, 学生剣道の隆盛 pp. 143-169
- 4) 関東学生剣道連盟(1982)『三十周年記念誌 昭和五十七年刊』昭和57年9月
○石田一郎「回顧学生剣道五十年」pp. 23-77
○庄子宗光「学生剣道ははじめのころ」pp. 103-104

【結果および考察】

東京帝大を卒業し日本青年館に勤務する多羅尾光道が、母校である旧制第四高等学校剣友会『剣友第四号』（昭和4(1929)年2月発刊）に寄稿した「全日本学生剣道連盟の成立」（昭和3年秋）を中軸に読み解く。「古き伝統と近代的職業意識に依って禍されつつある剣道界にあって、これらの雰囲気から離れて真の剣道を修め真の武士道の精神に生きんとする純真熱烈なる学生の欲求から生まれた全日本学生剣道連盟の成立は最近の快心事であり剣道界に一つの光明を与えるものであると云って敢えて過言ではあるまい¹⁾」と、多羅尾は記した。

ここで記された「禍されつつある剣道界」の状況とは、どのような状況を指しているのか。また「真の剣道」を修め「真の武士道の精神」に生きんとする純真熱烈なる学生の欲求とは、どのようなものであったのか。

庄子宗光によれば、当時の大日本武徳会の剣道は職業剣道家が中心であり、立派な業績を残しはしたものの時と共に弊害も生じ、「純真な学生としては容認できないような傾向も現れてきた⁴⁾」と解説する。この武徳会方式に対する試合方法や審判制度に思い切った改革が試みられた。「昭和3年11月、全日本学生剣道連盟が結成された。第1回全日本大学高専剣道優勝大会が、戸山学校道場において開催され昭和15年まで毎年開催」され、後の戦争により中断を余儀なくされるまで13回連続で開催された。「学生剣道は大正末期から昭和初期にかけて極めて活発な動きを示し、昭和3年の全日本学生剣道連盟結成後は、日本剣道界の中心となって多彩な活動を展開し、剣道史上、学生剣道中心時代ともいべき時期を画した²⁾」。

国民スポーツ大会 「空手道競技」の大会成績から見える課題 「栃木いちご一会国体・燃ゆる感動鹿児島国体・SAGA2024」における国体の 目的と開催地優勝の慣例システム（開催地優勝至上主義）の矛盾に注目して

○末次美樹（駒澤大学）

【目的】本研究は、国民体育大会及び国民スポーツ大会（以下：現在の名称である国スポとする）における空手道競技の大会成績について、その目的と現状の乖離を明らかにするものである。国民体育大会及び国民スポーツ大会（以下：現在の名称である国スポとする）では、「開催地の競技力向上および選手強化システムの蓄積および我が国における競技力向上の基盤的役割を果たす」ことを目的としているが、「開催地優勝」の慣例化や開催年のみ他県より優秀な選手を採用するシステムが慣例となっており、これらは以前より国スポにおける不条理な問題と指摘されている。空手道競技では、第36回大会（1981年滋賀県で開催 初参加）から第78回大会（2024年佐賀県で開催）の全ての大会において開催地が総合優勝している。また、開催年以降の大会で入賞する都道府県は少ないことが確認されているため、空手道競技では「開催地の競技力向上および選手強化システムの蓄積」という目的が果たされていないことが窺える。そこで本研究では、国スポの空手道競技における開催地優勝の慣例システムに注目し、開催地優勝の背景にある矛盾および課題を整理することを試みる。

【方法】国スポにおける空手道競技の詳細については公開されていないため、該当する都道府県空手道連盟に直接問い合わせをした。「①開催が決定した背景②強化費の内訳③強化費が支給された年（開始された年）④強化費が支給された年からの収支報告書⑤スポーツ専門員の有無（人数・氏名・出身都道府県）⑥契約期間中のスポーツ専門員の職業について⑦スポーツ専門員のその後（スポーツ専門全ての大会後について）⑧県外から招待コーチの有無および招待コーチの手当て⑨競技施設の建設等が新たに実施されたのであればその詳細」について情報の共有を依頼した。

【結果および考察】国スポの情報について、栃木県のみ一部情報の共有があったが、鹿児島県、佐賀県からは「情報の共有はできない」との回答があった。空手道競技の大会成績および情報共有のやり取りから「①空手道競技では開催地が必ず優勝するが、翌年の大会やその他の大会では入賞できないことが多い②開催年に向けて強化費が増加しているが、その使徒は公開されておらず、公開の義務もない③強化費の使途について、個別の問い合わせに対して回答が不十分である④国内トップレベルの選手を開催地の選手として出場させる制度を利用し、開催地の指導者・選手の強化ではなく、開催年のみ開催地が優勝するというアピールで目的との矛盾を糊塗する手法が慣例化している⑤毎年、開催地が有利になるシステムが機能しており、大会参加者が容認している」ことが整理された。上記①～⑤のパターンは、国スポ限定で、さらに空手道競技独自の構造によって引き起こされているため、毎年同じパターンを開催地で繰り返すことが可能となる。

【結論】空手道競技において、本来の目的と現状の乖離、そして、開催地優勝の不条理なシステムについて、関係者および大会参加者が容認し、誰も意義を唱えないまま競技が実施されていることが散見された。これらは空手道競技の問題として改善すべき事案であるが、これらの問題が「国スポ限定の開催地優勝のシステム」として、開催地が有利になるように機能していることが示された。

高段者の剣道試合に関する映像分析の信頼性と客観性の検討

○池田孝博（福岡県立大学）、青柳領（USDA 研究会）

【目的】映像による剣道の試合を分析した研究には、技の発現時間（恵土ほか,1999）や技の時代変化（中村ほか,2001）に注目したものがあるが、いずれも全日本選手権大会を対象としている。他方、最高位の八段の移動軌跡の研究（巽ほか,1996）はあるが、いずれも分析に際して、その客観性・信頼性については言及されていない。そこで本研究では、映像に基づく試合分析における信頼性および客観性について検討することを目的とする。

【方法】分析対象となった試合は、2025 年に愛知県で開催された第 23 回全日本選抜剣道八段優勝大会の 3 回戦から決勝の 7 試合である。分析項目は、映像を視聴しながら、技が発現した時間（～1 分、～2 分、～3 分、～4 分、～5 分、延長戦）ごとに、①技を発した「選手」、②発された技の名称（一本打ちの技、連続技、払い技、巻き技、かつぎ技、引き技、片手技、返し技、すり上げ技、打ち落とし技、抜き技、出ばな技：「技（小分類）」）、③②に基づく、しかけ技と応じ技の区分（「技（大分類）」）、④試合者が狙った「部位」（面、右面、小手、左小手、胴、左胴、突）および⑤「効果」（有効、無効）を記録した。分析に際しては、予め一定のルール（例えば、発声の伴わない竹刀操作は有効を狙った技としない、引き技は接近した場面からの技、相手のしかけ技に対して後方に応じた場合は応じ技等）を設定した。分析者は、剣道経験 50 年の教士七段（分析者 A）と剣道経験 8 年で四段（分析者 B）の 2 名である。客観性は分析者 A・B 両名のデータを用い、信頼性は分析者 A によるテスト再テスト法を適用した。その上で①から⑤の各項目についてクロス表を作成し、データがカテゴリカルデータであることを考慮してカッパ係数を算出した。

【結果および考察】両者の客観性については、いずれかが技の発現と認めた 191 施技のうち 162 が一致した（84.8%）。一致した 162 施技について、分析項目それぞれのカッパ係数を算出したところ、「選手」=1.000、「技（小分類）」=0.894、「技（大分類）」=1.000、「部位」=0.990、「効果」=1.000 でいずれの分析項目においても高い客観性係数が示された。一方、信頼性については、分析者 A が 1 回目か 2 回目のいずれかで技と認めた 184 施技のうち、158 が一致した（85.9%）。この 158 施技について 1 回目の 2 回目の分析結果の一致度を確認したところ、「選手」=1.000、「技（小分類）」=0.854、「技（大分類）」=0.895、「部位」=0.990、「効果」=1.000 でいずれの分析項目においても高い信頼性係数が示された。なお、客観性において分析者 A または B が技として認めなかった 29 施技のうち、一方がしかけ技に分類したが、もう一方が技と認めなかったのは 21 施技であったのに対して、一方が応じ技に分類したものの、もう一方が技と認めなかったのは 8 施技であった。一方、信頼性において、いずれかで技と認められなかった 26 施技のうち、しかけ技は 23 施技、応じ技は 3 施技であった。

【結論】分析項目のうち、「選手」「効果」は客観性・信頼性とも完全な一致が認められた。また、「部位」についても客観性・信頼性の係数がいずれも 0.990 で高い一致度が認められた。一方、「技（大分類）」の客観性は完全に一致したものの、信頼性係数は高値ではあるが、完全一致には至らなかった。さらに、「技（小分類）」についてはすべての分析項目の中で最も値が低かった。ただ、本研究で検討した分析項目においては総じて、客観性係数は 0.89 以上、信頼性が 0.85 以上と、一般に個人の測定に適用可能であると言われる 0.8 を上回り、今回設定されたルールとそれに基づく試合の分析の手法は十分な客観性と信頼性を有し、今後の剣道試合の映像分析研究において有用であることが確認された。

障害者との武道稽古で得た指導者の気づき

○三苦保久（滋賀県立大津清陵高等学校）、東山明子（大阪商業大学）

【目的】

剣道は準備や礼法、対人動作など多くの要素を含むため、障害者にとって参加までの敷居（以後バリアという）が高い。このバリアを低くするため、道具や指導法を工夫し、精神性や「氣」を重視した稽古を行うことで、障害の有無にかかわらず共に学べる場（びわこバリアフリー剣道クラブ）を発表者らは共創してきた。本研究は、障害者とともに剣道を中心とした武道稽古を行う中で、指導者が得た気づきを整理し、今後の武道指導に生かすことを目的とする。

【気づき】

- ① 障害とは「欠ける」ではなく「別の何かが秀でる」ことであり、障害者と健常者は対等である。障害は個性である。
視覚消失→聴覚敏感 視覚で得ていた情報を聴覚で補おうとする脳の可塑性。
形を形どおりなぞるのではなく、実際に切りに行くよう真剣味を加えることで、危機感が生まれ、氣の働きの理解が深まる。
- ② 異文化の中での孤立を防ぎ、日本文化に触れつつ日常生活以外の居場所の機能がある。外国人で障害者の二重のハンディがある場合、言語を必要とせず、大声を発し、氣を出し、氣を感じ、打突することが、様々な抑圧からの解放、発散につながる。
- ③ 中途障害者は、元の自分のイメージにとらわれがちで、人の迷惑になる、恥ずかしいといった気持ちが先行し、障害を持つ自己の受容に時間がかかる。しかし、どん底まで落ち切り、障害を受容し再起し一歩踏み出したタイミングで、「できる・できた」の体験や、他者の障害を知ることが、気分を明るくし、前向きにしていく。
- ④ 身体（自分の内部）に意識を向けるとできないことが、意識を外（竹刀など）に向けると身体が動く（片麻痺）。
- ⑤ 健常者と同じ動作や同じ道具にとらわれず、障害に応じた道具や指示方法を工夫することで、誰でもが剣道稽古を享受できる（脳性麻痺や片麻痺、視覚障害等）。
- ⑥ 障害があると無理な力を入れすぎるため、むしろ力を抜くことを体得させる。
- ⑦ 精神障害の場合には特に障害の様相は多様で、健常との境界があいまいであるため、障害の様相を正しく把握し、過保護にならない態度で接する線引きが重要である。
- ⑧ 障害を知ること、正確に理解できずとも知ろうとすること。わかったつもりはむしろ害であり、わからないことを自覚することが障害の受容につながる。

【まとめ】

剣道は互いに向き合い、相手の間合（テリトリー）に入って有効打突を競い合う。相手との間には、上下関係や手抜きや付度はなく対等関係から始まる。相手と対峙したときに感じる氣に反応し、かけひきし、相手のテリトリーに踏み入るやりとりの中で、相手から自分の非を打たれ、自分への投影が必然的に起こる。したがって、剣道は障害の有無に関わらずに両者ともに稽古を通して高めあえる可能性を有すると考えられる。そのためには、次の4点に留意したい。

- ・対等の関係性。障害者も健常者も互いの違いの認知とリスペクトが大前提であること。
- ・剣道の基本である精神性や氣を重視する指導は有効であること。
- ・障害児・者との仲間性、一緒に過ごすこと、ともにあることを大切にすること。
- ・障害の開示が障害の理解と受容につながること。

II-P-5

柔道授業が柔道整復師養成課程学生の学習認識に及ぼす影響（第4報）

—基礎的学習効果から臨床応用的認識への展開—

○福井悠紀子（環太平洋大学，日本体育大学大学院），久保山和彦（日本体育大学）

【目的】

我々はこれまで、柔道授業が柔道整復師養成課程学生の学習認識に及ぼす影響について継続的に調査を行ってきた。先行研究では、柔道授業が集中力や医学知識理解などの基礎的学習効果と関連する可能性を報告するとともに、柔道授業を理論と実践を統合した文武融合型教育として位置付けることの教育的意義について検討してきた。

本研究では、これまでの基礎的学習効果に加え、姿勢・バランス理解、安全管理意識、動作分析、理論と実技の関連理解、臨床判断力など、臨床応用に関連する認識項目を追加し、医学的視点を取り入れた柔道授業が、柔道整復師養成課程学生の学習認識にどのような変化をもたらすかを検討することを目的とした。

【対象と方法】

柔道整復師養成課程を有する大学学生 48 名を対象にアンケート調査を実施した。調査は 2025 年 4 月 24 日および医学的視点を含めた柔道授業実施後である 2025 年 10 月 12 日の計 2 回実施した。調査項目は、集中力、基礎医学知識、専門知識理解、外傷発生機序の理解、姿勢・バランス理解、安全管理意識、動作分析、理論と実技の関連理解、臨床判断力等とした。回答は 5 件法とし、「とてもそう思う」「そう思う」を肯定的回答として単純集計を行い、各項目の割合（％）を算出した。

なお、本研究は環太平洋大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：IPU 倫理 25-決 007）。

【結果と考察】

回収数は 1 回目 48 名（有効回答 48 名）、2 回目 48 名（有効回答 48 名）であった。肯定的回答の割合は、集中力向上が 33.3％から 60.4％、基礎医学知識習得が 29.1％から 58.3％、専門知識理解が 37.5％から 66.7％へと増加した。また、外傷発生機序の理解は 35.4％から 68.8％となり、比較的大きな増加傾向がみられた。

一方、姿勢・バランス理解は 52.1％から 60.4％、動作分析力は 41.7％から 47.9％、臨床判断力は 35.4％から 43.8％であり、臨床応用に関連する項目についても一定の増加傾向はみられたものの、基礎的学習効果に関する項目と比較すると変化の幅は限定的であった。

以上より、医学的視点を取り入れた柔道授業は、集中力、基礎医学知識、専門知識理解などの基礎的学習認識と関連する可能性が示唆された。特に、柔道動作を外傷発生機序や専門知識と関連づけて指導することにより、理論と実践を統合的に理解する学習認識の形成を促す可能性が考えられた。一方、動作分析や臨床判断力などの応用的認識については変化が限定的であり、これらを高めるためには、継続的な教育介入や臨床教育との連携が必要であると考えられた。

【結論】

柔道授業は、柔道整復師養成課程学生における集中力や医学知識理解などの基礎的学習認識と関連する可能性が示唆された。また、医学的視点を取り入れた柔道授業は、外傷発生機序や理論と実技の関連理解を促し、基礎的学習認識から臨床応用的認識へと発展させる教育的手法となる可能性が示された。

商業施設における未経験親子向け柔道体験イベントの受容性評価 — 地域柔道普及の入口としての可能性に着目して —

○窪田 友樹（朝日大学）

【目的】近年、柔道人口の減少、とくに少年層や未経験層が柔道に触れる機会の不足が課題となっている。一方、柔道場や学校体育以外の場で未経験者が柔道に接する機会は依然として限られており、日常生活空間での体験機会の創出が求められている。そこで本研究は、商業施設という日常的な空間で実施した未経験親子向け柔道体験イベントについて、保護者アンケートを用いて参加者の受け止め方および柔道への関心の変化を把握し、地域柔道普及の入口としての可能性を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。

【方法】対象は、2025年8月24日に岐阜県大垣市内の大型商業施設で実施した柔道体験イベントに参加した未経験親子のうち、調査協力に同意した保護者とした。イベントは10時から16時までの4部構成で、各部約20組を目安に運営した。体験内容には、初心者が取り組みやすい導入的プログラムとして、リズムを取り入れた動きや交流的要素を含む活動を取り入れた。参加対象は主に幼児から小学校4年生程度の子どもの保護者であり、兄弟での参加や、保護者が見学に回り係員・補助学生が子どもの相手役となる場合もみられた。会場全体では見学者を含めて約150名が来場した。調査はイベント終了後に無記名アンケート調査として実施し、32件の回答を得た。アンケートは選択式6項目と自由記述1項目で構成し、自由記述には32件中16件の記述がみられた。記述内容は共通する傾向に着目して整理した。

【結果および考察】イベント全体の満足度は「非常に満足」66%、「満足」34%であり、否定的回答はみられなかった。子どもの楽しさについては「とても楽しんでいた」78%、「ある程度楽しんでいた」22%で、全回答者が肯定的に評価した。柔道への関心の変化については「とても高まった」47%、「少し高まった」50%、「あまり変わらない」3%であり、97%の回答者が関心の高まりを示した。大学生スタッフの対応については「とても良かった」75%、「良かった」25%であった。今後の参加意欲については「ぜひ参加したい」56%、「機会があれば参加したい」41%であり、97%が参加意欲を示した。自由記述では、「初めは怖がっていたが簡単な動きで楽しめた」「普段柔道に触れる場所がないのでこのようなイベントは良い」「楽しく動く中に柔道の動きが組み込まれており身近に感じた」など、安心感・親しみやすさ・継続参加への意識が共通して確認された。以上より、商業施設という日常的な空間での柔道体験は、未経験親子に概ね好意的に受け止められたことが示された。

【結論】商業施設における未経験親子向け柔道体験イベントでは、高い満足度、子どもの楽しさ、柔道への関心向上、再参加意欲が確認され、保護者から概ね好意的な評価が得られた。自由記述からは、安心して参加できたこと、柔道を日常的に身近に感じたこと、継続参加への前向きな意識が示された。これらの結果は、商業施設を活用した地域柔道普及の入口としての可能性を検討するうえで有用な基礎資料となると考えられる。一方で、本研究は保護者による事後評価に基づく受容性の整理であり、体験前後の変化や心理的影響を直接検証したものではない。今後予定している第2回イベントでは、前後比較を含む評価方法や心理尺度の導入を検討し、より精緻に柔道体験の意義を明らかにしていくことが課題である。

いきいき空手プログラムの作成（第1報） －健康の維持・増進に対する空手道の可能性－

○水田洋平（伊藤整形外科）、末次美樹（駒澤大学）、鈴木浩司（日本大学）、
谷木龍男（東海大学）、飯出一秀（（公財）全日本空手道連盟）、
村田利衛（（公財）全日本空手道連盟）

【背景】近年、少子高齢化に伴い高齢者の健康維持・増進や転倒予防の重要性が高まっている。高齢者では加齢に伴う筋力低下、バランス能力低下、活動量低下が問題となり、この対策として継続しやすい運動プログラムの構築が求められている。

世界保健機関は転倒予防を世界的課題として提言しており、近年では武道や伝統的運動を活用した健康増進への取り組みも報告されている。太極拳ではバランス能力向上や転倒予防への効果が示唆されており、柔道でも（公財）全日本柔道連盟において転倒外傷予防指導員資格制度が整備されている。また海外では、特にスウェーデンにおいて「Judo4Balance」が実施され、高齢者の身体機能向上や転倒予防能力改善への取り組みが進められている。

（公財）全日本空手道連盟においても東京2020オリンピック後に「競技の魅力だけではない空手道の社会的価値」に着目し、その活用について検討が進められている。特に高齢者の健康維持・増進に対する空手道活用の必要性が重視され、高齢者向け空手プログラム作成に関するワーキンググループが立ち上げられた。

【目的】空手道は、専用の道具や設備・施設を必要とせず、狭いスペースや単独でも練習が可能である。また、その基本動作は左右対称な運動を多く含み、上肢下肢の協調運動、体幹回旋運動、重心移動、姿勢制御などの要素が含まれる。さらに、段階的な難易度調整が可能であり高齢者にも実施しやすい。

本発表では、空手道の基本動作を活用した高齢者向け運動プログラムを作成し、その有用性と可能性について検討する。

【概要】本プログラムを「いきいき空手プログラム」と命名した。空手道の基本動作を基に、「突き動作」「蹴り動作」を中心としたプログラムを作成した。各プログラムは4段階の難易度で構成し、対象はフレイル、プレフレイル、健常高齢者を想定した。

プログラム1（突き）では、上肢の押し出し・引き動作から開始し、左右交互動作、上下肢連動動作、前進を伴う動作へ発展させた。

プログラム2（蹴り）では、座位での下肢の伸展・屈曲動作から開始し、上肢支持ありでの立位、上肢支持なしでの立位、前進を伴う動作へ発展させた。

【考察】本プログラムは、まず安全性に配慮し、座位から段階的に実施できる内容とした。次に筋力、バランス能力、協調性の向上を期待して、空手道特有の突きや蹴り動作を取り入れた。そして最後に「極め」として静止姿勢で終わりとする構成とした。突きや蹴り動作から極めまでの流れは、上肢下肢の協調運動、体幹回旋運動、重心移動、姿勢制御を必要とし、身体操作能力や各部位の制御能力の改善に寄与する可能性がある。また、段階的な難易度設定により、活動性の低下や疾患を有する高齢者にも安全に提供できることから、継続的な運動習慣形成につながることを期待される。

【結論】今後は実践例や身体機能評価を通じて、本プログラムの安全性および有効性について、さらに検討を進める必要がある。

原馬室獅子舞棒術に伝承される武術的要素（第二報）

○渡邊 峰雄（日本薬科大学・Hanzendon 学芸研究所）

【背景および目的】埼玉県鴻巣市原馬室には、獅子舞とともに棒術・太刀術が伝承されており、地域の祭礼における奉納芸能として継承されてきた。原馬室獅子舞棒術では、木太刀、六尺棒、真剣などを用いた多様な演目が伝えられており、芸能的性格を有する一方で、その身体操作には武術的技法や稽古体系の痕跡が含まれている可能性がある。昨年度は、「一箇」「三箇」「五箇」「七箇」を対象に、木太刀を用いる演目にみられる間合い、打ち合い、手の内、太刀筋等について検討した。本報告では、そのうち「五箇」および「七箇」に焦点を当て、真っ向斬りに対する体捌き、斬撃が可能となる間合い、ならびに太刀筋の制御について考察を深めることを目的とした。

【方法】原馬室獅子舞棒術保存会の稽古見学、保存会関係者への聞き取り、ならびに映像資料の観察を通じて、各演目に含まれる身体操作を検討した。解析にあたっては、構え、足捌き、木太刀の軌道、相手との距離、打ち合いの位置に注目した。また、必要に応じて周辺地域に伝わる武術や、古流剣術・棒術にみられる身体操作を参照しつつ、保存会の皆様に確認を行い、伝承内容から離れた過度な解釈とならないよう留意した。

【結果および考察】原馬室獅子舞棒術の木太刀演目は、段階的に危険度と技術的要求が高まる構造を有する可能性がある。「一箇」から「三箇」では、木太刀を打ち合わせる動作が中心であるが、基本的には刀が身体に届かない比較的安全な間合いで行われ、間合いの把握や太刀筋、手の内を学ぶ初歩的段階と考えられる。これに対して「五箇」では、相手の真っ向斬りに対して体捌きによって斬線を外す動作が加わる。特に「刀折り」と呼ばれる動作では、一方が刀を肩に担ぎ、その刀に向かって相手が真っ向から斬り下ろす構成がみられる。この動作は、名称からは刀を物理的に折る技巧を想起させるが、実際には正中線上で斬撃を受け止めるのではなく、体捌きによって相手の太刀筋を無効化する技術を示すものと考えられる。肩に担いだ刀を打たせる構成は、斬撃の軌道と体捌きの効果を観客に明瞭に示すための演武上の工夫であり、奉納芸能としての演出的効果や緊張感を高める要素を含むと考えられた。一方、「七箇」の終末部では、両者が左足を前にして上段に構えた後、互いに右足を踏み込みながら右袈裟に斬り込み、双方の木太刀を合わせて終了する。この動きは単なる終止動作ではなく、相手の首または肩口に刀が届く距離、すなわち実際に斬撃が成立する間合いを確認する稽古として理解できる。「一箇」から「三箇」にみられる安全な間合いでの木太刀操作、「五箇」にみられる体捌きによる斬線の回避を踏まえ、「七箇」ではさらに一歩進んで、互いに斬撃が成立し得る距離まで踏み込んだうえで、身体ではなく木太刀同士を合わせる構造となっている。これにより、実際には身体に当てることなく、斬線、踏み込み、間合いを確認し、斬れる距離に入った際の緊張感と太刀筋の制御を学ぶことができる。また、同時に右袈裟で斬り込む形式であることから、相打ちとなり得る距離の危険性を体感させる意味も含まれていると考えられる。以上より、五箇および七箇は、奉納芸能としての演出性を備えつつ、武術的身体操作を段階的に伝える演目として位置づけられる可能性が示唆された。

【謝辞】本研究にご協力いただいた原馬室獅子舞棒術保存会の大杉正行会長、中島輝雄副会長、中野義春副会長をはじめ、会員の皆様に心より感謝申し上げます。また、検証にご協力いただいた双月会、二刀流クラブ、日本薬科大学剣術部の皆様に深謝いたします。

II P-9

柔術 4 流派 486 首の武道歌の計量テキスト分析から見る流派の特徴

○桐生習作（講道館）、小林勝法（文教大学）

【目的】

今村嘉雄編『武道歌撰集 上巻』（1989 年）に「柔術」として収録されている武道歌のうち 4 流派 486 首について、計量テキスト分析し、流派の特徴を明らかにする。

【方法】

分析の対象とした 486 首の内訳は、竹内流 209 首、起倒流 121 首、関口新心流 109 首、楊心流 47 首であった。形態素解析用辞書は、近代文語 UniDic を使用し、計量テキスト分析には KH Coder v. 3.02c を使用した。まず、トピック分析により武道歌に表されている内容分析を行った。そして、語と流派の関係を調べるために共起ネットワーク図を描画した。

【結果および考察】

①トピック分析

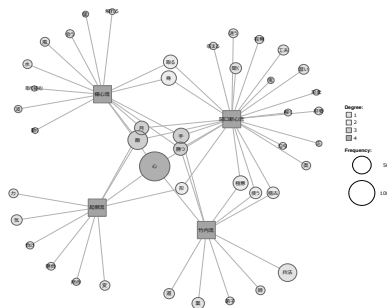
トピックモデルでは、極意理解、身体技術、精神修養、状況判断、自然観、技能修得過程、および実戦技術という 7 つの領域が生成された。そして、極意と精神統制、身体技術と自然観が密接な関係にあることが示された。

②共起ネットワーク分析

流派を外部変数として、頻出語上位 177 語による共起ネットワーク図を作成した（右図参照）。流派に共通してみられる語は「心」「敵」「勝つ」「手」「月」「取る」「身」「極意」「稽古」「使う」「形」であった。

各流派の特徴的な語とそれらが出現する歌は以下の通りであった。

- ・竹内流：兵法、業、道、師、弟子
兵法の弟子を仕立ぬ師匠こそ 花実を兼ね上手なりけり
- ・関口新心流：工夫、習い、聞く、肝要、奥、形柔、勾引、解く
稽古せば形柔に心付け 神のあつかひ工夫肝要
- ・起倒流：力、気、変、勝負、所作
うつすとも心の真を能かため 気変の両輪めぐれ円体
- ・楊心流：風、水、波、会う、解れる
捕られては水に浮木の身を持てよ 風にまかせつ浪にまかせつ



【結論】

- ①竹内流は、7 つのトピックをまんべんなくカバーしており、際だった偏りは見られない。兵法や師弟関係の歌が特徴的である。関口新心流は、やや精神修養が多く、具体的な技術に関する特徴的な語も多い。起倒流は、自然に関する比喻表現が多く、技術の理合に関する語が多い。楊心流は、自然に関する比喻表現が多く、精神修養に関する歌も多い。
- ②前述した 4 流派の共通語は、極意理解（「極意」）、身体技術（「身」「使う」）、精神修養（「心」）、状況判断（「取る」）、自然観（「月」）、技能修得過程（「稽古」「形」）、実戦技術（「敵」「勝つ」「手」）と 7 領域全てを網羅しており、柔術の伝承における重要語と考えられる。
- ③分析した武道歌は、竹内流が 209 首と多く、楊心流が 47 首と少なかった。より詳細に検討するためには、他の伝書などの記載内容でも比較する必要がある。

ご存知ですか！

全日本剣道連盟が推奨するルールを礎に、 安全用具を推進。

賠償責任保険対象商品

■SSPシール

1年間に100万本の竹刀に貼付



SSP Q1 000001
全日本武道具協同組合
※竹刀規格はQRコードから 全日本剣道連盟公認規格に基づいています

Shinai (竹刀) Safety (安全) Promotion (推進)



■安全顎

突きから喉を守る

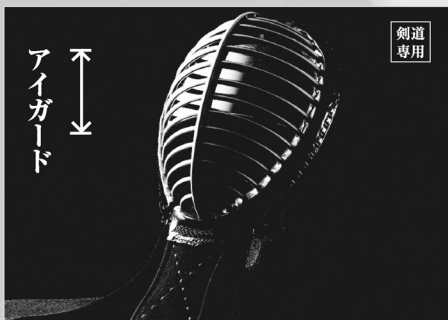


● 頸動脈突入防止
● 外見の変化なし
● どの防具にも適応

特許第5438204号

■アイガード

竹刀などの破片から目をガード！



アイガード

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大人用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

「安全対策の一つとして、初心者への剣道防具面には、必ず
備わっていることを推し進めています。」

■フェイスシールド

相手からの飛沫飛散の防止に！



フェイスシールド(一体型)

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大人用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」に
対応してフェイスシールド(一体型)を製作し、シールドの着用
を推進しています。



全日本武道具協同組合

zenbukyo.jp/



株式会社 建武堂

営業時間 AM10:00～PM7:00
(日曜・祭日はPM6:00まで) 毎週月曜定休

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-15-1 菱山ビル2F

TEL 03-3971-4840 (代) FAX 03-3971-4461

URL: <http://www.kenbu-do.co.jp/>

e-mail: information@kenbu-do.co.jp

剣士を第一に考えた 国産無垢材100%の剣道場床



当社が施工する剣道場の床は、材料支給から
施工・技術指導まで一貫してご提供いたします。

当社は環境保全のためにも国産無垢材を100%使用した弾性床構造の剣道場床
を推奨させていただいております。体育館などのウレタン塗装とは違って温かみ
があり、適度にクッションの効いた安全性の高い剣道場の床をご提案いたします。

<https://kendoujou.com>

English Site <https://architecture-dojo.com> Mail Address info@kendoujou.com

株式会社 五感 東京都江東区新木場 1-6-13 木のくに屋ビル 4F Tel:03-3522-4169 (受付時間 9:00～18:00 ※水曜定休)

建設業許可：東京都知事 許可（般-29）第 147244 号

昂ぶらず冷めず。常ならざる姿が常になる。

phiten <https://www.phiten.com>

Art Curves

剣先の運動性に繋がる
新しい甲のフォルム



速乾DRY
洗える甲手

勝利への一ミリ。

本商品はファイテン社の独自技術を取り入れたコラボレーション商品です。

世界のトップアスリートから一般の方まで
広く製品が愛用されている理由は技術にあります。



メタックスとは、ファイテンの水溶化メタル技術により、各種金属をナノレベルで水中に分散したものです。

- ◎ファイテンメタックスコーティング採用
- ◎5mm ジャージ織刺地仕様
- ◎丈夫なジャージ素材で軽く自然に握れる
- ◎サイズ：(S) (M) (L) /25,300 円 (税込)
(LL) /27,500 円 (税込)



① (S) 17.0 cm 前後
(M) 19.0 cm 前後
(L) 21.0 cm 前後
(LL) 23.0 cm 前後
② (S) 15.5 cm 前後
(M) 17.0 cm 前後
(L) 18.5 cm 前後
(LL) 20.0 cm 前後

ファイテンジャージ甲手「唯一、松興堂」



株式会社

松興堂

× **phiten**

渋谷店ショールーム

東京都渋谷区道玄坂 2-17-3 TEL. 03-3463-0471

松興堂



武道具の総合メーカー

株式会社 ヒロヤ

〒672-8048 姫路市飾磨区三宅2丁目26番地

TEL 079-234-2220

FAX 079-234-3300

創業百余年

伝統と技術を守りながら
新たな挑戦を続ける
信頼のブランド



剣道具 一分五厘手刺

グノ目刺

60本立 極上黒呂色塗胴付

森 武道具 株式会社

東京都中央区日本橋小伝馬町 6-12

営業時間：9時-19時（土曜 17時）

電話：03-3661-0469

定休日：日曜日・祝祭日

お気軽にお問い合わせください。ショッピングサイトはコチラ→



（五十音順）

日本武道学会賛助会員

- ・ 全日本武道具協同組合
(以下、五十音順)
- ・ 株式会社 建武堂
- ・ 株式会社 五感
- ・ 株式会社 松興堂
- ・ 株式会社 ヒロヤ
- ・ 森武道具株式会社



東北学院大学



仙台大学

日本武道学会第59回大会事務局

会場校

東北学院大学五橋キャンパス

〒984-8588 宮城県仙台市若林区清水小路3-1

主管校

仙台大学

〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南二丁目2番18号

第59回大会実行委員会:hr-abe@sendai-u.ac.jp

第59回大会委員会:budoshomu@gmail.com